
EYES

佐野光音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EYES

【Nコード】

N2913J

【作者名】

佐野光音

【あらすじ】

17歳のバースデーに告白してふられた阿見香。傷心を慰めていたところに追い討ちをかけて災難が。突然現れた傲慢不遜な外人男に、流暢な日本語で暴言を吐かれ絶句する。「無理。こんなやつと結婚なんかできない」

現代ファンタジー感覚のラブコメストーリー。

(シリアス傾向も含まれます。)

一部R18サイトにて平行掲載。

書籍化のため、第一部～第四部まで削除しました。

1～2巻がアルファポリスより刊行中。今後の刊行予定については、活動報告でお知らせします。

(前編・後編に分けていた第三部については、前編が第三部、後編が第四部表記になります)

EYES 1st 一章 最悪な出会い(前書き)

はじめまして。光音と申します。

拙い長編作品ですが、どうぞ宜しくお願い致します。

- お願い -

この作品の著作権は、作者・光音に属します。

設定の引用・転載等は固くお断り致します。

厳守下さいますようお願い申し上げます。

あたしは最近、ロクなことがない。

そろそろ誕生日だというのに、気が滅入ることばかり起こってる。

足を踏み外して地下鉄の長いエスカレーターを滑り落ちたり。歩いていたら麻雀荘の古い看板が落ちてきて頭に直撃しかけたり。街の中でヨダレを垂らした野良犬四匹に追われたり。暴走ダンプの下敷きにもなりかけたり。

反射神経はいい方なので、どうにか難を逃れてきたけど、十六歳の身空で遺書を書いておかなきゃならんかとも思うほど最悪続きだ。

こんなブラックな状況と気分を追い払い、心機一転するためにも、あたしは決意した。

そして、十七歳の誕生日を迎えたその日、あたしはフラれた。決意の心機一転は、見事にお先真っ暗暗転。

「気が強い女はニガテで」

即答されて、ぼう然。

気が強い？ あたしの？ どこが!？

あんたに告白するのだったって、一年二カ月半悩んだんだよ、おいつ。一年二カ月半よ？ 一年二カ月半。

四月のあの日、入学式に一目ぼれして、今年同じクラスになってからさ。どんだけ毎日恋焦がれて、ガマンしてきたと思ってるの？ 一年二カ月半、恋する乙女の自分の勇気のなさにむせび泣きながら、こっそりあんたを眺めてきたわけよ。

「おはよう」「って、声かけるのも躊躇っちゃたりして。それだけでバコバコもんよ、心臓が。」

「おはよう」「って返ってきたら、「ああ、今日も頑張って学校に来てよかった！」と、好物の苺シェイクな気分になれたわけ。それだけでも幸せだったけど、やっぱりガマンもできなくて。」

なのに、思い切ってキモチを告げた健気けなげな女の子に、そういうこと言うかよ！？

びっくりして。びっくりしすぎて、手にしていた学生カバンでバコッと殴ってしまった。

頑丈な革の鞆を振り上げながら、「今日は教科書が多い日で、しかも英語の辞書まで入ってるんだった。重くてイタイかも」とは、思ったんだけど。止められず、振り下ろしていた。

檀君は、「うっ」と声を発して。体育館の裏の湿った土の上に倒れて、ノビてしまった。

「あんだ一生、檀と口きけないね」

事後報告を待つて校門辺りにいる文月ぶんつきを携帯で呼び出して、二人で檀君を保健室まで運んだ。

「重い！」と文句タラタラで足の方を抱えてくれている文月は、小学時代からの友達で、中学も同じ、高校も同じとこに合格した上、二年でまた同じクラスになれた腐れ縁。

その後の保健室で、あたしは、養護教員とクラス担任にこつてり絞られてしまった。

「バカモノ！ 首の骨折つて死んだらどうするんだ！」と、怒鳴られる始末。

担任の大鳴、通称・怒鳴りの大鳴りに頭を数発叩かれながら、先生だつて叩いてるじゃんよ、と文句を言いたいのを堪えていた。

「大体、学生の本分は勉強なんだよつ。ナニ色づいてんだ、バカモノが。告白なんか十年早いんだよ！」

そんなこと言つてたら、三十過ぎても先生みたいに独身になるじゃんか、とは、さすがに言わない。それくらいの知恵はある。

大鳴先生の怒鳴り声で、檀君の目も覚めたらしい。運んでから五分。ほつといてあそこに置いたままでもよかったかも、と、心で毒づく。

好きなキモチなんて、一瞬で冷えきつてしまった。あたしの一年ニヶ月半は、なんだつたの？

檀君は、先生を呼び止めて、言った。

「オレ、全然平気です」

痛そうに頭を左右にひねって、動くのを確かめてから、ベッドに上半身を起こしている。

「大丈夫？ 気持ち悪くない？ 吐き気とか、頭痛とか、目がおかしいとか」

養護の先生が、檀君の顔を覗き込むようにして、質問する。
檀君は、「平気です」とはにかんで答えて。それから体をずらし
て、あたしのほうを見た。

「高橋。ごめん」

思わぬ「ごめん」の言葉を聞いて、あたしは驚いた。

何も言えなくて、彼を見ていたら、

「俺が言いすぎた。ごめんな」

もう一度、真剣な顔で、あたしに「ごめん」を言ってくれた。

……だから、好きだったんだなあ。

一目ぼれしてからも、あの真っ直ぐさというか、頭も良くて器用
そうなのにふと見せる不器用さ、男の子らしい素直なところが、ます
ます好きになっていた。

マツクのポテトとアップルパイと苺シェイクを、文月におごって
もらい、あたしは悲しくなって泣いてしまった。フラれたことより
も、いい人だって知ってたのに、とっさに殴ってしまった自分が、
ブルーだった。

「奮発してごちそうしてるんだから、元気だしなよ。こつちがおご
って欲しいくらいだよ。あんの重い檀、運ぶの手伝わされて」

泣きながらパイにかじりついていたら、呼吸と返事に詰まって
むせそうになってしまう。

「いいよ、今日はさ」

いちやもんをつけてから、文月はちょっと満足そうに笑った。

「ガマンしてたんだよね、あたし。去年の入学式からずっと」

文月が頷いて相槌を打ち、あたしも頷いて言い続ける。

「心臓バコバコでき。いざってなると、やっぱりバコバコで」
「うん」

「でも、やっぱ駄目で。いざとなったら痛いかもって思ったのに、止められなくて。やっぱりガマンできなくて。檀君が『うっ』て叫んでから、いけないことしちゃったって青くなって」

「ちょっと待って」

「でも、確かにバコバコしてて、よくわかんなかったけど」
「待って！」

手で制されてから、ぼかんとして文月を見る。

「なに？」

「あんたの話、微妙なんだけど。それは、体育館裏で、告った話でいいんだよね？」

「そうだよ」

「体育館裏で、初体験した話じゃないんでしょ？」

「違うよっ！ ナニ言ってるのっ」

「隣のテーブルの子たちが、ヘンな顔してこっち見てたよ」

「え？」

「あんたの話、微妙なんだよ。なんか、卑猥っていつの？」

文月が、微妙を繰り返して言う。

「ヒワイ？」

「ガマンできないだの、バコバコだの、痛いだの。うっ、て叫んでとか、やめれ。並べるとマジエロくさい」

「エロくさい！？ やめてよっ。文月はエロ漫画読みすぎなんだよ」
「！」

「漫画は芸術よ」

「ええ？ あのすぐに脱いじゃうやつちゃうの話が？」

「そういうのばっかじゃないし。……それより」

「でもそういうの、多くない？ この間、文月から借りたレイプものも怖かったよ？ 俺がイカせてやるとか、俺じゃないとイケない体にしてやるとか、犯されても体は正直だとか。ふざけてるよ、レイプはレイプじゃん」

「そうなんだけど。いや、そうじゃなくて。あの話は、男の心の深い闇が、癒されていく繋がりについてさ。そうじゃなくて、後ろ」

「癒されていく繋がり？ なんかやらしー」
シエイクを飲んで、ケタケタ笑っていると。

目を見開いている文月の顔がただならぬ様子だったので、何事と
思って視線の先を見た。

あたしの背後。

知らない外人が立っていた。

どう見ても外人。胸の辺りまで伸びてる、まっすぐな金髪もそう
だけど、目鼻立ちが。

サングラスをしていて瞳の色は見えなくても、背が高く、身の
こなしも日本人とは違う。

で、その外人は、あたしのほうを見ていた。正確には、あたした
ちのほう、だと思う。

ストローを加えたまま、あたしはその外人を見上げた。

文月を振り返って「知り合い？」と訊くと、勢いよく首を振り返
す。外人を眺めたままで。

「高橋阿見^{たかはしあみか}香って、どっち？」

流暢なイントネーションの日本語。

透明感のあるハスキーな声を聞いて、男だったのか、と、思う。身長が高くて、髪が長くて顔立ちも綺麗に見えるから、どっちなのか分かりにくい。

文月があたしを指差すと、

「こいつ？ さっきからレイプだのイカせてやるだの、犯されても体は正直だの、頭がおかしい発言を大声で繰り返してる、これ？」
親指であたしを示して、その外人は深刻そうに首を振った。

「最悪」

「なにが？」

カチンときて、聞き返す。

初対面の人間に、「最悪」ってなに！？ 「最悪」って！

「勘弁してくれ」

「はあ！？」

その男が振り返ったので、後ろのほうに違う外人がさらに二人いるのが目に入った。男性と女性。肌が浅黒っぽい、背の高いモデルみたいな男性と、向日葵色の金髪でふわふわ頭の、凄く綺麗な女性だった。

「失礼よ、ミハイル」

女性も流暢な日本語で言い、心から申し訳なさそうにあたしを見た。

「念のためと、どっちか訊ねてみたが、最悪としか言いようがない。失礼もなにも、女扱いどころか人間扱いもできないね、こんなやつ」

「だからあんた、さっきから何なのよ？」

夕方の、混雑しているマツクの中は、静まり返っていた。

この外人三人がやたら目立ちすぎて、誰も彼も度肝を抜かれて見入っているらしい。あたしだって、こんな三人、雑誌でも、テレビでも見たことないくらい。

でも凄く腹が立ってて、この三人と一緒に注目を浴びてるのを気にしてる余裕もなかった。

「あんた？」

サングラスの奥で、男が目を細めたのがわかった。

「あんだって、すごいひどいこと言ってるじゃん。文句ある？」

「バカはすぐにケンカを売る」

「はあ？」

「ミハイル！」

女性が割って入ろうとした時、再び首を振ったその男が身を翻して立ち去ろうとした。

「無理。こんなやつ」

「そうは言っても」

歩き出すのを止めてくる女性の手を避けて、肩越しにチラッとあたしを見た。

「こんなやつと結婚なんかできない」

……………結、婚？

ケツコンソー！？

とつさにその外人の腕をつかんで、

「こつちこそごめんよっ」

怒鳴っていた。

「なに言ってるの？ あたし、あなたのことなんか知らないし！

あなたのほうがよっぽど頭、おかしいよ。イカれてんじゃないの？」

「他人への口の利き方も知らないのか」

「ヒトに言える言葉！？」

「触るな。バカが移る」

気づいたときには。その外人の頭がピンク色になっていた。

金髪も、黒いサングラスも。
顔から胸元にまで、ピンクの流れが滴っている。

飲みかけの苺シェイクの中身を、その不愉快極まりない男めがけて、ぶちまけていたらしい。怒り心頭で。

そして、呆然としている男にさらに、クシャツと潰したシェイクのカップを投げつけた。

「なにふざけてんのか知らないけど。こっちこそ願い下げだわ、あんたみたいなの。この世から男が全部いなくなっても、あんたなんかまっぴらゴメンよ」

啖呵を切って、文月に「帰ろう」とうながし、集まってきていた人波を掻き分けて店の外へ出た。

文月が、目を白黒させて、息を切らしながらついてくる。

「どういうこと!?! どういう知り合いなの!?!」

「知るわけないじゃんっ、あんな失礼なの!」

「でも、名前言ってたよね? 高橋阿見香って」

「関係ない。たまたまでしょ」

「いや、アミカはあんまり見かけない名前だよ」

言うてから、走り歩きのあたしの腕をグイッとつかんで止まらせた。

「結婚って、なんなのよ? 阿見香っ」

「だから、あたしも何も知らない」

「あんた、今日、檀に告ったばかりじゃん? なのに、結婚って、なんなの!?!」

文月に攻め寄られて、さっきよりもどんどん、脳ミソが混乱して

きた。

「だから、知らないんだって!!」

スクランブル交差点の真ん中で、叫び返していた。怒り心頭。ア
ンド。超パニックで。

あたしの父親は、外国人だったらしい。らしい、というのはい、一
緒に暮らした記憶がないから。あたしが三歳の時に亡くなって、う
ちには写真が一枚あるだけだ。

しかも、お母さんは、その人と籍を入れずにあたしを産んで、認
知もされなかったので、あたしは私生児になっている。

俗に言うハーフの生まれ、なんだけど、お母さんの血が強烈に濃
すぎたのか、あたしはどっからどう見ても日本人そのものに育った。
髪の色、肌の色、顔の作りも体型も、日本人のもの。

でも、よくよく見ると、まつ毛が長いとか、肌が白いとか、鼻筋
が外人ぽいとか、足が長めとか、言われる。それも、お父さんが外
国人と聞いて、じっくり観察されて、「そっいえば……」と気づく
程度。

ただ、瞳の色は、普段は黒なのに、太陽の光を帯びるとちよつと
緑色がかって見える、フシギな色をしてるらしい。

外でよく鏡を見てるわけじゃないので、自分じゃよく分からない。

微妙にチャームポイントかな、と思ったりはする。悲しいことに他にはナイとも言えるけど。

生まれも育ちも日本で、外国に旅行に出たことすらない。あたしにとつて外人も外国も、遙か彼方の存在だった。それがいきなり、名前どころか、国籍も知らない外人と、結婚つて。

ありえないでしょ。

お母さんは、世間で言うシングルマザーであたしを育ててくれた。母一人子一人の生活は、けっこう悪くない。十年は住んでいる六畳二間のアパートで、仲むつまじく暮らしている。

夕食の支度をしていると、お母さんが帰ってきた。

仕事で遅くなる日が多いから、あたしが晩御飯の支度の大半を担当している。

「今日はなに？ え？ 野菜炒め!？」

「豚肉入りだよ。あとは温泉卵をのせた冷や奴、コチュジャン風味と、おみそしる。上等じゃん」

文句でもあるの？ と口を尖らせたら。せつかくの誕生日にと咳いて、肩を落としている。

あーそうだったつ。忘れた!!

失恋のショックと、あの無礼者のパツキンのせいだ。

「誕生日なのに、あなたに食事の支度をさせてる私も悪いんだけどね」

ケーキは買ってきたからと、テーブルに白い箱を置く。結構大きそうで、かなり奮発してくれたみたいだ。給料日前なのに。うちは貧乏ではないけど、余裕がある生活でもない。

指についたコチュジャンを舐めながら、「ありがとう」と、気楽に言う。恥ずかしさが先立って、子供の時のバースデーみたいに大袈裟に喜ぶのが、もう出来ないお年頃だ。

「プレゼントは、お給料が出てからね。ボーナスも入るから。もう少しガマンしてて」

「いいよ。別に」

嬉しいけど、無理しないで欲しい。そんなことも、言いにくくて突き放した言葉になってしまった気がして、仕事着のスーツを脱ぐ母親から、目をそらした。

毎日一本だけ飲む350mlのビール、お母さんの楽しみを、コップに注ぐ。

「生き返るわ」なんて喉を鳴らして飲んで、満足そうに息をつかれると、あたしも安心する。

「阿見香も一口どう？」

「ごくたまに、一口だけ付き合う晩酌。未成年だけど、ちょっとだけ。」

「これをおいしいとは、なかなか思えないね」

苦さに口をゆがめたら、

「早く大人になりなさい」

冷や奴をほお張って、笑っている。

早く楽させてあげたいな。まだ、時間はかかるけど。

あたしは、マザコンなんだと思う。だから時々、記憶にない父親を、責めたくもなる。

なんで、お母さんをシングルマザーにしたの、って。死んじゃったから、だけじゃなくて。なんで、認知もしてくれなかったの、って。

あたしは、望まない子供だったのかもしれなくても。お母さんの

事をちゃんと思いやつてくれてたら、認知しないとかありえない。ご飯を食べながら思いつつ、ふと顔をあげた。

「お父さんの写真、あったよね？」

「ええ？ あるけど」

たぶん、十年近く、あたしは父の写真を見ていない。見たくなかったから。

父親がいないって、幼稚園でもいじめられて。父なんか嫌いだと、ずっと思っていた。

見てもいい？ と言うあたしに、お母さんは、どういう風の吹き回しかしらと言いながらも、どこか嬉しそうだった。寝室の鏡台へ行き、引き出しを開ける。

そんなところにあつたのか、と、眺めているうちに、綺麗な銀細工の写真盾に収められた古い写真が、目の前に置かれた。見知らぬ外国人と、まだ若いお母さんがいて。それから、男性の胸に抱かれている、白いおくるみに包まれた赤ちゃん。

「これ、あたし？」

「そうよ」

お母さんが、幸せそうな笑顔で頷く。写真で見ても、分かる。赤ちゃんのあたしが、そつと慈しむように抱かれているのが。小さい頃に見たときには分からなかった、愛情みたいなものが、伝わってくる。

「すごく、ハンサムな人だね」

素直に、そう思う。で、あたしはやっぱり、どこもかしこも母親似なんだなって。

いや、お母さんが、ブスだとは思わないけど。平均的な東洋人顔っていうか。娘の感想に、お母さんが微笑んで。少女みたいに、はにかんでいる。

「どういう人だったの？」

訊くと、

「……また、追々、話すわ」

寂しそくに、答えた。

「一つだけ。阿見香。あなたの名前は、この人が名付けたのよ」

「そうなの？」

「漢字は、私が考えたの」

言いながら、あたしを見つめた。

「瞳が、お父さんと似てるのね」

「そうかな？」

写真と見比べる。

「とても美しい、エメラルド色の眼差をしていたの」

写真を見ながら、あたしは、別のことを考えていた。

今日会った、外人に、どこか似ている気がする。あの人は、サングラスをしていても顔立ちの綺麗さが分かる、ズバ抜けたの美貌の持ち主だった。

それと比べると、ハンサムさでは、写真の中の父のほうが半分以下に劣るけど。どこがって言えないものの、どこか、似ているように思えてくる。

同じ外人で、白人だからかもしれない。日本人が、海外の人から見たら、見分けが付きにくいっていうのと、同じかも。

「阿見香？」

「なんでもない」

言つて、別な質問を返す。

「なんで、アミカ、つて名前を、つけたのかな？」

お母さんは、しばらく黙つてから、

「分からないわ」

呟いた。

次の日、教室に入ると、真つ先に檀君と目があった。

「げっ、と思つたものの、気まずさはぐらかしたくて、「ゴメン」と手を合わせる仕草をしたら、「いいよ」つてカンジで苦笑してくれた。

「やっぱ、いい人かも。と、昨日に続いて再認識。人差し指でちょっと手招きされたので、ドキドキしながら檀君の机のそばに寄る。

檀君が、周りにさつと目をやった。クラスメイトが聞いていないか、確認してらっばい。

「なに？」

「昨日のことなんだけど。……まあ、お互いに、気にしないでいいかい？」

「ああ、うん。そ、そうだよな」

つて言われても、あたしは気にするけどさ。

「つてか、あたしも、ものすごく……つてわけで、言ったわけじゃないし」

全然、そうじゃないんだけどね。

気にしないで、つて意味で言つたら、

「クラスメイトとして、ま、これからもヨロシク」

あえて気にしないって苦笑を見せて言うてから、声をひそめて。

「俺、別に、嫌いってわけじゃないよ？ 昨日、言いそびれたんだけど」

「……そうなの？」

「大人しいほうが好みつてのはあるけど。高橋のこともそこまでよく知らないから、答えに困って、とっさに、へんなこと」

「でも、昨日、気が強いつて」

「いや、それは分かるよ」

「そう？ あたし、気が強い？ 自分じゃ、まだまだだなんて思うんだけど。気弱すぎて」
「……………」

檀君の目が笑ったまま、沈黙している。

「自分観察苦手？」

訊かれて、

「あ。それは得意」

普段から自認してるので、正直に答えたら。檀君てば、お腹を抱えて笑い出した。

そんなに派手に笑うと、他の人たちに注目されて、二人で何を話してるかって怪しまれそうと、あたしが慌ててしまう。

「むっちゃ天然入ってんだな」

笑いを止めずに言う。

「檀君つて、よく笑う人なんだね」

明るいは知ってたけど、近くで二人だけでこんなに長く接したことがないので、新鮮に思えた。

「俺？ ああ、ヤバイキノコ食ってんじゃね？つて、たまに言われ

る」

ヤバイキノコ。笑い草のことかと訊くと、頷きながら言った。

「俺のこと、檀君じゃなくていいから」

「え？」

「みんな、ヒリって読んでるし。それでいいよ」

気軽に言われて、「実はヒリって読んでみたかったの！」と言いそうになり、口を押さえる。さりげなく。

檀、聖。ヒリ。本名のヒジリからとって、みんなヒリと呼んでいい。

檀君にとっては、こだわるトコロではないらしい。男子も女子も、そう呼ぶ人が多いから。

そうする、と、何気なさそうに答えて。じゃあ、と、席を離れた。

長話をしてると、目に付くし……と警戒していたそばで、三、四人の女子の塊の顔がこちらを見ていた。いつも、「ヒーリィ、やだあ」とか奇声を発して、檀君に絡んでる子たちだ。

中の一人は、ファッション誌の読者モデルに選ばれた事があるとかいうお洒落好きな子で、その子が中心にいてグループになっていく。気が合うとか、合わないとかはともあれ、まったく違う価値観の子たちだなと思って、同じクラスになってから一言も話していない。

化粧は禁止の高校で、マスカラをつけた目をこっちに向けて、睨んでいる。あたしは、見なかったふりで自分の席についた。なんか言われてたら言い返せばいい。それだけのことだ。

鞆から出した教科書を机に突っ込みながら、「あれ？」と思う。

急いで教室を見渡して、文月がまだ来ていないのにようやく気づいた。

あたしより早く登校しているのに慣れていたので、珍しくて、もう一度室内を確認する。

いない。休みなのかな？ どうしたんだろ。

予鈴が鳴って、遅刻ぎりぎり飛び込んできた時には、更にびっくりした。

どうしたの？ と、視線を送る。でも、気づかなかったように、文月は視線をそらした。

見ていたのに。まさか、昨日の夕方の一件を、まだ怒ってるのかな。あのバカ外人のせいだ。

授業が始まると携帯使用は厳禁なので、机の陰で手早くメールを送る。

『遅かったね。何かあったの？』

二分ほどで、返信があつた。『後で話す』

返信が来たことに安心して、携帯を机にしまう。

怒ってるわけではなさそう。よかった。そう安堵したのも、つかの間だった。

「えー。今日は突然なんだが。転校生を紹介する」

大鳴先生が咳払いを言い、教室のドアから顔を出した。数秒を置いて、現れたその顔に、あたしは言葉を失う。

……あれは……あの男は。

一瞬、ここはどこ?? と、辺りを見回してしまった。

斜め後ろの文月を振り返ると、口元にそつと人差し指を当てるジエスチャー。

ん？ どういう反応！？ え？ 来ることを、知ってたってこと？

なに？ どうして？ どういうこと！？

「転校生の、ミカエル・ス……ス、マクラグドス君だ。……しかし、背が高いねえ、君。先生の三倍はありそうだな」

場を和ませる冗談のつもりなのか、慣れない笑いにチャレンジして、一人で乾いた笑いを浮かべる。「いや、三倍もあつたら化け物ですよ、大鳴先生」とは、誰も突っ込まない。

クラス中が、そんなことも思いつかない呆然とした空気で、一点を見つめていた。

あの、外人。

あたしが昨日出会った、あの不愉快極まりない男の顔を。

見間違えるハズがない。サングラスがなくても、同一人物だと断言できる。

どう逆立ちしても、高校二年には見えない態度とツラ構えで、あの外人が制服を着て立っている。

公立高にはかなりオシャレと噂されている濃紺の学ランを、パリコレのモデル服さながらに着こなして。

……制服に見えない。どこの国の王族に仕えるお仕着せのよう

な。身近に例えれば、高級ホテルのホテルマンのような。行ったことではないけど。

六月に入って制服が夏服になっても、梅雨の肌寒い日は、学ランでくる男子も多い。白い清潔なシャツと、濃紺のネクタイの夏服も、この人なら素敵に着こなせそう。

って、ホメてどうするよ、あたし！ それどろじゃないっ！！

「えーっと。みんな、びっくりしてるな。そうだな、じゃ、自己紹介を」

大鳴先生が、持て余した指揮棒を投げるがごとく、さっさと外人に言葉を託す。

「只今、ご紹介に預かりましたミカエル・スマクラグドスです。国籍はギリシヤです。名前の読み方はギリシヤ語読みではミハイルになります、どちらで呼んで頂いてもかまいません。宜しくお願います」

ギリシヤ国籍。

腹が立つくらい流暢な日本語で、「外人なのか！？ 高校生なのか！？」と誰もが疑う整った挨拶を手短かにされ、一同あ然。

大鳴先生もかなり困った様子で、頭を掻いている。

四月からこれまで、こんなに困った顔をする先生は見た事がない。怒鳴りの大鳴りと全校で有名で、皆から避けられていて、生徒に隙のある態度を見せる先生じゃないのに。

「じゃあ、席は……そうだな。高橋の隣り。高橋大吾じゃなくて、女子な。阿見香のほう」

「は？」

手を上げて、と言われる前に、あたしは即座に反応してしまった。しかも、大声で。

「は？ じゃないだろ、高橋」

いつもなら怒鳴ってる所で、先生が受け流した。

いや、でも、あたしの両隣りは空いていないわけで。思ったところ、

「倉持。おまえ後ろに移動して……と言いたいところだが、ス、スマクラグドス君、背高いんだよなあ。一番後ろじゃないと……どうすっかな」

慣れない呼び名にどもり、あたしの隣りの倉持君に指図しながら、迷いだす。すると、

「後ろでいいです」

あの男からのひと声。

「じゃ、とりあえず、一番後ろの空いてる所で。後で席替えでもいいな」

先生の君付けにも、しゃあしゃあと意見をする転校生にも、呆気にとられて。皆が、教室の後ろへ行く外人を見つめた。

美しく背筋の伸びた後姿は、思わず見惚れそうなほど。均整の取れた肩幅や頭身、腰にかけてのラインも、足の長さも、日本人のものではない。

全校中の男子を、一瞬にして敵に回す存在だわ、これは。

昨日は解いていた金色の長い髪は、一つにきちんと束ねられている。学校指定の上履きではなく、黒いレザースニーカーを履いている足元まで、何か嫌な感じ。

椅子を引いて席に着くと、皆が一斉に前へと向き直る。

いつまでも見ていたらマズイような、「いつまでも見てんなよ」的な、ピリツとしたオーラを発しているからだ。

あたしは、前から二列目の席から、文月のいる席とは反対側の、ずっと斜め後ろを眺めた。

あの男。一度もこっちを見なかった。先生が、あたしの名を呼んだときも、あたしが即座に反応したときも、こちらを見なかった。

目をあわせる意志がないのを見てとって、あたしはカチンと来ていた。

上等じゃんよ。世界で一番気に入らない男から、宇宙で一番嫌いな生き物になっただけだわ。

最悪な出会い 2

休み時間になっても、教室は静まっていた。あの迷惑すぎる存在感のせいで。

少しづつ椅子の動く音、ひそひそ話す音が広がって、あたしも文月に話しかけようとする。

そこへ、これまで一言も口を利いたことのないあの読者モデルの子が、声をかけてきた。

「あの人、知り合いなの？」

ポカンとしているところでそう訊かれたので、「全然」と、即答する。

「でも、先生が、席を高橋さんの隣りにしようとしてたでしょ？」

「両隣り空いてないのに」

「そうだね。でも、結局後ろになったし」

「なんで空いてない所を、って、他の人とも話してたの」

「あたしも知らないの」

「目が悪いとか？」

文月が割って入ってきた。そうかも、と、素直にあたしが頷いていると、

「なら、一番前にするはずじゃない？」

その子が食い下がってくる。

「でも、まじ、知らない人だから」

「どこかで顔を見たとか、そういうことは？」

スルドイ。さすが読者モデル。ってのは、関係ないか。

「さあ。どこかですれ違ってたとしても、向こうがこっちを忘れてるでしょ」

はぐらかして言うと、そうね、なんて納得された。そこ、肯定するところなの？ と、疑問も芽生えたものの、これ以上の追求はないならと放っておく。

「島谷さんの事なら覚えてるかもね。学年でも目立って可愛いし」
文月が丸く治める口ぶりで言い、彼女ははにかんで笑った。

「今度ねえ、また雑誌に載ることになってー」

聞いてない情報を、機嫌よく話してくるので、あたしも文月も暫くのつて会話をした。目立ちたがり屋なのは置いといて、単純で分かりやすい性格かもと、思いながら。

席を離れた彼女を見ながら、「島谷さんていうんだっけ。忘れてた」とぼやくと、「名前くらいは覚えておきなよ」文月が呆れている。

「単純そうで悪くはないかもね」

悪口じゃないけど、と感想を述べたら、

「自分だってけっこー単純じゃん」

速攻で返され、自覚はないので、そうかなあと首を傾げてみる。

「ところで、今日の遅刻。後から話すって、なに？」

切り出したところでチャイムが鳴った。休み時間の十分は短い。

また後でね、となって、仕方なく話を中断する。去り際に「一言だけ」と、文月が呟いた。

「あの外人、かなりヤバイかも」

文月には、思わせぶりなことをチヨロツと言う癖がある。案の定、授業の間、あたしは落ち着かなかった。

ヤバイって？ ヤバイって何が？ 何があつたの？ 文月ってば。

チラッと、あの外人のほうを振り返ってみる。こっちを見てたら

まずいなと思ったけど、見ていなかった。

携帯をいじっている。堂々と。

授業中はダメだって、聞いてないの？

つか、考えればやばいって、分かるでしょ？

早々に、先生に注意されて焦るのを内心で期待していたら、数学の先生は何も言わなかった。あんな隠さずにいたら、気づくだろうに。

授業の終わる数分前、もう一度そっちを見たら、まだ携帯をいじっていた。

転校初日から、あの態度はどうよ？ やっぱ、最悪だわ、あいつと、眺めていたら、檀君、じゃなくて、ヒリと目があった。あと、あの外人の席の、ちょうどライン上にいるから。ヒリは、自分を見ているのかと思っただけ、ちょっと微笑んだ。

あたしも、不機嫌さを慌ててひっこめて笑顔を見せる。その途端、頭に走った衝撃。

「高橋、何よそ見してんだっ」

教科書でアタマをぶたれた拳句、

「最後の問題、おまえ解いてみる」

指されてしまった。マジで！？ アタマは痛いわ、焦るわ、気は動転するわ。

しかも、問題どこだか分かんないし。解き方すら聞いてなかったし！

正直に言うしかないなので、さっさと「分かりません」と答えたら、もう一発ぶたれた。

「明日、もう一回指すからな。勉強してこい！」

昼休みは、小雨が降っていた。梅雨らしい曇り空で、文月とあた

しは、教室でお弁当を広げることにする。

教室のドアの窓には、珍入生を見学にきた生徒、他のクラスの主に女子たちが、キャアキャア喚きながら張り付いている。あの外人は、教室の隅の自分の席で、我関せずとミネラルウォーターを飲んでた。メシ食わないでいいんかい、なんて、心配なんかしてやらない。

また携帯いじっているし。ケータイ中毒じゃないの？

「まさか、携帯小説マニアなんてことは」思わず文句が口に出たそれに、文月が、「ありえないでしょ」と、冷たく言った。

「あの人さ。ゆうべ、うちに来たんだよ」

ひそめた口調で文月が言い、あたしは、お弁当を食べてる箸を床に落としそうになった。

「なんで？」

仰天状態で、ヒソヒソと訊き返す。

「タイミング良く私が出てよかったよ。外人がいきなり来て、しかもあの顔でしょ。親に見られたら大騒ぎになってたよ。」

学校行くけど、自分の顔を見たとか、誰にも言うなって。知らん顔してろって。阿見香と自分が顔見知りだとも、人に言うなってさ」

「なにそれ!？」

叫びそうになるのを、辛うじて抑えた。

文月は、不愉快そうに首をふる。あの外人の方は見ようともしない。

「拳句、“電話一つで、君のお父さんの職無くすのはすぐに出来るよ。約束できる？”ってさ」

箸を持ったまま、息を呑むあたし。

「それ、脅迫？」

「でしょ」

「何でそんなこと！？ だいたい、なんで文月の家を知ってるの？
なんなの、あの人！」

「学校の名簿」

「名簿？」

「何でうちを知ったのか聞いたら、そう言ってた。マックで、文月
って名前聞いてたみたい」

「どうしてそこまでするの？ そんなことされる理由、ないよ！」

「言えるのは、阿見香の身边は、くまなく調べられてそうってこと。
尋常じゃないよね」

更に声を潜めて、

「まさか、ストーカー……」

呟くと、文月も深刻な顔でこつちを見た。

「わかんないけどさ。気をつけたほうがいいよ。学校にまで潜りこ
めるって、普通じゃない。名簿も見れるってことは、先生も丸め込
まれてるんだよ」

「ストーカーって、転校してきて、生徒のふりしてまで、嫌がらせ
すんのかな？」

「聞いたことないけど。タダモノじゃないのは確かだよ」

予想もしなかった話に、あたしは大きな溜息をつく。

なんなの！？ あの男は。 初対面のあたしに、突然、不愉快な
ことを言ってきたかと思えば、学校に現れて。友達のことまで調べ
て、脅迫して。

「じゅめん」

腹立たしさとムカムカしながら、文月に謝った。

「なんで？」

今度は文月が訊いてくる。

「いや、あたしの方に心当たりはないんだけど。でも、文月にまで迷惑かけて。ごめん」

「阿見香が悪いんじゃないし」

「そうなんだけど。でも、こうしてしゃべってくれて、ありがと。フツー、そんな嫌な思いさせられてたら、あたしと話すのもイヤになるでしょ」

「嫌っていうか、理由が見えないだけに不気味だけど、あんたのことも心配だしね。しかし、いろいろ立て続けにあるよねえ。生傷が絶えないと思つたら、今度は変な外人が登場するし」

「ご心配、どうも」

お弁当から、エビフライを取って、文月に渡す。

「それじゃちよつと安いなあ」

「今度、おごるから」

「マツクのエビフィレオ、三回分で手を打とう」

三回分。抗議の言葉をのみこむ。それで友情が保たれるなら、有難いと思わなければ。

了解、と、返事をする、と、さっきまでよりも明るい顔をして、文月に満足げに頷かれた。

しかし。どこまで不愉快、迷惑なやつなんだ。あいつは……！

「悪かったな、さつき」

昼食でバラバラになった机を戻してたら、檀君、ではなくて、ヒリが、謝ってきた。

「何の話？」

「数学の。なんか高橋だけ怒られてて」

まったく彼には落ち度はないことなのに、謝られてしまった。でもそこで、「あなたが原因じゃないよ」とか、「あなたを見てたんじゃないよ」とか、律儀にかぶせるのも、微妙すぎる。

気にしないで、とだけ、答えておいた。

「数学、今日のところ、マジで分かんなかった？」

「今日のところ？ ううん。今日に限らず全滅」

「全滅かよ」

苦笑して、それから言った。

「教えてやろうか？」

「なにを？」

「数学」

というこゝで。

放課後、檀君改め、ヒリに、数学を教わることになった。教室で。文月には、先に帰ってていいからと告げたら、「なんでそうなる！？」ものすごい驚きよう。

「昨日、告ってフラれた相手に、数学を教わる？ しかもマンツーマンで。おかしくない？」

「言われてみるとそうなんだけど、なんか告ったことで、ちょっと親しくなってきた感じ？」

「フラれたのに？」

「それは、好みのタイプじゃないからとかなんとか。大人しい女の子が好きなんだって」

「自分で言ってて、むなしくない？ それに、惨敗した相手のそば

に、嬉々としているのって、どうよ?。」

「嬉々としてる?。」

「どうみても」

「やっぱり? この一日で、目まぐるしく感情や状況が動かされていて、忘れかけていたけど。あたしは、恋する乙女なのよ。」

「フラレはしても、想いは色あせないどころか、檀君がけっこういい奴だと再認識して、気持ちは全然、衰えてない。断られた一時は、冷え切ったように感じておきながら。」

「すごい進展だと思わない?。」

「私にはよく分からないね。あんたも檀も、なに考えてんだか。ついでに言えば、あの外人のほうがかもつと分からないけど」

「それは思い出させないで」

「お、突撃してる」

文月の視線の先を見ると、読者モデルの島谷さんとそのグループが、外人のそばに集まっていた。囲まれて、元凶の顔は見えないものの、キヤーキヤーとトキメキ発声が続いているところを見ると、あの男、まんざらでもなく相手にしてるようだ。

「女好きが、と、毒を吐いてケツと舌打ちするあたしに、」

「結婚がどうとか言われた身としては、複雑?。」

「意地悪く言う。」

「全然」

「何なんだろうね。いきなりの“こんなのと結婚は嫌だ”発言といい、転入といい」

「こっちも、あんなのとは嫌です」

「念を押して答えると、文月は眉をひそめてくる。」

「ねえ。ホントに心当たり、ないの？」

「ない」

「でも、結婚だよ？ 結婚！」

「向こうの妄想でしょ？」

きっぱりと言い切ると、目を細める文月。

「その体で？」

「文句があるなら本人に聞いてきて！」

妄想です、と断言されてもイヤだけどね。 ったく、気持ちが悪うたらありゃしない。

この高校は、女子は濃紺のセーラー服で、白いリボンと合わせたのが清楚な感じで人気がある。 進路希望の最終判断で、制服で決めてここを受験した。 ついでに文月も同じく。

夏服は、白地に濃紺の襟で、やはり白いリボン。

これが、風になびくと様になるんだけど、とても厄介なものもある。 食事のときに、シミが付きやすいのだ。 ちよっとしたハネでも、汚れが気になってしょうがない。

屋上に行く前に水道に寄って、お弁当の時に迂闊に点々とつけてしまった醤油を落とそうとする。 何とか誤魔化せそうだけど、檀君じゃなくてヒリに、見られないといいな……。

教室は人がいるから屋上で、ってことになって、行く途中で汚れに気づいて慌てたものの、どうしようもない。

ボブから伸びかけの髪をパツと整えて、檀君の待つ屋上へ駆けていく。

申告通り全滅の数学に笑いながら、檀君は丁寧に教えてくれた。 彼のことについて、あたしは、知ってるようで知らなかったんだ

なと思う。

笑い上戸なところか。屈託の無さとか。数学がなかなか得意なんだったことも。

昨日から今日にかけて、ちょっと、すごい収穫！ フラレた身とはいえさ。

額に落ちてくる黒髪が、切れ長の二重に陰を作ると、憂いを帯びたイケメンに見える。離れていても、かっこよく見えてたけど、コレはかなりツボ。近くに来て初めて知った。

他の子みたいに、「ヒーリ」って、甘えて呼んでみたくなったりして。ムリだけどさ。

彼女じゃないのに、馴れ馴れしくする度胸はないし。ああ、気が弱い自分が、うらめしい。

教えてもらう合間に、転校生の話になった。

「六限目の体育、出なかつたぜ。病弱で運動はダメなんだって」

「病弱！？ あのでかい体で！？ 血色の良さそうな顔して、ありえないでしょ」

「見えないよな、と、檀君、じゃなく、ヒリも同意。なかなか、すぐにヒリとは、呼べない。」

「その間、体育館の周りをうろろしてたらしいぜ。今日は男子は校庭で、体育館は女子だっただろ。相当女好きじゃないかってウワサ出てるよ」

「ま、男はみんなそっかな、と、付け加える。え？ 檀君もそうなの？ とは、聞きにくい。」

「さつきも教室で、女子に囲まれてたよ。まんざらでもなさそうに」
「高橋。辛辣だな？ あの転校生に」

言外にはみ出た私情を、檀君が嗅ぎ取ったようだ。

「外人嫌い？ 全校中の女子が色めきたってんのに。大天使ミカエル様とかあだ名つけて、大騒ぎしてるだろ」

吹き出しそうになった。大天使って性格じゃないでしょ、アレは！

「なんか謎で。日本語ペラペラなのも怪しく見えるし、公立校に来るタイプじゃないよね」

ひっそり鼻で笑って、気持ちそのままの返答に、彼も納得する。

「マジ、謎だよな。外人は老けて見えるとは聞くけど、顔も落ち着き方も、二十過ぎって言われても不思議に見えない。ホントに高校生かよ？って思わないか？」

「思う。なんかエイリアン見てるみたい」

「ひでえ」

「だって、あの容姿からして、現実離れしてるじゃない」

「ってことは、かつこいいとは思うんだ？」

「世の中の見ればそうでしょ」

「自分的には？」

「関わりたくない」

とっさについ、突き放した本音が出てしまって、訂正する。

「興味ないってこと」

「やっぱ、強いなあ。おまえ」

「二日続けて刺さなくても」

「ごめんごめん」

引いてるとか、嫌がってるカンジじゃないのが見えても、そう思われるのは、気持ち微妙に落ちる。大人しい子が好きだって、聞いたばかりだしね……。

「あたし、そんなに勝気に見える？」

「クラスの男子には評判」

衝撃。

評判？

勝気で評判！？

あたし、心当たりがないんですけど！？

と、絶句していたら。明らかにされる、忘れていた珍態の数々。

「このクラスになって一週間経ったところ、男が物投げて遊んでたら、水で濡れた上履きが高橋の机にビシャツて落ちたんだよね。おまえそれに一瞥をくれて、モノも言わずに、投げた男子に向かってバシツと叩きつけたんだよ」

覚えてない？ と言われ、首をブンブン振るあたし。

「あつたとしても、ムカついてとかじゃなくて、持ち主に投げ返してやって、それで終わり、みたいな。覚えてないよ！」

檀君は、あたしの慌てっぷりに苦笑しつつ、言葉を続ける。

「その場にいた男ら、“こえ〜〜〜”状態。あの女子には気をつけようって言った数日後。今度は、ほら、自習中に、アレ膨らましてクラス中が大騒ぎで遊んでたらさ。高橋が、自分のところに飛んできたソレを、壁にバンツと叩きつけて破裂させてたんだ」

.....。

「……それは、なんとなく、覚えてる。そのとき、あたし、日直でちゃんと自習させるって、先生に言われてて」

「そうだったんだ？ 皆、おまえが日直だったって、記憶にないと思う。俺もだけど。その出来事だけが、くつきりしちゃって」

「ってか、アレってなに？」

「え？ アレって。膨らましてたの？ アレだよ」

「白いフウセンのことでしょ？」

「フウセン？」

直後、ブフツと派手に噴出した檀君は、腹を抱えて笑いはじめた。「知らないで叩き割ったの？」

あたしを見ながら大笑い。他の人なら不愉快になるところでも、彼だから許せるけど。

「アレ、ほら、避妊するやつ」

さらっと言われ、

「……え？ あれ、コンドームだったの!？」

モロに叫ぶあたし。

「本物見たことないもん、知らないよっ」

なんて、後で思い出したら、死にたいくらい恥ずかしい自己申告までぶちかまして。

「シーツ、ばか！」

慌てて口を手で押さえられ、あたしもハツとして辺りを見回す。

檀君の手の感触に、浸る間もなく。パラパラという生徒が五、六人、訝しげにこつちを見ている。

とぼけて視線を紛らわせた、直後。

「げっ」

またもや、珍妙な奇声を上げてしまった。
給水塔の上に座って、あの外人がいたから。しかも、こっちをじ
っと見てるしつ。

気づいた檀君も、

「なんであそこに、つつか、こっち見てるよな？」

驚きで、いまの騒動も彼方に飛んだ顔で、目をぱちくりさせてる。
つつか、アンタ、さっきまで教室にいたじゃんよ？ 女はべらし
て。

嫌な気分になって、再び手元の教科書に集中しているふりで、何
も見なかった顔をしていたら、

「高橋、めっちゃ顔コワイ」

そっちの方が驚きという口調で、まじまじと見つめられた。一年
二カ月半恋焦がれた人に。

「早々になんかあったの？ あの外人と。……あれ？ 朝もなんか、
過剰反応してたな。先生が高橋の隣りにって指示したら、嫌そうに
反応してただろ、思いつきり」

「外人恐怖症」

鬼の形相を見られた虚脱感で、適当に返事をした。あいつとやり
あったことは、檀君には知られたくない。

もう充分、彼の中では、キツイ女になってるのに。まるで悪魔の
ごとく。

へえ、と、檀君は物珍しそうにあたしを眺めている。

「そろそろ帰ろうか。家どこ？」

訊かれて、青梅方面と答えたら。

「あ、途中まで同じ方向じゃん。一緒に帰ろう」

マジで？ つうか、あたし、交際断られたんだよね？

次の日から、数学教えてもらったり、一緒に帰ることになったり。

これは、いったい？ 文月じゃなくても、理解不能な事態なんですが。

最悪な出会い 3 (前書き)

最悪な出会い 3

檀君と一緒にいるのは、想像以上に楽しかった。

彼に恋してる乙女のハズなんけど、気を遣わなくていいっていうか。彼が、人に気を遣わせない人なのかもしれない。

それとも、やっぱり昨日の今日で、あたしがヘンに意識しすぎないように、気を回してくれてたのかな。

幸せな気分と、でも彼女じゃないわけで、という事実の間をウロウロして、溜息。

まあ、いいじゃん。一日で、凄く親しくなれた気がするし。

それもこれも、告白しなければ起こらなかった事と、鼻歌を歌いながら駅の階段を降りて、徒歩で十五分の自宅に向かう。

見慣れた商店街を抜け、見慣れたアパートが見えてきた頃。何か気になって、背後を見た。

……誰も、いない。気のせいかな。

二階建てのアパートの階段を登って、もう一度、階段や通りを確かめる。

いろいろあって、疲れてるのかもしれない。

でも、部屋に入ってから、何だか落ち着かなくて。電気をつける前に、カーテンの隙間から外を覗いてみる。

ビンゴ。凄いカンしてる。あたし。

アパートの傍の電柱の影になるようにして、見覚えのある男がいた。あの外人。

転校してきたのとは違う、昨日マックで会った一人。肌が浅黒っぽい、モデルみたいな。カルバン・クラインのメンズパンツ会社が、

土下座してスカウトしてきそうな、あの人。

鳥肌。

あたし、寒気がしてる。

……なんなの？

不愉快とか、最悪とか、散々悪態ついたけど。普通じゃないことが、あたしを取り囲み始めてる。

お母さんに言う？ 警察に言う？

文月はダメだ。迷惑かけるかもしれないし。

いったい、何が起こってるの？ 狙いは、あたし？
だとしたら、あたしをどうしようって言うの！？

次の日とその次の日は、穏便に日は過ぎた。

学校でも、おかしな変化はなかった。昼休みになると、このクラスが女の園か、はたまた動物園かと言われる状況になるのを除いては。

あの男も近づいてこないし、あたしも二メートル以内は絶対に近寄らないし。

文月には、「あなたの避け方は不自然過ぎて目立ってる」と、注意された。「廊下ですれ違ふときに、思いつきり反対側の壁にくっつくのはやめな」とか。

何か変わったことはないかと気にかけてくれた文月に、尾行されていたとは伝えなかった。

昨日も、その前も、尾行はあった。しかも帰りだけでなく、登校のときまで。

変化といえば。檀君とは、けっこう話をするようになった。
「ヒーリイ」と、休み時間になると取り巻いていた読者モデル代表グループが、あの外人にくっついて歩いて歩くようになって、檀君もヒマになっていたのかも。

土曜日と日曜日は、待ちに待った休日だった。

ほんとうに、まじで。サイコーに、くたびれた一週間だった。

月曜日が始まると、また不愉快極まりないあの男に会うかと思うと、気が重くて重くて。

どうにかしてズル休みはできないか思案したものの、今日休んでも、明日も明後日も学校はあるんだとゲンナリして、行く覚悟を決める。

覚悟なんて、決めなきゃよかった。

朝のホームルーム早々、あたしは生き地獄に突きとされたのだから。

大鳴先生が、「先週予告していた席替え」を実行したのだ。

一番後ろの窓際。あの外人。

その隣り。あたし。

二メートル以内どころじゃない、一メートルも距離ないじゃん！

！ 移動するやいなや、

「先生！ 黒板見えません」

訴えた。もちろん、ウソだけど。

「誰か席、変わって」

言っが早いが、他の女子が色めき立つ。文月は、この外人には、至って冷静。脅迫されたんだから、当然か。

「高橋。おまえ、視力両方2・0だろ」

「それは四月の健康診断のです。二ヶ月以上経って、かなり落ちたんです」

「なら、眼鏡作ってこい」

「はあ？」

「なんなの、その横暴さは!？」

「前じゃなきゃ、今日も見えません!」

「隣りに聞け。じゃ、授業を始める」

「なんだとお？ 一時限目は大鳴先生の授業で、ホームルームからそのまま流れ込む。」

左。目障りな外人。

右。……右は……

「檀君!？」

「うるさいぞ、高橋っ」

怒鳴られても、着席を忘れて立ち尽くすあたし。

最悪なんですけど。いろんな意味で。気が休まらないッ!

この場合で組む「お隣さん」というのは、左と決まっている。左の左は、誰もいないから。

黒板が見えないなんてウソだから、別に世話になる必要はないんだけどね。

と、思っていたら。一時限目の教科書をど忘れしてる……。家を

出る直前まで、行きたくなくてウダウダしてたせいだ。

檀君に見せてもらおうと、様子をうかがってみれば。なんということでしょう、檀君の右隣りの子も忘れてる……

マジかよっ！ 頭の中で、どっかのテレビ、リフォームハウス番組の、『なんとということでしょう』のナレーションと音楽がこだましている。

仕方ないので、「すみません」と、左のヤツに声をかけた。マツクで口利いて以来だよ。一生、話したくない相手なのに。

「教科書……」

言いかけて、見てみれば、ヤツの机の上に出てるのは携帯だけ。

「教科書は？」

真顔で尋ねたら、

「いない」

しれっとした態度の返事。

「あんだ、何しに学校来てんの？」

自分の状況を棚に放り投げて言つと、

「来たくて来てるわけじゃない」

明らかに、不機嫌な口調で返された。

だったら来んなよ！ と毒を吐きそうになるのを堪えて、あたしは黒板を眺める。科目のノートはあつたので、やる気なく書きなぐりながら。

大鳴先生は、あたしが教科書を出していないと絶対分かってたのに、何も言わなかった。

怒られたいわけじゃないけど、おかしすぎない？

ここ、二人並んで、教科書出してない生徒がいるんですが？

休み時間は、文月の席に入り浸りになった。自分の席に居られないなんて、悲しすぎる。

席替えはわざとだと、文月も頷いた。

「先生もグルだよ」

「あたし、後で文句言ってみようかな」

チャイムと共にのろのろと魔の席に戻り、着席すると同時。入ってきた先生が、「抜き打ちテストをする」と、のたまった。数学の勘弁してよ、と、げっそりしても、学生はテストから逃れられないわけ。

三十分のテストは、この前、檀君に即席で教えてもらったもの以外は壊滅的だった。

そしてこの後、あたしは更に地獄を見ることになる。先生の一声で。

「はい。隣りの人と答案取り替えて。採点してくれ」

……………隣り？

このカイメツテキな答案を、右隣りの檀君じゃなくて、左のヤツへ。

右でも困るけど、左は……………絶望的。

マックで、公衆の面前で、「バカが移る」と言われたあたしなのよ。こんな答案見せたら、末代まで何を言われるか！

赤くなったり青くなったりしてるトコロへ、隣りからヒラリと答案が来た。

教科書はいらないと断言する人間が、テストなんか受けなくてもいいじゃないの。

あたしは、なけなしの勇氣をはたいて、隣りを見ずに答案を差し出した。

沈黙が、コワイ。

今日、席を並べてから、ずっと沈黙でいるのは慣れてるのに。その沈黙が、凍ってる気配がする。

気配がする、なんてもんじゃなくて。

左隣りから来る空気が、バリバリ凍ってるよ……

いいよ、いいよ。

一日中、携帯ばっかいじってるアンタだって、期待できるもんじやないでしょ？

と、意地悪な希望を託してみたら。非常に美しい答案に、目が固まった。

まっさらで美しいんじゃない。綿密に、サラサラと書かれてる数字が、形が整っているのに硬過ぎず、凄く綺麗なの。名前の欄には、筆記体で、流れるカリグラフィのようなローマ字。答案の名前が、芸術になってる。

その顔で。この字は。卑怯じゃない？ 揃い過ぎじゃない!？

黒板の答えと合わせると、間違いは一つもないし。なんか、赤ペんで、自分のきつたないまる、いびつな印を書くのが、嫌になるよ。溜息をついて、そっと左隣りを見る。

ヤツも、こっちを見ていた。

信じられない、って顔をして。答案に視線を戻すと、微かに首を振りながら、ペンを滑らせている。呆れてモノも言えないってカンジが、ありあり。

そして、触るのも嫌だ、一瞬も見たくないって態度で、サツとこっちの机に答案を滑らせた。

二問以外、全部ペケ。
赤ペンのペケまで、まあ優雅な感じですよ。
声に出さずにぼやいていたら、隣りからの冷ややかな呟き。

「何の病気だ？」

「はい？」

あたしに聞いているの？ と、尻上がりの返事に疑問を込めたら、

「脳ミン」

口にするのも汚らわしいと、言わんばかりの嫌味さで、そつぽを向かれた。

「どんな異常が起これば、そこまでバカになれるんだ」

「……………」

この男だけは、殺していいかな。あたしの視界から抹殺したい。
同じ星に生きてると思うだけで、発狂しそうな殺意が沸いてくる！

50

右隣りの檀君が、トントンと、指であたしの机を鳴らした。

「外人恐怖症、発動中？」

からかっているのか、なだめているのか。訊いて来る。

「絶好調」

不機嫌に言えば、プツと、吹き出す音。あたしは檀君を睨んでしまった。

けっこう、イイ性格してるよね。いろんな発見があつて、良く言えば新鮮だけど。

最悪な出会い 4

授業が終わると、女の溜まり場になる隣りの席は、その意味でも大迷惑。

人垣が、あたしが座ってる席を、勝手に押しのけたり。

でも、ちらちら窺っていると、ヤツが積極的に話をする事はなくて、一言二言発した言葉を、女の子たちがキヤアキヤアと面白おかしく広げてる印象。隙間から顔をちょいと観察すると、周囲には無関心そうに、冷めた目をしている。

たくさんの女子に囲まれて、「オレってイケてるぜ」と、ナルシストに入るタイプでもないのか。

いや、いいんだけど。どんな男でもさ。

あたしの中の、「コイツ、サイテーッ!!」って感情がくつがえることは、一生ないだろうし。

放課後。職員室に飛び込んで、あたしはクラス担任をつかまえた。

「大鳴先生!」

あたしの剣幕にビビったのか、大鳴先生がギョツと振り向いた。

「なんで席替えて、無理矢理あの男の近くにするんですか」

「あの男? スマクラグドス君か。仲いいんだな」

「は!?!」

どういう解釈で、そういうカンチガイになる!?!

「ありえません」

「ケンカでもしてるのか? 許婚なんだろ?」

「イイ? ……ナズ……ケ?」

許婚！？

どっから、どうして、そうなるの！？

シヨミミならぬ、初耳なんですけど！？

このときのあたしの気持ちは、どう言い表せばいいのだろう。
アタマの中で、富士山が一万個くらい爆発してる。そんな感じ。
まじで。

「ありえませんが」

ぼう然と、つぶやいた。

「恥ずかしがらなくてもいいよ」

ニヤニヤしながら、

「あれ？ でもおまえ、つい最近、告白してどうのとかやってたよな。檀をカバンでぶつとばして。二股はやめるよ？」

「だから、知らないんですっ」

完璧に誤解している先生に対して、勢いあまって、先生の机をバシッと叩いてしまった。

「説明してください。どういう人なんですか？ あの外人」

先生は目を白黒させながら、あっけにとられている。

「さあ。校長先生のお達しでな」

「校長センセが？」

「ひれ伏さんばかりに扱ってるからな」

「グルだったのは、校長なの!？」

「ここだけの話、スマクラグドス財閥と関わりがあるんじゃないかって、職員室でもウワサなんだ。おまえのほう詳しいんじゃないか?」

「まだ、思い込んでるらしい先生が、あたしに話の先を向ける。」

「スマクラグドス、ザイバツ?」

「大財閥だよ。世界第一位の財閥でもあるが、表向きにはあまり情報が流れていない所で、謎が多いとも言われている」

「ほんとに知らないのか? って調子で、ブリッコでも疑うように苦笑いで見返す。」

「そんな人とあたしが許婚なんて、ありえないと思いませんか?」

「何を聞いてもよく分からなくて、そう言ったら。」

「俺に聞くなよ。おまえのことだろ?」

「何言ってるんだと鼻であしらわれ、あたしは、もう一つ思い立って、質問をぶつける。」

「あの人、高校生には見えませんよね。ほんとに同い年?」

「本当に何も知らないのか、と、眉を寄せて、怪訝な顔をしはじめる大鳴先生。」

「十九だよ。他の生徒には言うことじゃないが」

「十九? ダブリ!？」

「二つも上で、なんで高二のクラスに!？」

「大学を卒業してるって話だ」

「え?」

「名門で有名なケンブリッジ大学を、十一歳で首席で卒業してるそつだ。飛び級で、九歳で入学してな」

.....
あぜん。

その経歴の凄さが、どんなものかは実感が無い。

けど。あたしでも知ってる、世界でも有名な大学で。九歳で入学して、首席で卒業!?

ランドセルをしょってるまだ子供みたいな小学生が、大学に通ってる図を想像してみても ありえないって!

同時に、今日見せられた答案が、脳裏に浮かぶ。あの、芸術的でいて、もの凄く頭が良いのでは、と思わされたアレ。内容もあっさりパーフェクトの。

マジで? そんな人間が、この世にいるの!?

.....そりゃあ、脳ミソが病気だのカビてるだの異常なバカだの、言い切れるでしょうね。

あいつの性格が、読めた気がする。傲慢で不遜で態度でかくて。人を平気で見下して、それを隠しもしない。自分以外の人間は、みんなバカでサル以下だとも思ってたんじゃないの?

だいたいなんだってそんな人が、二流の公立校に潜り込んでるわけ?

理由。もしかして。もしかしなくても。今までの流れと、先生の口ぶりから言って。あたし、ってこと?

“来たくてきてるわけじゃない”と、のたまったアイツ。

そろそろ。いや、いい加減。事情を吐いてもらおうじゃないの。

次の日の、昼休み。やっとこさで決意を固めたあたしは、女の子の群れを掻きわけ、サツとヤツの机の前に立ちはだかった。

「ちょっと顔かしてくれる？」

眉を上げて、こつちを見る男。真正面から対峙することになり、そのとき初めて、寸分の隙もないこの男の顔を、きちんと見た。

一瞬、怒気が消え失せた。あんまり綺麗で。

マックで会った時は、サングラスをしていたし。それ以降は、視界に入るのもイヤで、あんまり見ないふりをしてたけど。

じっくり見ると、用意してきた言葉が全部消えた。怒りと共に。大天使ミカエル様が光臨されたと、全学年の女子達が上せているのも、納得してしまう。

見たこともない、エメラルド色に煌く瞳。吸い込まれそうになる。

……エメラルド。

とても美しい、エメラルド色の瞳をしていたという父を、思い出した。

もしかして、お父さんの瞳も、こんな色だったのかな？

「ちょっと！ ミカエル様になんの用なの？」

溜まっていた女子に口々に問われ、すぐ済むからと言いかけたら、

「少し静かにして」

ヤツが片手を軽く上げて、彼女たちの文句を制した。

「やっと謝罪する気になったんだ？」

そう言われて、

「謝罪？」

眉を寄せるあたし。

「なんであたしが、あんたに、謝らなきゃならないの？ こっちこ

そあんたに、釈明して欲しいことがあるのよ」

「謝罪について、まったく心当たりはないと？」

「まったく。それより、ここ数日付きまどつてるあんたの友達について」

話してる途中で、男が立ち上がった。場所を変えるためかと思いきや、男は、飲みかけて机に置いていたミネラルウォーターのボトルを手にする。

持っていくつもりかと見ていたら。その直後。あたしの頭の上から、水が降ってきた。

400ccはあつただろうと、ぼんやりと、考えているあたし。とっさのことだ。

そして、ペットボトルからの液体は、落ち切るのに時間がかかる、とも。

流れてくる水を硬直して浴びながら、考えていた。

昼休みの騒々しい教室が。一気に静まり返る。

「やられたことは、やり返す主義なんだ」

言つて、濡れそぼつたあたしを見ながら、ペットボトルを置いた。

「シェイクじゃないだけ感謝しろ」

ボソツと吐かれた、冷ややかな言葉。

「あれは400？もなかったわ」

自分の声が、奇妙なくらい、冷静に聞こえる。

怒りのマグマが、ゆっくりと熱を帯びている。あたしの中で。

「そついう問題じゃないだろう」

男の声も、冷静だった。

こいつは……

こいつだけは、許せない。

「まさか、やり返すためだけに転校してきたんじゃないわよね？」

「まさか。君ほど暇じゃない」

「そーでしょうとも。一日中、携帯いじってるんだものね。授業なんか全く聞かないで」

「へえ。気にして見てるんだ？」

冷笑されて、そっぽを向かれた。

そして、教室を出て行く姿を見ながら、あたしはもう、噴火寸前で、濡れた髪が振り乱れるのもかまわず、右足の上履きを素早く脱いで、そのまま投げつけた。

最悪な出会い 5

バシツと、小気味良い音を立てて、上履きは後頭部に命中した。また上履きが飛んだ！ と、男子たちが思ったかもしれないけど。そんなことにかまっっちゃいられない。

振り返ったヤツの動きは、確実に、スローモーションに見えた。腕組みをして、眼差で刺すが如く、見つめてくる。

「今、投げつけたのは、なんだ？」

「見ての通りよ」

すーっと思を吸い、吐き出すあいつ。

「俺は、生まれてから一度も、人に手を上げられた事もなければ、シエイクを浴びせられた事もなく、上履きや靴を投げつけられた事もない」

「そうでしょうとも。だから初対面の人間に、最悪なんて言葉をぶつける、最悪な性格になったのよね」

こちらをじっと見つめたまま、沈黙する男を、あたしも負けじと見つめ返した。

教室は、恐ろしいほど静まり返っている。

なんか最近、不自然に静まり返るシチュエーションを、何度体験したことが。

「やられた事はやり返すんでしょ？ どうぞやり返して。二倍でも三倍でも」

瞬きもしないあいつの目を、きつちり見据える。

「受けて立ってやるうじやないの」

不意にあいつが動いた。文字通り、風を切るような早い歩調で。

ギリギリのところまでひるみかけて、体を避けようとしたあたしの両腕が、掴まれた。

やばい。この目は、本気で怒ってる。

でもあたしは、売り言葉に買い言葉で、キッと睨み返した。

引きずるようにして教室を出ようとするので、

「離しなさいよ。逃げないから！」

もの凄い力に抵抗して、声を荒げた。

こんな力、知らない。体の大きい、本気の男の力って、こんなに怖いんだ。

「離してっ！」

自分の絶叫に、自分で驚いて、唇を噛み締める。

余計なことしなきゃよかったって、反省と。どっちみち、ぶち切れてたんだからと思う、開き直りと。

戸口を出ようとする間にチャイムが鳴って、先生が現れた。

「なんだ、どうしたんだ!？」

驚きの声が、あたしとこの男を確認して、絶句する。

大鳴先生の顔が、躊躇うのを見て取って、先生は助けにならないと察した。

「こいつ、暫く借ります」

言っと、返事を確かめる間も無く、あたしを担ぎ上げた。

「なにすんのよっ」

「やった事の決着は、つけてもらっ。自分でも受けて立つと言っただろ」

担がれたまま、廊下を進んでいく。どこに連れて行かれるかわからないのに加えて、身長がとても高いから、目線も普段とは違って

怖さは倍增。

授業が始まって静まり返った校舎から、渡り廊下へと抜けて、実習室や音楽室の並ぶ第三校舎へ入った。人の気配がないから、この時間は殆どの部屋が空いているようだった。

第二音楽室へと向かい、ドアを開けて入ると、片手が迷わず鍵を閉める。そのまま中へと歩いて、ピアノのそばへと、体を押し付けられた。

あたしの前に立ち見おろす、冷たく、激しい怒りの溢れる双眸。その眼差を見ていたら、何すんの、とか、何するするつもりよ、とか。言葉が出なくて。

気迫だけでは負けてはならないと、その目から心をそらせなかった。

触れると切れそうな、緊迫した息遣いが、流れる。

相手との距離は、三十センチもない。

なんで、あたしたち、見つめあってるんだらう。

一呼吸も、互いから目をそらさず。

どれくらい、そうしているのか、分からない。

お互いを切りつけるほどの意思を持って。お互いを見つめて。

怖いのに。逃げ出したいのに。

それを自分に、許せない。

ここで、「ごめん」と言えば、この男はどんな反応をするのか、興味がありながら。

でも、あたしもこの男も、単純に折れ合うことに、関心がないの

も、肌で感じている。

何かが、ぶつかると。強く、鋭く、干渉しあっている。

あたしと、この男の、何かが。

似た者同士。そんな言葉が、ふと、浮かんだ。そんな生易しさでは、納得し難いけれど。

「うちの一族は、気が強い女が多い」

一族？

問い返そうとして、それは発せられなかった。唇が、塞がれていた。

う、そ。

予感が、なかったわけじゃない。甘い期待ではなく。

鋭い怒りで、徹底的に壊されそうな予感。

でも、現実になったそれに。あたしは頭が真っ白になった。

逃げられない。

そう思ったら、どうにかして逃げたくなって。体が、抵抗した。抑えられている全身を、必死で解放しようとする。

けれど、動くほど、相手の力は増して。あたしは、体どころか、指先一つ、呼吸さえ、自由にできなかつた。

激しくなるキスに、血の一滴まで、悲鳴を上げている。

舌を噛んでやるうとしても、かわされて。片手で抑えられた顎が、せめぎあう雫で濡れた。

ラベンダーの、香りがする。人の唇の感触を、あたしに初めて教える人の匂い。

心まで絡め取るように忍び込んで、この瞬間を、あたしに刻みつけていく香り。

抵抗を弱めたあたしの顔から離された手が、制服のファスナーを引き降ろし、むしり取る動きでリボンが外された。

首から胸元へと指が滑り、何をされているのか理解した時には、恐怖で相手突き飛ばそうとしたけれど、男性の力の前には非力だった。

激しい抗いで、ピアノの蓋が浮いて、体で擦られた鍵盤が音を立てる。

誰もいない音楽室に鳴り響く、乱れた狂音。心臓を震えさせる、低く重い衝撃音が、ここにある信じられない現実を、あたしに突きつけた。

「い、やっ………」

自由になりかけた口で、叫んだとき。唇が離され、食い入るよう見つめられる。

「俺を怒らせるな」

鼻先と鼻先が触れ合うほど、そばで。呼吸と呼吸が、深く混じり合うほど、そばで。

その声を、感じている。

「男を馬鹿にすると、どうなるか覚えておくといい」

はだけたセーラー服の中に滑り込んだ手が胸に触れ、あたしは脅えて首を振る。

やめて、と言いかけたそれが、再び唇で塞がれ、キスで飲み込まれた。

抱えられ、ピアノの蓋の上に腰を乗せられて、スカートが捲り上がったまま、身動きが封じ込められる。

左手で抱き寄せられ、キャミソールとブラの上から胸を滑りおろした右手が下へと降りて、スカートの裾を掻き上げる。

太股を撫で上げられて、あたしは竦みあがった。

激しいキスで息がつまり、喘ごうと口を開いたとき、もっとキスが深まるのを許してしまう。

男の手は迷わずに足の付け根を辿り、下着の上から下半身を擦りはじめていた。

上下に動いてそこを確かめる指に、キスを受けたまま必死で抗い呻き声を上げる。

足を閉じようとしても、ピアノの上で膝を広げさせられて、男の体に押さえ込まれているから、敏感になった部分を庇うこともできない。

そして、何度も擦られるうちに、徐々に甲高くなる自分の呻きを聞いた。

最悪な状況なのに、カラダが反応している。

執拗な口づけと、執拗な指の動きに。

理性と自我の抵抗が、あっけなく突き崩されていく。

反応するカラダに自分で驚愕して、どうしてこうなるのか、分からなくなった。

高くなる声を手応えに、指の動きが早さを増した。

「ん……っ、ん、んっ」

呻いて、泣きそうになる。

怒りよりも、恐怖よりも、強い衝動で。

直後、指が離された一瞬、安堵を超えて、理由の見えない哀しさに襲われた。

なぜ哀しくなるのか、空白になりかけた頭の中に必死で答えを見つけようとして、肢体が強張った。

下着の中に差し入れられた指が、容易く、あたしの中心に触れてきたから。

濡れた肌の上を、初めて知る他人の指が、泳いでいく。

水を得た魚のように、自在にくねらせる動きで。

直に訪れた刺激に、叫びが、喉を振り絞る唸りになって放たれた。

「ん、あつ」

早いリズムを打つ摩擦が、あたしの意識を飛ばした。間髪入れず、体に何かが突き入れられる。

鋭い痛みが、失いかけた意識を掴み寄せ、目を見開く。

そばにあるのは、冷静な光を湛えた、エメラルドの瞳。

「痛いのか」

キスを弱めて呟かれ、言葉なく頷いた。抗いも、責めも、もう声にならない。

「……処女だな」

独り言のように言い、指が抜かれる。

下着から手を引き出すと、押さえていたあたしの体から身を起こした。

あたしから離れて、唇を手の甲で拭い、あたしを一度正面から見据えた後で背を向けた。

あつさりと離れたあいつと、無様な姿で放置されている自分に困惑して。

たくし上げられていたスカートを直しながら、辛うじて発せられる思いを背中にぶつける。

「どっして、こんなこと、するの」

少しだけ、分かっていること。

徹底的に、あたしを辱めようとしたんだ。この男は。

愛情も何も無い、初めてのキスの、痛みに襲われて。

あたしに触れて、我をなくさせて、あたしの中に押し入った、あいつの指が教えた感触と痛みに、震えが止まらなくなって。

涙が、零れかけた。

けれど、この男には見られたくなくて。ぐっと、奥歯を噛み締め

知らない味が、口の中に残っている気がする。

喉の奥まで流れて、体の奥まで染み付いた気がして。吐きそうになった。

「……許婚って、なんなの」

ギリギリで自分を保ちながら、音楽室を出て行く後ろ姿に、再び疑問を投げかける。

「先生から聞いたの。何の冗談？」

返事はなかった。

代わりに、ピシャッと音を立てて、ドアが閉められた。

音楽室を出て、廊下に行く足音が、遠のくのを聞きながら。全身から、力が抜ける。

体の奥が痺れて、ぼんやりする。

……分かってる。悪いのは、あたしだ。

まだ湿っている制服や髪を直して、パンツと思いつきり、両頬を叩いた。

しっかりしなきゃ。とにかく今、この場を吹っ切るために。

向こうが売ったケンカを買ったのは、あたしだ。隙があったのも、あたし。

こうなったのも、自分の責任なんだから。

深く、深呼吸して、自分を抱きしめて落ち着けようとする。

落ち込んだり、泣いたりしてちゃ、駄目だ。レイプされたわけじゃない。そこまではならなくて、よかったと思おう。

突然、置き去りにされた空虚に、言い知れない惨めさを感じているのも、咄嗟の出来事に混乱しているからだ。

最悪の事態は免れたのだからと、心を宥めて、立ち上がる。

音楽室を出て、力の入らない足取りで第三校舎を歩いていると、曲がり角で小走りに来た人影とぶつかりそうになる。

檀君だった。

「高橋！ よかった」

目を見張ってあたしを見てから、肩で息をつく。

「さすがにやばいだろって思って、周りの男に声かけて、探してたんだ。あいつ、本気で怒ってただろ。男の俺らでも、背筋凍ったし……で、探してこっちまで来たら、あいつが第三から出てくるのが見えたから」

動揺しているのか、早口で言う。

「つつか……大丈夫？」

「……うん。大丈夫」

心配が、思いもよらなくて。嬉しいけれど。彼には会いたくなくなつた。

今の姿を見られたくない。何があつたか、悟られたくない。緊張で強張る口元に、ぎこちなく笑みを浮かべる。

「何もないから。ほんとに」

「顔色悪いな……保健室で休んだほうが、よくない？」

「……そうかな。うん……そうかも。そうする」

「保健室まで、一緒に行くよ」

言われて、一人で行くからと、首を振った。すぐにでも、彼から離れたかった。

髪を手櫛で撫でつけて、落ち着かない気持ちをはぐらかしていたら、

「無理すんな」

小声で、檀君が言った。

「無理してないよ？」

見透かされているのではと、ときどきしながら答えると、躊躇つ眼差で、見つめられた。

「ずっと、声が、震えてる」

片手が思わず、唇を庇うように触れた。

腫れて、名残りがあるかもしれないそこに、彼は、あたしとあいっにあったことを、勘づいているのだろうか。

「行こう」

いたわる口振りで、促されて。俯くあたしに、檀君は、優しく言った。

「何もなかったのは、わかったから。でも、無理すんな」

彼は、あたしを気にかけてながら。近づきすぎないように、歩いてくれた。

あたしは。斜め前を、数歩先に、ゆっくりと歩いてくれるその優しさに。壊れかけた心のどこかが、癒されるような思いが、込み上げた。

崩れそうになるあたしの一部が、導かれるように、保健室までを

ゆっくりと歩きながら。

その距離に、心を委ねて、自分を支えようとする。

最悪な出会い 6

(書籍化のため、第一部掲載はここまでになります。)

一章 最悪な出会い 脱稿

2010・1・5

EYES

5th

GREEN

FLASH

く夢色の夜明け

短めの更新になります。

EYES

5th

GREEN FLASH

く夢色の夜明け

* GREEN FLASH (グリーン・フラッシュ) ……
日の出・日没時の太陽に稀に現れる緑閃光の現象。

世界で一人だけ抹殺できるなら、この男しかいないと思っていた。

あたしの中の、「こいつ、サイッター！」って感情が覆ることはない
と確信していたはずなのに、自分の確信ほどあてにならないもの
はないと痛感している。

厳密に言えば、「サイッター」とは、まだ思っているんだけど。

あの夜の後　　どんな“あの”かは、花も恥じらう純情乙女としては
公言できない夜の翌日から、屋敷内は大騒動に見舞われていた。

ミカエルが、ウエディングドレスの製作を正式に指示したためだ。

あたしとミカエルの「許婚とは名ばかり」な関係を知っていただ
ろう人間は数人で、表向きは「嫌々でも掟に逆らえないので仕方な
く結婚する予定」を装い振舞っていたから、そこまで大騒動になる
とは思ってもみなかった。

皆が皆、「キターー！ツッ！！」と言わんばかりに浮かれまくり、「おめでとうございます！！」の大合唱を浴びせられるあたしは、あ然ぼう然ビビりまくり。

ゆうべあったことを、誰か逐一観察していたのか？ それともこの一族のことだから、寝室に監視カメラでもあるのか！？ などと、あまりの盛り上がりっぷりに疑心暗鬼になって青ざめていた。

……フツーなら甘さと切ない気分で、女の子らしいセンチメンタルに浸りたい、『たった一度の夢色の夜明け』のはずなのに……それどころじゃない。

……………。

“正式なお達し”の効力、恐るべし。

その前に、ミカエルもあたしに言ってよ。ウエディングドレスを作るってこと。

着るのはあたしなんだから、「正式に製作するよ」の一言くらいあってもいいでしょう。

あの男はそういう肝心なところを、なぜかスルーするクセがあるんだよね。「決まってるんだからいちいち口にしない」みたいな態度で平然としている。

そう、平然としているのだ。

ウエディングドレスがどうのとその口でぼざく前に、あたしに言うことがあるだろう！と、蹴り飛ばしたくなるくらいに。

今朝も、あたしがグランマにメールを送ったすぐ後で、急ぎの仕事の電話で起こされたミカエルは、気だるげな様子でバスルームに消えた、と思っただら出てきた時には普段の無表情、仕事モードの顔つきになっていた。

しかも、先に着替えを済ませて、ダイニングでちょこんと待っていたあたしがどう声をかけようかとドキドキしているうちに、携帯を耳に当てたままこちらを見向きもせずさっさと部屋を出ていったのよ。

生乾きの艶やかなブロンドを、片手で憂鬱そうにかき上げる仕草も麗しくて見惚れていたのに、数秒後には石像化してポツンと取り残されていた自分が一体。

「……………」

メドゥーサか、あんたは。見たものを石に変える神話の魔物って、実在したのね？ ……じゃなくて。

ちよっと待て、こら。ありえないでしょ！！

完全無視って、どーいう神経してんのよ!? ミカエル!!

マジで、つとにマジで、サイツテーな男!!

頬を赤らめドキドキ絶好調で、初めて一夜を過ごした彼からの言葉を待っている女の子を見ることがすらない、「やったら用済み」を絵に描いたようなあの態度。

そりゃあ、一線を越えた途端に180度人格が変わる男も気持ち悪いけど、常と変わらず冷やかに去っていくあの男は、いったい何様のつもりだっつうの!

ゆうべのひとときは勘違い、あたしの妄想だったの? それとも熟睡中の深夜一人ドリーム?

あれこれ思い巡らしてみるとやけにリアルすぎる夢のような、現実じゃなかったらどれだけ欲求不満なんだよ! って、のたうち回る恥ずかしさなんですけど。いや、現実だとしても、超絶恥ずかしいのは変わらないっつうか、どっちもどっちというか。

ゆうべ起こったことは記憶の誤作動だったのだろうかと悶々と思いながら、クッションを抱えて部屋の中をうろろろしてみる。

いや、記憶違いではないはず。だってあたし、歩きにくいもん……。

それ以上の違和感については言語にするのを省略しつつ、左手の指輪も確かめてみる。そのまま寝室を覗いて、そういえばローブデコルテが見当たらないと思いウォーキングクロゼットに行ってみると、あたしのスペースにも置いていなかった。

いつもなら侍女のカレンがとくに顔を出している時刻なので、あたしがシャワーを浴びているうちに彼女が来て片付けてくれたのだろう。と、考えてはみたものの、ミカエルが寝室にいるときにカレンが入ってきたことってあったっけ？

などと首を傾げていたところへ、当のカレンが飛び込んで来たのは数時間前のことだった。

「阿見香様、おめでとうございます!」

泣き顔のカレンに抱きつかれ、話が見えないあたしはびっくり仰天。

それから、てんやわんやの大騒ぎになったのだ。

駆けつけてきたシヤラにまで有無を言わせず抱きしめられて、冗談抜きで窒息しかけながら何事かと問いただせば、

「ミカエルがウエディングドレスを発注したでしょう? おめでとう、阿見香!」

……ウエディング？ つて、聞いてないし。

叫んだシャラがわんわん泣くのにつられて、カレンも泣きっぱなしになるわ、集まってきたメイドたちまで大泣きするわ。

……この家の人たちは、いったい……。

それよりも何よりも、ドレスよりも、ミカエル。

あんたあたしに、他に言うことがあるよね？

そんなこんなで、あたしは午後になっても、「おはよう」の挨拶すらあいつから聞かされていなかった。

午後におはようも変だけど、朝も昼もミカエルは食卓に現れず、執務室に籠りきりになっていたのだ。

ミカエルが忙しい人なのは、理解している。

あたしの頭の中を円グラフに見せたら、いまは九割以上がミカエルのことだけで占められているけれど、ミカエルは花嫁問題、つまりあたしのことばかりを気にかけてもらえないのだ。

彼の頭の中の円グラフに、あたしはどれだけの割合で存在してい

るのだろう。

一割にも届かない。0.1パーセントくらいかもしれない。
仕事と、総帥嫡男としての責務で99.9パーセント。嫁になる
だろうあたしのことで、0.1……あるのだろうか？

それって、どうでもいいぐらいの価値なんじゃ……。……………。

あたしも、あたしだけだね。九割以上とかほざいてるけど、元彼
のことはどうした？って、思うし……。……………。

「ミカエルと結婚します」なんて学校の子たちに知られたら、ミカ
エルファンクラブは元より、檀君に好意を寄せてる女の子たちから
も殺されるかも……。。「フリーになった彼をゲットする前に、ヒリ
君を振った身の程知らずを撲殺しなきゃ気が済まない！」みたいに

……黙っておこう。うん、そうしよう。どのみち学校に通い続け
るのは無理だろうし、退学でフェードアウトするまでしらばっくれ
ておこう。

高校に行けなくなるのも、文月と過ごせなくなるのも寂しいけれ
ど、あたしの都合にミカエルをいつまでも付き合わせるわけにはい
かないし、浮ついた気持ちで中途半端な行動もしていけない。

この家のこと、一族のことも、もう他人事ではないのだ。

頑張ろう。あたしのことだから、いいお嫁さんにはなれないけど、
できることを一つ一つやっていくしかない。

と思ったあたしの密かな決意表明は、しかしその日のうちに玉砕しそつになる。

カレンが他のメイドたちと楽しげに眺めていた、『聖衣規定書』とやらが原因で。

ミカエルの父親の命令で、あたしとミカエルの結婚式の準備は前々から行われていた。

当の本人たちが関与どころか一言も口を挟めないうちに、来年の春に向けて急ピッチで何事やらが遂行されている中、ドレスの発注についてはミカエルの要望で止められていたらしい。

「らしい」というのは、何から何まで蚊帳の外に置かれて、挙式に纏わる内情をあたしが何一つ知らずにいたせいだ。

花嫁筆頭候補でありながら、「なあんにも知らない、聞かせられてないって、どういうこと?」と思いつつ、つい最近までミカエルと結婚する気なんかさらっさらなかつたあたしなので、何か聞かされても完璧にスルー、耳にした一秒後には記憶を未梢していた可能性も無きにしてもあらずだけど……。

ただ、ドレスに使う生地などの材料だけは準備万端整えられて、規定を遵守しながら作成されたデザインに基き、製作に取り掛かるばかりになっていた。

この規定というのもナゾなもので、カレンからちよつと拝借した『聖婚聖衣規定書・千九百五十五年一部改訂版』をパラパラ捲っただけでもうんざり、じゃなくて、「凄いね！ 誰が着るの？」と、驚愕。

あたしの紋章とミカエルの紋章を組み合わせた刺繍が入るのはもとより、十メートルを超えるドレスのトレーンに刺繍される真珠の数が決められていたり、その真珠貝も採取場所が定められているばかりでなく、新月から満月の間に採取したものの限定だったり。

「数万個の一ケタ単位まで誰が数えるのよ？」と疑問になるそれで、終わりのない花々の連なりを描いた幾何学模様が刺繍されたり。

真珠と花々は、母なる海と大地になぞらえて、子孫繁栄と恒久平和の願いが込められているのだという。

規則のすべてに意味があるらしいけど、ヴェールの長さが百メートルを突破するのは「そこまでいらないでしょ」って感じだし。

果てには、製作に関わりドレス等に触れられるのは純潔の女性のみとか、製作者の人数も決められた挙句に家系に破門者がいてはならないとか、縫製する糸はハサミで切らず熱を用いるとか、実に小うるさい規則のオンパレード。

生地や縫製系となる天蚕糸を生産する野蚕やさんの採取、緑色がかつた繭まゆを作る天蚕てんさんの世話をして糸を紡ぐ人間まで女性限定って、どこまでやかましいんだよとげんなりする。

この天蚕の布は繊維のダイヤモンドと呼ばれて市場にも滅多に出回らず、一族の特殊な技術で薄緑の糸を純白にして作られるウエディングドレスや、男性が纏う婚礼用のマント風ヒマティオンは、太陽にさらされると神々しい緑の光を発して見えるのだそうだ。

ミカエルの両親が結婚式に着ていた衣装が期間限定で展示されていたらしく、見たことのあるカレンやメイドたちがうっとり話すのを、半ばドン引きしながら聞いていたあたしは、うっとりどころかうんざりの溜息しかでない。

「……あたしが嫁になったら、これ、廃止してもいいかな？」

タウンページ並みの厚さ五センチはある規定書をパラパラといじり、独り言をばやいてみれば、

「それは無理だと思えます」

カレンからにこやかに、でもきっぱりとした口調で返される。

「だって、あれもこれも意味くない？」

「伝統には、一見無意味に見える事柄にも、深く考察すれば後世に役立つ先人の知恵が込められています。それを存続していくことも阿見香様の御役目です」

にべもなく言われ、ぐぐっと唸りながら頭をひねるあたし。

「でも、ヴェールって、そもそもキリスト教のものじゃないの？」

純白のドレスもヴェールも、教会のイメージが強くある。けど、

スマクラグドス一族の総帥は独自の祭祀を行う役割を担っている
で、一般的な宗教に至心を置いていない。一族内でも各々の信仰の
自由を容認し、一族の統率についても宗教思想的縛りを行使してい
ないのだ。

といいつつ、この世界と関わりなく暮らしてきたあたしからすれ
ば、総帥の存在そのものが生き神信仰の対象になっているようにも
見える。

絶大な権力を持ちながら、血族婚で一族の血を守り続けているス
マクラグドスの絶対的象徴として崇敬されているのが、ここに慣れ
ないと異様な感があるのは否めない。

「キリスト教では、ヴェールは花嫁の身を悪魔から守る物として考
えられています。スマクラグドスでは古くより、花嫁に受け継が
れる歴史や、聖婚の証の一つとして用いられています。ですから、
歴代の一族当主夫妻の紋章も、ヴェールそのものに刺繍されている
のです」

「……………」

カレンから説明を受けて、疑問が重圧にすり替わる。

歴代の当主夫妻の紋章まで。これまた、ずいぶんと重々しい歴史
ですこと。

そんな鬱陶しいもの誰が被るんだよ！ と言いきうようになって、

あたしじゃん！」と一人ボケ突っ込み。

……言い間違えましたって、いまさらキャンセルするわけには…
…いかないかな。

グランマからの、メールの返事も来ないかもしれないし。きつと怒ってそうだから、「勘違いでした！てへっ」とか、「送り間違えました！うふっ」なんて言い逃れで、今ならまだ取り消し可能かもしれない……。

晩餐会の翌日は、休息できる予定をシャラが組んでくれていたので、カリキュラムは護身術とピアノの練習だけだった。

護身術で体を動かしたらすっきりして、足取り軽く渡り廊下を歩いていたとき、本館の通路を歩くミカエルの姿を見かけた。ダンジズや側近たちに囲まれて、携帯を耳に当てたままこちらに気づかずに角を曲がって行く。

あたしも同じ方向に行くつもりだったので、近づくのには気後れして歩調を緩めていると、

「何をやってるんだ、あの女は」

ミカエルの苛立った声に、ぎょっとして立ち止った。

携帯を切った後の溜息まで聞こえてくる様子では、相当おかんむりのようだ。

あの女って……………あたしのこと？

あたし、何かしたっけ？　そこまで怒られる心当たりは……………ない
ような、山のようにあるような。

歩きながら口早の英語で、ミカエルはダンスや側近のトニたちと話を続けている。けれど、ミカエルの鋭い口調以外は誰もが声を潜めていて、内容までは聞き取れなかった。

「朝っぱらから人を不快にさせやがって。ようやく姿を現したと思えば……………」

「身柄を拘束することは可能とはいえ、出入り先が厄介すぎますね」

ミカエルの文句に返答するダンスの声が辛うじて聞こえて、あたしのことじゃないと胸を撫で下ろしつつ耳をそばだてる。

「暫く泳がせておくしかないだろう。ったく、ただでさえ忙しいとき」

「中国の件については、ローデリオン様がミカエル様にお任せすることでした」

「お任せではなく、放り投げてるって言え。過去にブレイズがやった“ちょっとしたイタズラ”のハッキングが尾を引いて、父親も共産党の連中とそりが合わず手を焼いてるからな」

七月のときもそれでサジを投げて、お手並み拝見とばかりに俺に行かせただろ、と、ピリピリしたミカエルの悪態が響く中、遠ざかっていく彼らを見やりながら、ミカエルの言った「あの女」について、思い巡らしていた。

身柄を拘束？ ということは……もしかして、ヴィクトリアが見つけたのだろうか。

単なる仕事関係の人かな、とも考えつつ、訓練の後でまだ滲んでいた額の汗を、首にかけていたタオルで拭う。

なぜだか無性に、ヴィクトリアに会いたくなっていた。

彼女の名を思い浮かべたら、美しいのに近づく者がいない彼女のライムグリーンの瞳や漆黒の黒髪、横顔が、ありありと視界に広がって消えなくなった。

誰もいなくなった廊下を歩いて、またひとりで足が止まる。

好悪の感情ではなく、懐かしいような、ただもう一度会いたい気
持ちに駆られていた。

お仕事の都合で、更新が遅れています。(――)

これだと夏までには終わらなそうペースですね。(汗；；)

メールやメッセージにお返事ができない場合もあります。
申し訳ございませんが、ご了承ください。

また、こちらに掲載していた番外編『ミカエルの憂鬱』について、
お問い合わせを頂くことがあるのですが、
現在、出版化を検討して頂いてる段階です。

番外編、EYES続編の刊行については、正式に決まっても出版は
夏以降になると思います。

私のほうも諸事情ありまして、時間がかかるかもしれないことを、
何卒ご理解頂けると幸いです。

更新を含めて、いつもお待たせしてばかりで申し訳ございません。

それでは、第四部もどうぞ宜しくお願いいたします！

佐野光音 拝

それから夕方になってもミカエルと話すタイミングがなかったあたしは、ドレスの採寸の休憩で二階から階下へ降りる途中、エントランスに立つミカエルを見つけた。

ダンジズや側近たちに囲まれて、スーツ姿でいる。

どこかに出かけるのだろうか。

それにしても……ムカつく。可愛さ余って憎さ百倍よ。

なによ、上から下までビシッと決めちゃってさ。

階段の中ほどで立ち止まり、ぶんむくれて見おろしていたら、視線に気づいたミカエルがこちらを見上げた。

よつやくあたしに気づいたわけ。朝から目もあわせてなかったって、どついでいってこと？

あたしの怒気を察したらしいミカエルが、怪訝そうに双眸を瞬かせている。

で、あたしはといえば。相も変わらずの憎ったらしいいい男ぶり

に腹を立てながら、見惚れてしまうのも悔しくて、キツと睨んで唇を噛んでいたのに、目があったのちに昨夜の諸々のことを思い出して 不覚にも思い浮かべてしまった。

瞬間的に顔から火がでそうになった途端、足を踏み外して階段を滑り落ちていた。

「ぎゃっ、きゃあああああっ！！！」

「阿見香！」

「阿見香様！！！」

自分の絶叫が響き渡り、周囲からも悲鳴と叫びがどよめく中、腰と背中では段差を一気にずり落ちていた体が床に激突する寸前に誰かに抱えられる。怖くてぎゅちり閉じていた両目を見開くと、血相を変えたミカエルの顔が間近にあり、乱れた金髪が彼の頬を覆っていた。

「大丈夫か！？」

「…………心配してくれてるの？」

痛みに頬を歪めつつ、支えられた腕の中で口走っていたあたしに、ミカエルが眉宇を上げ返す。

「何を言ってるんだ？」

……なら、いいや……。ちょっとでも心配してくれてるなら、0・1パーセントの存在でも。

心の中でひとりごちて、贅沢は言っちゃいけない、忙しいミカエルに求め過ぎちゃいけないと自分に言い聞かせた。

「君が階段を滑り落ちるとは、何事だ？ 運動神経だけが唯一の取り柄なのに」

溜息をつきながら皮肉られ、「誰のせいだと思ってるのよ」と訴えたいのを呑み込んで口を噤む。

この顔を接近して見せられるのは反則だ。それを引き立てる装いもレッドカード百十枚切りだし。

艶のあるモスグリーンのスーツに明るめのブロンズカラーのシルクシャツ、大きな琥珀のループタイを合わせ、胸元にマスタートシフォンのハンカチーフを刺して、一歩間違えばホストクラブの帝王かマフィアの親玉もどきなのに、超ド級の貴公子然としているあなたは何者なんだよと言いたい。

地球全体が凡人の玉蹴りコートなんだから、部外者は地上に降りてくんなって思う。

なのに、どんなにぶんすか怒っていても、一瞬にしてどうでもよくなる魔力持ちが自分の旦那になるのも、じっくり見てるとおかししい。あたしやっぱり、この魔力で呪いをかけられてるんじゃないかって。

身動きをしないあたしの顔を、ミカエルが真剣に観察する眼差しで覗き込んでいる。

「どこか痛む？ 頭を打ったのか？」

「…………おはよう…………」

呟いたところで、近くにいたダンジズたちを見上げて視線を交わしたミカエルが、深刻そうに眉を寄せてさらにあたしへと顔を寄せてきた。

「さつきから返答がおかしい。頭を強打したかもしれない。阿
見香、視界はばやけてないか？ 俺の顔はつきり見えてるか？
二重にぶれて見えるとか」

「……しつかり見えてるよ。おはようって言ったのは、今日、挨拶もしてなかったから」

変な早合点しないで、と唇を曲げれば、目をぱちくりさせている。それから、ホツとしたように息をつき、ようやく思い至った顔になつて微苦笑した。

「おはよう」

答えて、あまりにも綺麗に微笑むから、それまでの不満すら一気に消し飛んでしまふ。

こんなに優しい笑顔を、あたしに見せてくれたこと……あつたっけ？

今朝や先刻までの不機嫌さとは違っていきなり妙に上機嫌なもの訝しく、目を見開いて驚いていたら、あたしの上半身を静かに起こして自分の膝に座らせてくる。大切な壊れ物を扱うように。

「気分は悪くない？」

背中を支えて訊ねられて、バラバラに乱れたあたしの髪まで指で撫でるように直してくれて、超優しいっぽい豹変ぶりにこっちは石化。

……無視されても石化、優しくされても石化って、あたしはいっ

たい……。

そこへ、「ミハイル様、お時間が」と、躊躇うように口を挟んだ
ダンジズへ、ミカエルが頷き返す。

「これから上海に行ってくる」

平然とあたしに伝えられたその一言で、石化がガラガラと打ち壊
されていた。

「今から？」

だから、めかし込んであったのね。ていうか、朝から涼しい態
度で無視するわ、やっと口がきけたと思ったら、次は出かける間際
に遠出の外出発言。

蚊帳の外どころじゃない。どこまであたしを放置プレイするつも
りなの？

結婚してくれてプロポーズされた翌日に、こんな疎外感や物悲
しさを味わうのは、しょせん恋愛結婚の関係じゃないせいなのかな。

「シャンハイって、ミカエル用語で、長い黒髪の現地妻って意味？」
「なんだって？」

「パリはブロンドの愛人、モスクワは銀髪の恋人、ニューヨークはピンクパンサーの本命とか、そういう隠語があるなら、前もって包み隠さずに言ってくれたほうがあたしも傷つかないっていうか」

ぷふぷつと声が頭上から漏れ聞こえて、ダンジズやトニの側近たち、階段から落ちた騒ぎで駆け付けていたシヤラやバーディングラムまで、口元を押さえて笑っていた。

それを睨んだミカエルが、口角に力を入れてあたしに言う。

「仕事で行くんだ。ドレスの採寸や打ち合わせを進めないと製作に取り掛かれないから、君は留守番だ。明日には戻るようにする」

ようやく話せたのに、すぐにどこかへ行っちゃうなんて。……あんまりだよ。

「ほんとに仕事？」

ふてくされて再び疑いの眼差しを向ければ、心外だと言わんばかり

りにムツとしている。

「なぜ疑う？」

「前科たつぷりだから」

「……そんなに疑うなら、今後の出張のときは、必ず君を連れていく。嫌だと言っても離さないから、そのつもりでいろ」

煌めく瞳で射抜かれるように見入られ、心臓が「ドキッ」としたり、「ひっ」と叫びかけたり、薄ら笑いで逃亡したくなったり。ミカエルの近くにいると、どうもあたしは正気を保てなくなる。

しかも真顔で忠告されると、手錠だけじゃなくて、首に縄も必需品になりそうで怖すぎる。テレビで見た引きずり回しの刑みたいにするずる連れ去られる自分が目に浮かぶよううで。

大人しく留守番をして、「あたしは港、あなたは船」のノリでいるのが平和かも。いつの時代の女だよって思うけど。

「……行ってらっしゃい……気をつけてね」

視線を合わせれば、離れる寂しさも動揺も見抜かれそううで、ミカエルを見ないように諦めてそう言ったら、頬が包まれてキスをされていた。

周りに誰かいるのも、キヤーッと甲高い声が上がるのもおかま
いなして熱っぽく触れて、あたしの戸惑いすらもあっという間に絡
め取ってしまう。

「……今朝は、悪かった。仕事と他のことで、余裕がなかったから」
唇を離して囁かれるのを、意識と現実がぼんやりととろける狭間
で聞いていた。ゆうべの延長線で体がまだ熱を帯びていて、キスの
刺激だけで感覚がはるか遠くまで飛びそうになる。

ミカエルは……ずるい。

あたしは数時間、頭にきていて、哀しくて、むくれていたのに。

キス一つで、悪かったの一言で、なかったことにしてしまえるの
だから。

黄色いさざめきが止まないメイドたちの反応で次第に我に返り、
真っ赤になった頬をミカエルの胸に寄せて隠そうとする。

キヤーーツて……今日一日の喧騒といい、彼女たちにとっては
今さらのはずでは？ うちらはこの数カ月、婚約者としていたわけ
で。

「このメイドたち、なんかおかしくない？」

どこのアイドルのコンサート会場だよって、勘違いしそうな歓声なんですけど。人前でキスをしてくるこの人も大概おかしいけど。

「おかしいと思うなら、君が教育していけばいい」

笑いながらあたしを立ち上がらせて、「打撲の痛みが少しでも出たら誰かに言えよ」と言い残して、ミカエルは出かけていった。

マグノリア色のロールスロイスや、後続する側近やSPの車両が見えなくなるまで見送っていたあたしの腕に、シャラが腕を絡ませてきて、元気づけようと明るく振舞い屋敷の中へと促していく。

「明日には帰ってくるわ。打ち合わせ、早く済ませちゃいましょう」

シャラと二人の夕食を和気あいあいと楽しんだ後で、ドレスの打ち合わせの続きをして三階に上がった。

シャワーを浴びて出てくると、ミカエルのいない寝室に一人でいるのが寂しくて、シャラの部屋に行こうかと思いつつ携帯を手にする。

ミカエルから連絡は……来ていない。

思えば、彼とは、メールや電話でのやり取りはほとんどしたことがない。始終一緒にいても、個人的なことで連絡を取り合う付き合いじゃなかったから。

……奇妙な関係。お互いのことを、他人には見せない一面を知っているのに。二人だけで、二人のことだけを考えて、ゆっくり過ごしたこともない。

色違いでお揃いの携帯を持っていても、プライベートな会話をしたこともない。

結婚ありきで始まって、逃れようともがいて、もがけばもがくほど落ちていくアリ地獄だったわけで、振り返れば無駄な足掻きをしていたように思う。

けど、ここからどうミカエルと向き合っていくのだろうと考えると、会話をするきっかけすら見い出せない気がして、どういう二人になっていくのかその形も思い描けない。

ミカエルとの間に、どんな夢や理想を持ちたいのか、わからないのだ。生活感のない暮らしのせいもあり、こうなりたいという結婚

の未来絵図が見えない。

可愛い花嫁さんになって、愛する人のためにおいしい手料理を作
って、たまには一緒に料理を楽しんだりして。大きくなくてもいい
から庭のある素敵な家を持って、日曜日には公園に仲良く散歩に行
って。

小さい頃から漠然とあった、そんなきらきらした憧れを抱ける環
境じゃないから。

別な意味で、きらきらしてるのはそうなんだけど。

旦那になる人も、そら恐ろしい経済力と権力にものをいわせた豪
華絢爛な生活も、見方を変えればちっぽけな夢を吹き飛ばす眩しさ
で、不満なんか口にしようものなら「身の程知らずが贅沢言っ
つて怒られるのもわかってる。」

だけど、あたしが理想にしていた結婚とは天と地ほども違いすぎ
るから、どんな生活を築いていけるのか、あたしの常識の範疇では
未来がさっぱり想像できない。

一緒に料理を作って？ ミカエルと？ ……ありえない。

共通の趣味すら持てない人で、音楽の好みもまるで違うし、学歴
も教養の程度も雲泥の差だし。

片や世界の最高学府を首席卒、しかも十一歳で。こっちは、「一
身上の都合で」「このまま学校をやめれば、高校中退決定だし。」

そう、大学の問題もある。勉強はどうするんだろう？

家でカリキュラムをこなして、いずれは大学に行くことも視野に入れるのかな。だって、周りを見渡しても、あたしの見知っている一族の人間で大学に行っていない人はいないのだ。シヤラは中退したらしいけど、生まれつき才女の彼女は論外。

それに、いくらここで勉強しても、あたしが行ける大学なんてたかが知れてる。

ケンブリッジ、オックスフォード、ハーバード、スタンフォード、マサチューセッツ、ソルボンヌ、エトセトラ。超名門大学への進学者ばっかぞろぞろいるけど、あたしじゃ行けないっつうの。日本の最難関の東大ですら絶対に無理。

ベッドに座ってあれこれ考えて、枕を抱えたまま、「どーすんだ、あたし」と青ざめてくる。「スマクラグドス一族が始まって以来のバカ嫁誕生」のレットルは、免れそうにもない。

……昼間の密かな決意表明はどうした？ あたし。

いいお嫁さんになれないのは誰よりも自分がかかってる。だから、できることを一つ一つだよ、と納得させてるのに、この世界で悠長な心構えが通じるのかも不安だ。

そういうことをミカエルと相談したくても、あたしのことどころじゃないと言わんばかりに昨日の今日で留守にされて、一人でぼつんといると、不安が増してきてしまう。

メールの着信音が鳴ったので、「ミカエル？」と思い手にすると、文月からだった。

『塾からご帰宅しやした。いま夕食のおでんを食し中。晚餐会どうだった？』

文月には申し訳ないけど、ちょっとガツカリしながら、ウツウツしていたところに届いた親友からのメッセージにも慰められつつ、メールの返信をする。

『塾お疲れさま！ おでん、おいしそうだね。超食べたくなった。晚餐会は……あんま覚えてないよ。（苦笑）筋肉痛が残ってるくらいで』

事実、記憶がぼやけているのだ。晚餐会後の揉め事、その後の夜の急展開が強烈すぎて、宮中に招かれていたことも随分昔の出来事みたいに見える。

筋肉痛は……慣れない晚餐会のせいばかりじゃないにしても、その話を早々に文月に披露するのは気が引ける。

『そつちもご苦労だね。電話しようと思ったけど、ちょっと寝るわ。いつ学校くんのか？』

『ミカエルが仕事で留守にしているから、明日は行けない。また連絡する』

前に休学しようと思ったときもそうだったけれど、文月には、やめることになるかもとは伝えにくい。

文月が夏休み中の夏季集中講座から塾に通い始めていたのも、最近になるまで知らなかった。前は何でも言いあえていたのに、あなたが文月に話せないことが増えていき、文月もあたしに進路の悩みなどを打ち明けなくなっていた。

なんで話してくれなかったのか、学校を休みがちになったあたしに気を遣ってくれてるのだろうとも思うけれど、隠し事が多くなつたあたしへ、文月も同じ気持ちでいたのかもしれない。

生活するフィールドが変化すれば、以前そのまま仲良しでいたい気持ちとは別に、何でも話せなくなるぎこちなさが出てくるのかもどかしい。

進む道が違うのだから、いずれはバラバラになる。その時が、ちよつと早くなっただけ。

なのに、お母さんや祖父母と離れて生活して、檀君とも別れて、文月とまで離れたら、唯一の帰れる場所を失いそうで、また心細くなる。

人を傷つけながら、それでもミカエルじゃないと駄目なんだと思いきわって、好きな人と結ばれたばかりで。なんでこんな鬱々と、情

緒不安定になるんだろう？

たった一人の人に自分を許したら、もっと幸せな気持ちになるのだと思っていた。

でも現実には、幸せどころか、寂しさや不安、心細さが募るばかりだ。特殊な事情がある家だから、引き返せないのはわかっていても、これでよかったのかなと悩んでしまう。

それもこれも、ミカエルがいないから。

出かける間にキスはくれても、メールも電話もくれないって、
どういこと？

なんで侍女から、「SPからの連絡で、無事に上海に到着された
そうです」って、聞かされなきゃならないのよ。

一言くらい、あたしに直接連絡をくれてもよくない？ 「着いた
よ」「くらい、メールしろっての、バカ！

いくら忙しくたって、到着メール打つのに三十秒もかからないじ
やない。片手で一分かからない気遣いが、なぜできないのよ、あの
男は。

冷静に考えれば、そういう奴だってわかってたでしょ？ と、諦
めている心情もくはないけど。

待つてばかりでいないで、あたしから、メールしようかな。

……でも、なんて書けばいいんだろう。“上海の彼女に会えましたか？”では、いくらなんでも愛想がなさすぎる。

携帯を手にしたまま、悩むこと数十分。

メールを打つのに三十分以上悩んで、結局一文字も打てないまま、時だけが過ぎていく。

十一時を回ってるから、ミカエルももう休んでるかもしれないし、疲れてるのに着信で起こしちゃったらまずいと遠慮したり。いや、この時間ならまだ起きてるはずだとも考えたり。

檀君とのときだって、こんなにイライラしたことはなかった。

メールだってもっと気楽に送れたのに、何を話していいか分からない相手なんて、どうすればいいのよ。

……おやすみの一言も、送れない。その程度の勇気すら、出せないなんて。

心の中で、名前を呼んだら、聞いてくれるかな？
ミカエル。
こちら阿見香です、応答して下さい、みたいに？

「メールよ来い。電話よ来い！」

携帯を凝視しつつ、声に出して試しに念じてみても ……一向にきやしない。

ミカエルが察知できるテレパシーみたいな能力って、こっちが危機的状況じゃないとまったく発動しないのだろうか？

使えない能力だ。「俺の血は普通じゃない」とか、シンクロニシティがどうのとか、もったいぶってほざいておきながら、いざという時にアテになりやしない。

あたしが「お願い」って言うるときに、どーしてうんともすんとも言ってこないのよ。嫌がっているときは、さんっざん干渉してきたくせに。

危険時にしか反応しないなら、バルコニーから飛び降りてやろうかな！？

ていうかさ。こっちが念じたりテレパシー云々の前に、やっぱ連絡来るよね？ フツーなら。

悶々と思って、あたしは深い溜息をつく。

……だから、あの男は、普通の男じゃないんだってば。一般常識だの、婚約者への細やかな心遣いだのを、期待しちゃいけないのよ。

役立たず。空気読まない俺様KY王子。……もついいもん。

……メールくらいちょうだいよ……。バカ。

おやすみくらい、聞かせてよ。

抱きしめあつて過ごした初めての夜の、次の夜に、一人で放つておかれたら、切ないよ。

恋愛したいとも、ずっとあたしのことだけを考えるともしやないから、声くらい聞かせてよ。

うそつき。「俺のすべての夜は、君のものだよ」って、甘い言葉で囁いていたくせに。

その次の日から、いないじゃん。

ミカエルの枕を抱えてうずくまっていたら、左手の指輪が、ベッドサイドの灯りを受けて煌めいていた。

付けたままでいたそれを抜いてしまおうと触れてみたけれど、もっと哀しくなるのが辛くて、指輪を見ないように目を閉じる。

毎日洗濯されているリネン類の中に彼の香りを探しながら、ミカ

エルの代わりに枕をぎゅっと抱きしめて、会いたいと伝えられない想いを腕の中に閉じ込めた。

電話が来ないのは、よかったのかもしれない。

会話が続かなくても、電話を切りたくなくて、無理矢理に『聖衣規定書』の愚痴と文句を朝まで並べていたかもしれないし。

メールだって、「おやすみ」を送信して終わらせたくなくて、だからメール攻撃をしてミカエルを寝かせなかったかもしれない。

一言でいいと最初は思っても、一度携帯が繋がったら、そのままずっと繋いでいたいと望んでしまいそうな欲張りなあたしがいるから。

鬱陶しさと迷惑をぶちまけずにすんで、よかったと思おう。

朝早く目が覚めた翌日。寝起きの頭で、隣にミカエルが寝た跡がないのをしばらく眺めていた。

誰かが寝ていた形跡があったらそれはそれで不気味だと思い直して、枕元に転がっていた携帯を見ると、着信とメール受信の表示に眠気が吹き飛んだ。

零時過ぎに一件つつあり、電話の後にメールが送られてきていたミカエルから。

なんだかんだ、切ないとか辛いとか恋心に苦しんでいたわりには、すぐに寝入ったようで、朝まで枕を抱えて熟睡していたあたしの神経って素晴らしいと自画自賛しながらメールを開く。

『寝てるのか？ 一時までは起きてるから、気づいたら電話してくれ』

素っ気のないメール。

留守録にも同じ内容のメッセージが入っていた。甘さのカケラもない、仕事の延長線みたいな事務的な口調で。

つつか、ミカエルもタイミング悪すぎだよ！ あと三十分、起きてればよかった。

ムカつきながら、素っ気ない彼らしさに苦笑いが零れて、『おは

よう。いま気づいた』とだけメールする。

六時前なので、まだ寝ているかもと思ったら、すぐに返信が届いた。

『おはよう。寝付きが悪くて、朝方にようやくとうとうしたら、君が烈火のごとく怒っている夢を見た。今日は、十八時には東京に着する予定。“あんたとなんか結婚しない！”とブチ切れて家出をされたのが、正夢にならないように祈ってる』

どんな夢なのよ、それは……。烈火のごとくなんで、失礼な。

当たらずといえども遠からずではあるけどな。

『それ、半分正夢です』

にっこり笑顔マーク付きで返信したら、返事が来なかった。

不愉快になったのか、あたしの扱いに困ってるのか、他のことで忘れ去られたのか。

……まさかと思っけど、本気に受け止めて、ビビッてるのか
じゃないよね？

今日、帰ってくるのかな……あいつ。

「面倒くさい女とは関わりたくない。モノにした嫁の顔は一年に一度見れば充分」とかほざいて、今日中に帰ってこなかったら、正真正銘の正夢にしてやるんだから。覚えてなさいよ、ミカエル。

なんて強気なことを言っても、顔を洗う前に十回、顔を洗ってからも三十回以上、素っ気ない伝言を連続再生した弱味は、絶対に知られちゃいけない。

間違っつて消さないよう保存設定にもしたから、携帯も見られちゃまずいと思いつつ、あたしはその日、十分置きに時計を確認していた。

十八時まで、あと何時間何分と数えて、そわそわウキウキしながら。

夢色の夜明け

3 (前書き)

ようやくの更新。ちよつと短めです。(^^; ;

活動報告にもご案内していますが、SF恋愛小説の書き下ろし新作『夏空パラレル』が、エタニティ・ロゼより刊行予定です。発売予定日は、おそらく6月20日〜24日ぐらいになるかと思えます。

どうぞ宜しくお願いいたします！

ミカエルたちは予定よりも遅れて上海を離れ、機内食で夕食をとるといっているので、あたしはシヤラと二人で夕食を済ませて、ミカエルの帰宅を待っていた。

一時間や一日がとても長い日で、昼間もちらちらと時計ばかりを見ていたあたしにシヤラが呆れながら、「お勉強に身を入れないと、私より怖い鬼教官にビシバシ怒られるわよ?」と脅すので、ようやくカリキュラムがこなせる有り様だった。

「シヤラだって、勉強については負けず劣らず怖いよお。前から言ってるけどさ、数学だって、こんなの覚えても意味くない? 買い物で計算する時に、足し算引き算ができれば充分じゃんって思うんだけど」

苦手な数学のテストを終えた後で、ぐったりして愚痴を零してみたら、さくらんぼ色のふつくらとした唇を突き出して言う。

「怖いだなんて。私とあの人を、同列にしないでちょうだい」

打撲をした背中と腰の痛みは、カレンに貼ってもらっていた大きな湿布が効いたのか、気にならなくなっていた。

それでも長時間椅子に座っていたり、身動きをした拍子に鈍痛が

あつて、思わず顔をしかめるあたしをシヤラが案じてくる。

「ドクターに診てもらいましょうか」

背中をゆっくり摩るように触れながら「どの辺が辛い？」と訊かれて、「時々ちよつと痛いだけだから」と苦笑を返す。

そこへ、触れていた手であたしの手を取ったシヤラが、美しい瞳を見開いて真顔で言った。

「私のこと、お姉ちゃんって呼んでいいのよ？」

「……………は？」

なにを言い出すのだろうと目を瞬かせてまじまじと彼女を見れば、南国の海の浅瀬を思わせる澄んだ眼差しも、更にこつちを覗きこんでいる。

「日本では姉妹の契りをかわずと、妹は姉のことを“お姉ちゃん”とか、“お姉さま”って呼ぶのでしょうか？　さまは違うから、ぜひお姉ちゃんって呼んでくれたら私も嬉しいわ」

「……………姉妹の、ちぎり……………？」

ポカンとしていると、あたしの手を両手で握りしめたシヤラが切々と訴えかけてきた。

「だって、義理の妹になるんですもの！ 私、阿見香と出会ってから、その日が来るのをずっと待っていたのよ！ 阿見香にお姉ちゃんって呼ばれて、朝は阿見香の髪をとかしたり、その後で今日着るお洋服と一緒に選んだり、お化粧品をしてあげたり、それから一緒にお買い物に行ったり、乗馬をしたり、二人でお稽古事をしたり、旅行に出かけたり、夜は遅くまでお喋りを楽しんだり」

ずらずらと並べられるそれに、あたしは首を傾げるやら青ざめるやら、だんだんと上半身をのけ反らせながら冷や汗までかく始末。

髪をとかしたり服を選ぶのは、侍女のカレンの仕事では？ 化粧品が必要な時カレンがしてくれている。シヤラにだって侍女はいるのに、なんでシヤラがあたしの身支度のお世話係までするのよ。

姉妹の立場が違うけど、アティアナのノリに似ているようなと焦りつつ、シヤラはどんな思いであたしとミカエルを見ているのだろうかと、少し気になっていた。

あたしに、シヤラの胸裏のすべてはわからない。心から喜んでくれているのは伝わってくるし、姉妹の契りの話も、彼女なりの誠意の表れなのだと思う。

粉々に打ち砕かれた二人の過去を、ここまできて勘ぐる気持ちにはなれない。シヤラには今、素敵なパートナーもいる。

けれど、誰にも語れない複雑な感情も彼女の中にまだ息づいているのではないかと、澄んだ瞳の奥にその陰りを探そうとする。

ミカエルから切り離せない片割れの存在。ミカエルと同じくらい

大切なシヤラを、あたしが追いつめていたらどうすればいいのかなんで、一抹の不安を覚えながら。

そんなあたしの戸惑いをよそに、痛いくらいに手を握り締めてきたシヤラが、切々と懇願する形相で口を開いた。

「ミカエルのこと、よろしくね」

「……シヤラ」

「ほんつと人でなしで意地悪で口は辛辣だし、人を人と思わない傲岸不遜の上に捻くれてるし。“スマクラグドスの次期総帥は、俺が世界の法律と言わんばかりに黒いものも強引に白にする手腕に長けている。従わない人間は人間扱いせず、刃向う奴は再起不能にしないと気が済まない。助けてくれと哀願されても、ダニの言語は習得していないと公衆の面前で暴言を被せ、社交界からも孤立させ野垂れ死にさせる”なんて下馬評もある人だけど、優しいところもあるの。」

素直じゃないのが、ほんつとにどうしようもない兄だけど、阿見香ならわかってくれるわよね？ ミカエルを相手にできる女性は、世界広しと言えどもあなただけなのよ。死ぬまで見捨てないであげてね？」

「……………」

ダニの言語、って。

ちよつと待つてよ。あいつが、人でなしで意地悪で辛辣で傲岸不遜で捻くれ者なのは熟知してるけど、そんな下馬評まである男って、なんなの？

前に当の本人の口から、「社交界は陰湿ないじめがある世界だ」って聞いた記憶もあるけど、「公衆の面前で暴言」が真実なら、先頭切つてやつてんのはアンタじゃないの！？って疑問になるわけで。

客観的にみれば、一族の中でヴィクトリアを孤立させていたやり方と被るあたり、あながち噂だけではないと思える。

しかも「ああ、あの男ならやりそうなことだわ」って納得できるあたり……ミカエルの性格って、一生あのまんまなんじゃなかるうか。

「阿見香に任せることができ、私も肩の荷が下りた気分だわ。彼が歩いた後を、あちこちフォローして歩いて、人間関係を丸く収め直すのも楽じゃないのよ。私には荷が勝ちすぎる兄だから、阿見香がお嫁さんになってくれて、本当によかった」

心の底からホツとしていると言いたげに、晴れやかな笑みを浮かべているシャラを見て、あたしはさつきとは異なる複雑な心境に追いやられていた。

彼女を追いつめていたらどうしようかと一抹の不安を覚えていたはずが、追いつめられていたのはあたしじゃん！！って感じ？

持て余していたものをドッサリ放り投げて処分完了、身軽になって解放感でいっぱいという具合で鼻歌を歌っているシャラに、私はもう申し訳ないとか、二人を見てると胸が痛むとか、二度と思わないうようにしようとか心に誓った。

あちこちフオーして歩くのも楽しやないとは、間違いなくシャラの本音だろう。ミカエルのそばにいれば、それは納得できる。

晴れ晴れとした顔も嘘偽りのないもので、例え何か口外できない感情がわだかまっていたとしても、「あんな厄介な人、もうコリゴリよ」と一笑に付して流しそうだ。ミカエルと比べたら、ダンジズのほうが遙かにまともだし。

ミカエルが話していた、ようやく姿を現したという女性のこと、ヴィクトリアが見つかったのかと訊いてみようとしていたのに、そんな気分にもなれなくなっていた。

溜息を呑み込んでだんまりしているあたしを、親鳥がひな鳥を見るような温かい眼差しで見つめていたシャラが、何かを思い立った様子でサイドテーブルへと手を伸ばす。

そこに置かれていた果物皿からリンゴを一つ取り、室内ベルを鳴らして使用人を呼び寄せた。この家では、大抵の部屋に新鮮な果物が随時用意され、いつでもすぐに食べられるようになっていたのだ。

「これ、むいてくれる？」

まだ講義の途中なのに、シヤラってばおなかでもすいたのかな？
食べたいならあたしがむくのにと思っただら、「皮が切れないように、一周だけ綺麗にむいてね」と注文をつける。そして果物皿に添えてあった果物ナイフでリンゴをちょこつとむかせただけで、
使用人を下がらせた。

何をしているのかと眺めていると、テストで使った用紙の裏に皮を置いて、あたしに差し出してくる。

「ちょうどセロテープがあるから、元の形の円になるように貼ってみて？」

指示されてから、シヤラが時々してくれる遊びを取り入れた勉強の一環なのだと察して、曲線の残るリンゴの皮を円になるよう繋げて紙に貼ろうと試みる。

けれど元が立体的な形だったので、平面に無理に貼ろうとすると皮が千切れそうになった。

「元の形の円にしようとする、できないわよね？　じゃあ、皮の形に力を加えず、自然な曲線のまま紙に貼ってみましょうか」

言われるまま皮の数か所をテープで止めて貼り終えると、シヤラが「それでいいわ」と応える。

「リンゴの形としてあったときは、皮はOのように繋がっていたのに、こうして平面に貼り付けると必ずCの形になるの。皮と皮の間がどれくらい離れているかを、これで測ってみて？」

アクリルの分度器を差し出され、「120°ぐらい」と答えたあたしに、シャラが頷き、皮と皮の間に+120°と書き込んだ。

「そう。これは、どの大きさのリンゴをむいても同じなの。リンゴは正の曲率を持っているから、むいた部分の曲率は+120°ね。曲率は $\parallel 180^\circ$ を使うから、これを数式で現わすと、 $+180^\circ$ 分の $120^\circ \parallel +3$ 分の 2° になるの。曲線や曲面の曲がり具合を表す量のことを、日本語では曲率と呼ぶのはわかるわよね？ カーブがきついほど曲率は大きくなるわ。」

正の曲率とは反対の負の曲率、双曲幾何学についての話はまたの機会にするとして、つまりね、存在するものはこうして、すべて法則性に基づいて数式で表すことができるってこと。意識的に見なければ気付かないけれど、数学って、人間にとってすごく身近なものなのよ。それはわかる？」

「……………うん……………」

「阿見香が、数学なんて必要ない、お買い物するときに計算できればそれで充分っていうのは、一般論ではそうかもしれない。でもね、数学の本質を理解すると、世界がまるで違って見えてくるのよ。丸

い物の代表のこのリンゴのこと、丸い地球のこと、宇宙全体の形のこと、とつても小さなものから大きな世界まで、数学で見ることができる。

そうやって物事を習うことは、物事を自分の力で見るることなのだと、私も一族の先生に教わったわ。これは、数学に限ったことだけではないけれど」

言つて、デスクに両手で頬杖をついて、あたしへと目の高さを合わせてくる。

「阿見香は、これから、様々な物事を見る人になるのよ。見るとは、目に映る意味ではなく、考えて捉える力の意味ね。それは、あなたが今いる学校の同級生たちの中で、誰よりも大変なことかもしれないけど、素晴らしいこともあるわ。

そして、これだけはしっかり覚えておいて。どんな困難に突き当たっても、一人で頑張らなくてもいいこと……誰でも、そうなのよ。例えばミカエルの片腕にダンジズがいるように、私もあなたの片腕としている。カレンもそうだし、アティアナもブレイズも、陰日向なく阿見香を支えてくれるわ。だから、頼れる人間を頼ること、甘えていいことも学んで、あまりガチガチにならないで？」

「…………ガチガチ？」

「少し前から、お勉強にも前向きに取り組んでくれているでしょう？でも、頑張らなきゃ、頑張らなきゃ！って、思わなくていいの。数学も、“やらなきゃいけない”じゃなくてね、世界を観察する面

白さに目を向けることができずにいると、学ぶ苦しさでだんたんと自分の心を潰してしまうかもしれないわ。張り切りすぎ、頑張りすぎは厳禁よ、阿見香。ね？」

ウインクをされて、あたしの不安をシヤラはお見通していたのだとわかった。

頑張らなきゃって思ったところで、自分一人では何もできない。教えてもらわなければ、進むこともできない。リンゴの曲率とやらに限らず、知らないことだらけなんだもの。

あたしの目線で丁寧に教え諭して、言葉でも励ましてくれるシヤラの心配りに接して、焦ったところで空回りするだけだと気づかされる。空回りはあたしの悪い癖だ。

どちみち一族の人はみんな、成績を含めておバカちゃんな花嫁だと知っているに違いないし、こうなったら得意の開き直りで嫁修行していくしかない。

なんて思うそばから、晩餐会での死にかけた あたし的には大袈裟じゃなくそうだったあの緊張がよみがえり、紙に貼った赤い皮を指でのろのろと辿ってみる。

ミカエルにはこのリンゴの話だって「幼稚園レベルだろ」って言われそうだけど……憎まれ口さえ、今は恋しい。

昨日から会っていないと、パワーも出てこない。

数学の講義を終えてピアノのレッスンに向かう途中、防音になっている練習室まであたしを送ってくれながらシャラが言った。

「ミカエルのところへ嫁いでも、あなたらしくいることを、忘れてないで。ありのままのあなたのことを、みんな愛してるのよ。私やダンジズはもちろん、ミカエルも」

「ミカエルは……ありのままのあたしのことをバカにしてるよ。二言目にはバカバカバカバカ容赦ないもん」

「……阿見香。ミカエルの気持ち、もうわかってるわよね？」

立ち止ったシャラを振り返り、口を曲げて言い返す。

「ミカエルの気持ち？ なんの？ 嫁の顔は一年に一度見れば後は用なしみたいな人でなしっぷりなら、昨日今日で理解できたよ。仕事優先な人だから仕方ないけどさ」

初夜明けに眼中になく、そのまま出張でおいてけぼりをくらい、いきがけの駄賃みたいなキスはもらったけどメールすら深夜まで寄

こさず、やっとくれたと思っただら愛想のない文面に留守電。その上、メールに返信をしても応答はないし。

……なんか、またムカムカしてきた。

乙女心をことごとく踏みにじり、犯罪的前科もてんこ盛りのろくでなし男なのに、なんであたし、ウキウキ帰りを待ってんのよ。プライドはないのか、自分！

昨日から数え切れないほどついている、腹立たしい溜息にうんざりして、時計を眺めてみる。あ。また時計見ちゃってるし……

「あたし、やっぱり、病気かな？」

音楽室のドアを開ける力も萎えかけて、独り言のように漏らしたそれに、しみじみとあたしを見ていたシャラも小さく頷いた。

「うん。そう思う。ついでに言うと、一生そのままだとも思う」

「ちょっと。そのままとか、不吉なことを言わないでよ！ 一生ムカムカイライラしたくないし！ ミカエルだって、つうか、ミカエルのほうが悪いんだからっ」

「ミカエルが悪いのは同意だけど、あなたの鈍感さも人間国宝並よ」

どことなく会話が噛み合っていないような思いつつ、どうしてわからないのかしら、と首を傾げるシヤラに、あたしも首を傾げる。

鈍感な女性じゃなければ、ああいう夜の翌朝に、相手にしていた女をきれいさっぱり忘れられる男の心理も、すっきりと理解できるのだろうか。

オトナの女への道が険しすぎると唸りながら、そんなこんなで日が暮れて、十時を過ぎても帰って来ないので、先にお風呂に入ることにした。

とつくのむかしに成田空港に着いてるはずなのに、なぜまだ戻らないんだろう？

しかも面白くないことに、成田に着いた連絡もダンジズからシヤラに入ったもので、あたしのところへは一向に連絡が来やしない。

メールも電話も一言で充分、二十秒あれば間に合うのに、たったそれだけのことをなぜ惜しむのか。忙しいのはわかってるけど、二十四時間のうちの二十秒を惜しむほど余裕がないってわけ？

まさかと思うけど 電話代、通信費をケチってるとか言わないよね？ ムダ遣いは嫌いだとほざいて、前に学校の掲示板ガラスの弁償代、あたしから徴収したあいつなら案外ありうるかもしれない。

カレンの手伝いを断って自分で髪を乾かし、寝る格好で出迎えるわけにはいかないのでデニムとカットソーを身につける。

それから、シャラが「少しずつこつこついうお洒落も覚えたほうがいいわ」と、先刻プレゼントしてくれた香水をそとつけてみた。

教えられたように、手首に少量を取って、擦り合わせて体温に馴染ませてから、耳たぶの裏と首の付け根にも香りを移してみる。

ファーストパルファムにと選んでくれた鈴蘭の香りは、春の風のように清楚で、とびきり女の子らしい気分になんてさせてくれた。

草原の中に咲く鈴蘭の香気を、両手を広げて深呼吸するイメージで目を閉じる。

デニムじゃなくてひらひらのスカートをはいてみたくなるのもあたたかぽくはないし、両足が浮き立つ感じになるのもなんだかおかしい。香水ってアルコールが入ってるから、初体験で酔っぱらいモードになっちゃったのかもしれない。

教えてくれた花言葉も素敵だった。

純潔。純愛。幸福が訪れるなどの意味があるとか。

意識しない美しさの意味もあって、「阿見香らしいでしょ」「なん

てシヤラは煽ててくれたけど。

カレンが「ミカエル様が御戻りになりました！」と呼びに来てくれたときも、あたしはほんわかと香りに酔いしれたまま、「そうなの？ いま行くから、カレンは先に行つて」と伝えて、寢室のベッドでぼんやりと座っていた。

そして、首を傾げたカレンが部屋を出て行つて二、三分後に、ハツと反応して立ち上がる。 ミカエルが帰ってきたんだ！

廊下へとダッシュして吹き抜けから階下を覗き込むと、帰宅した一行と出迎えた使用人たちでエントランスが賑わっていた。

濃灰色のスーツに長い金髪を散らして、上品な白いブラウスを合わせたミカエルの姿に、釘付けになる。

昨日の夕方に出て行つて一日離れていただけなのに、一年ぶりに見るような懐かしさ、焦がれる想いが溢れてきて、体が動かなくなっていた。

……………あの場面を、思い出す。この家に来たばかりの頃、数日出張に出かけていたミカエルが戻ってきた日。こうして見おろしていたあたしを見上げた彼から、冷たく目をそらされたこと。

今また、ミカエルがあたしを見上げている。

目が合った瞬間、小さく微笑してくれたように見えたのに、あたしは笑い返すこともできない。

手摺りを固く握り締め、こうしてないで駆け下りていくべきか、でも待ち構えていたと思われるのもみっともない気がするしと迷っているうちに、ミカエルがダンジズやシャラと微苦笑した後にこちらへと上がって来た。

そのミカエルの背を、一緒に帰宅したトニたち側近やSPが、クスクスと笑いながら見送っている。

一步一步、螺旋階段が上がって来ることに、心臓の音が大きくなる。しまいには、不気味なイヤリングになってぶら下がっているみたいに、耳元でドクンドクンと鳴っている気がした。

「ただいま。出迎えに降りて来ないで、悠然と待ち構えている女王様」

そばに立ったミカエルが、僅かに首を傾けてあたしを見下ろしてくる。

金の髪が肩からさらりと滑り落ちるのも、エメラルドの眼差しに
シャンデリアの光が射して、見る者をうっとりさせる煌めきを放つ
のも、出かけたときのままの彼だった。

離れていた三十時間足らずの間、どれだけ会いたいと思ったこと
だろう。

なのに、こっちの気も知らずに変わらない皮肉を向けられて、強
張っていた唇が条件反射で尖っていく。

「悠然としてないし。エントランスまで行くタイミングを逃しちゃ
っただけだよ」

「どんなふうに出迎えてくれるかと、密かに楽しみにしたんだが。
どついう関係になろうと相変わらずだな、君は」

どついう関係って、と口を挟む前に、手にしていた紙袋を差し出
された。

「婚約者殿におみやげ」

ミカエルが、あたしに、おみやげ？

なんだろう、と、途端に意識がそつちに促され、「どうも」「も」
ありがとう」「も忘れて、無言で受け取った大きな紙袋をガサゴソと
開いてみる。

中には、首元に真つ赤なりボンを結んだ茶色いかたまりが入って
いた。

「リラックマのぬいぐるみ！　かわいい！！」

アパートに住んでいたときに持っていた三、四個のぬいぐるみは、
荷物にしてこなかった。ここではぬいぐるみなんて見かけたことも
ないので、懐かしさと可愛らしさで笑顔になる。

アテイの部屋にあった化け猫キティほどじゃないけど、丈が1メ
ートルはありそうでかなりでかい。

「こつちの空港で見かけたんだ。ショーウィンドウの中で寝そべっ
ていた、ふてぶてしい姿が気になってね。ベッドでダラダラ寝っ転
がって、ニヤニヤ携帯をいじってる君にそっくりだろ？」

何やら楽しそうに再び皮肉を被せられて、こつちは嬉々としてい
た気持ちやしゆるしゆるとしぼんでいく。

「ぶてぶてしい？ ニヤニヤって……ひどすぎる」

「いらない？」

「これ、ミカエルがレジに持ってたの？」

むくれて訊ねたあたしに、今度はミカエルが慥然とした顔を見せ
てくる。

「ダンジズに行かせるつもりが、断られたから」

他の人間も揃いもそろって、不自然に携帯に集中しやがってとほ
やくミカエルに、我慢できない笑いが込み上げてきて、声に出して
笑ってしまふ。

「一人でこれを買ったミカエルを想像すると、超面白すぎるから、
もらってあげる」

両腕で抱きかかえて、素直じゃない言葉を返していたら、目を細

めてあたしを見ていたミカエルが、「着替えてくる」と言い残して部屋に入っていった。あたしとミカエルだけが過ごせる、二人だけの空間に。

今日は、ちゃんと、ミカエルがいる。一緒に過ごせるんだと思うと、それだけで嬉しくて飛び跳ねたくなって、子犬のようにミカエルの後ろをついて回りたくなっていった。

ミカエルがシャワーを浴びている間に、寝室に脱いであったスーツとブラウスを侍従に渡してクリーニングをお願いしておく。

ミカエルには身辺の世話係として侍従がいるけれど、以前、「身支度ぐらい自分でさせる」とミカエルが切れたことで、侍従もミカエルの指示でしか身の回りの手だしをしないように心がけているそうだ。

それまで、服のボタンも自分で留められず髪も梳かせず、お風呂の中まで干渉されていた生活では、切れた気持ちも共感できなくはない。

切れたのは侍従相手ではなく、家の制度についてだと思っただけど、怒鳴られて猛省してしまった侍従は以降影の存在に徹するようになったそうで、あたしの前にもしゃしゃり出てこない。

物静かで、目が合うと菩薩のように微笑する中年の男性で、外の人に菩薩はともかく、この一族の用人総じていえることだけでなく、人柄はとても良い。

たまに女性のメイドたちの黄色い声に慄かされるあたしとしては、終始控えめな彼やバーディングム、男性の用人たちに接している

と、心なしか気が休まりやすいかも、と感じるときもある。

昨日の騒ぎの後では尚更、侍従のような人に接していると落ち着けるのだ。

「これ、お願いね。あと、バーディングガムが用意してくれている夜食に、レモネードを添えてくれる？ ミカエルが飲みたいって。オレンジの花の蜂蜜を多めに」

こんなふうにしてると、ちょっと奥さんみたい？と、浮き立っていたら、

「かしこまりました。頭痛薬と睡眠薬はどうぞなさいますか？」

衣服を受け取った侍従が、丁寧に訊ねてくる。

「頭痛薬と、睡眠薬？ ……何も言ってなかったけど」

「飛行機に乗られると、気圧の関係で頭痛を起こされやすく、夜は神経疲労でお休みになれないことが多いのです。ゆうべもご所望でしたので、ご用意したほうが宜しいでしょうか」

眉を曇らせて気がかりそうに言うので、頷いておく。

頭痛持ちなのは知っていたけど、飛行機にも敏感な体質だとは聞

かされていなかった。前に渡英したときだって、平然としていたもの。

ミカエルのことについて、本人が言ってくれなきゃ、教えてくれなきゃ、分からないことだらけなのに。

昨夜も、眠れなかったとメールにはあったけど、睡眠薬まで飲んでいたなんて。

言ってくれたら、疲れきってるときにメールをよこせとか、電話もくれないとか、そんな不満ばかり抱えずにすんだのに。

「無理しないでね」のメールの一言くらい、送りたかった。

「ありがとうございます。お願いします」

侍従が礼をして部屋を辞するのを見送りながら、両手を握り締めた。

ミカエルの脱いだ衣服の温もりが、自分の手の中にあるのを守ろうとする。

侍従が去ってから考えると、余計なことは一切言わない彼がミカエルではなくあたしに薬の確認をしたのは、ミカエルの体調をそれとなくあたしに伝えてくれたのかもしれないと思った。

ミカエルの健康管理はホームドクターが担当しているし、ミカエルと同じく医学博士の資格を持つダンジズもいる。

偏頭痛と神経疲労以外は丈夫そうな体質だけど、それでも身近にいるあたしも注意して、気配りしておかないといけない。

デイルームのソファに置いたおみやげのぬいぐるみを見て、笑顔になろうとする。

あたしが難しい顔をしていたら、もっと疲れさせてしまう。

ミカエルの衣服に触れていた両手のひらにそっとキスをしてから、両方の頬をむにむにと持ち上げてみた。

うん。イイ感じ。笑顔マジック。恋の魔法は偉大だよ。

こんなことをしてるだけで、「なんか超幸せかも。好きな人と結婚できるんだもん！ ファイト、あたし！！」なんて、音符とハートが飛び交う幸せに浸れるんだもの。

ふふつと笑っていたそこへ、寝室からミカエルが現れた。

「何をしてる？」

両手を頬に当て、口角を引き上げたまま振り向いたら、半乾きの髪をかき上げる手を止めて真顔で返される。

「死に損ないのピエロみたいな顔に見えるからやめろ。頭だけなじやなく、見た目も残念な花嫁だと言われたいのか？」

「……………」

奇特なものでも眺める目つきをされて、「誰のためだと思っとんじゃ、ワレ！」とケンカを売りかけた自分をぐっと抑える。ミカエルに刺激されやすいこの短気も直さなければ。

「ところでこれはなんだ？ チェストの上に放置されていたんだが」

反撃を引っ込めて宥めていた目先に、紙に貼られて変色しかかったリンゴの皮が差し出された。

「+120°と記入されてる」

「……………リンゴの曲率のお勉強」

「わざわざリンゴを使ってやることなのか。プレススクールじゃある

まいし」

プレススクールって、幼稚園とか保育園とか、子供のお教室のことだよな？ …… やっぱり言われたよ。

「シヤラは、誰かさんと違って親切で優しいから」

当て擦ると、それを聞かないふりでソファに座り、携帯をチエックしている。

「まあ、学校の成績もうちに来る前よりはマシになってきたしな。来週の実力テストの結果が出るのが楽しみだ」

「実力テスト？」

「学校であるだろ」

「来週？ そんなのあつたけ」

「何度も言ってるが、君はいつたい学校に何をしに行ってるんだ？」

呆れ顔で言われても、二学期に入ってからトラブルやら何やらでんこもりで、加えて宮中晩餐会なんて一大イベントまであったんだから、テストなんて聞いても耳に残るわけがない。

「でも、もう関係ないし」

「行かないつもりなのか？」

眉を上げて訊いてくるので、あたしも眉を上げて訊き返す。

「だって、行けないよね？」

あなたの嫁になるんだから。

「卒業までは無理だが、年内いっぱいには通学してもかまわない。スケジュールもそうするように調整させてある」

「行っていいの？　なんで？」

てっきり退学するのが当然なのだと思っていたので、突っ立ったまま予想外のことにも目をぱちぱちさせていたところへ、ドアがノックされ、夜食を載せたカートを押してバーデインガムが入ってくる。

あたしへも目礼してから、ミカエルの前のセンターテーブルに夜食を置き、「お休みなさいませ」と一礼して部屋を出て行った。

「春に挙式をすれば、これまで通りの生活というわけにはいかない。

どこに行くにも何をするにも、スマクラグドス一族夫人、ラマイエ聖族高位者としての責任が付いて回る。これまでは大目に見ていたが、女主人として、祭祀を行う訓練も本格的にしなければならぬ。君にとつては楽な日々ではないだろうから、せめてもう少しの間、自由に過ごせる時間をくれてやると言ってるんだ」

バーデインガムがいなくなってから、こちらを見ずに携帯を操作しつつ話されたそれに、あたしはまた自分の鼻の穴が膨らんでくるのを指で摘まんで抑えていた。

口調に刺々しさはないけど、くれてやる、って。……あんたね、ものには言い方ってもんがあるでしょうが。

たぶんきつと恐らく、「少しでも自由に過ごさせたい」と、善意で考慮してくれているんだよね？と思うから、こっちも善意で踏みとどまるうとしてるけどさ。

そついう調子で言い散らかしていれば、せつかくの善意があったとしても、そりゃ社交界で波風立ちまくりだよ。フォローするシヤラや側近たちの人間の身になってみるっての。

と言つても、そこが問題でもあるのだろう。周りのフォローが完璧だから、張本人は害をこうむることも痛い目に遭うこともなく、王様然としてのうのうとしていられるのだ。

あたしが嫁になるからには、あんたの性根を叩き直してくれるわ

！と、心の中で決意の握りこぶしを固めてみる。

結婚の話題で色めき立ち、大騒ぎしていたこのメイドたちについて、「おかしいと思うなら、君が教育していけばいい」なんて言っただけ、「真っ先に教育すべきはアンタだよ！！」って鼻息も荒くなってくる。

お皿のフルーツサンドを無言で凝視して気持ちを落ち着かせていると、あたしの気迫を勘違いしたらしいミカエルが、口に運ぶ途中だったものを差し出してきた。

「食べる？」

「いえ、けっこうです」

「学校、行きたくないのか？」

行けるなら、そりゃあ行きたいと思う。文月とも過ごしたいし、学校の雰囲気は好きだし。

会つのが超気まずい人ができてしまったけど、それを退学する理由の一つにはできない。

……できないけど、ミカエルと二人でいる姿を、元彼の前にさらすのは最悪すぎる。

「ミカエルも、行くの？」

「行くに決まってるだろ。一人で放置しておけるか」

「でも、仕事あるんでしょう？ あたしのことを優先しなくてもいいよ？」

「別に嫌々行くわけじゃない」

「嫌じゃないの？ ってことは、あの学校、好きになったんだ？」

「……………」

「けっこう馴染んできて、面白がってたみたいだもんね。少しはミカエルの気分転換になってるのかな……………」

気分転換になるなら、行くのもいいかもなんて親切で考えていたのに、低い声で無然と呟かれた。

「曲解女」

「はい？」

「なんでもない」

思わせぶりに言ってフルーツサンドを齧り、貰ったぬいぐるみを

抱えて正面のソファに座っていたあたしを、まじまじと眺めている。

「だいぶ前から考えていたんだが、君のレッスンには、会話向上力も集中して加えたほうが良さそうだな。的確なコミュニケーション、相手との正しい意思疎通の図り方を一から勉強したほうがいい」

「それはこっちのセリフだよ！」

威勢もよく言い放ったものの、その後からは会話がふつつり途切れていた。

あたしとミカエルは、顔を合わせればケンカばかりだった。

二人でお茶でもしながら語らうとか、日常会話を楽しむことを、してこなかった。

従兄妹で許婚という以外に接点がなく、共通する話題が何一つない。

結婚したら、そういうわけにはいかない。顔を合わせればケンカだけなんて夫婦にはなりたくない。

……だけど……

「……………」

「……………」

……………何を話せばいいんだろ……………？

いきなり沈黙になってから、五分以上が経過している。

ケンカの勢いがなきや、会話にならない二人って、どうよ？

帰ってくるまで、あんなに待ち焦がれていたのに。いざ二人つきりになったら……話ができなくて、気まずくてしょうがない。

ほのぼのとした会話なんて、まず、ありえない。

ここで前振りもなく、上海の彼女はお元気でしたか？　じゃ、おかしいし。

しかも、元気だったよって言われたら、話の先は断崖絶壁。つつか、あたしのお先はどろどろに真っ暗。

ガラスのピッチャーから、ミカエルがグラスにレモネードを注いでいる。

あたしがしてあげなきゃいけないかったかも、と慌てる間もなく、そのグラスをあたしのほうに勧めてくれた。

「どうぞ」

「……………どうも」

……………って、どうもじゃないよ、あたし!!

この状況で困り果てているからって、様呼びわりされてる 少なくとも、彼の周囲でミカエルを呼び捨てにしているのは、あたしか彼の親ぐらいだと思うんだけど、そんな男にお酌まがいのことをさせちゃマズインじゃないの？

加えて、どうも、と答えたそこで、他に言わなきゃいけない大事なことがある気がして、何だったかなと眉を寄せてみる。

それから腕の中のぬいぐるみに、ハタツと意識がひらめいた。

「クマ!」

叫んだ瞬間、フルーツサンドを食べていたミカエルの手と口がピタリと止まる。

「クマが、どうした？」

「クマを買ってきてくれて、まだお礼言っていなかったから。……ありがとう」

「クマを買ってきた記憶はないぞ」

「え？ でも、これ、クマでしょ？ リラックマ」

「クマじゃなくて、ただのぬいぐるみだろ」

「だから、クマのぬいぐるみのおみやげをありがとうって、お礼をね」

「それはおみやげのおマケだ」

「オマケって？ おみやげ、まだあるの？」

あたしのために、そんなにいろいろ買ってきてくれたの？ なんて、きゃぴっ！と喜んで反応しかけて、瞳を輝かせていたら、

「気づけよ。君に渡してある」

と言って、溜息混じりに自分で注いだレモネードを飲んでいる。

「渡してある？」

「俺が、帰ってから君に渡したものを見れば、すぐに分かるはずだ」

渡したもの？ めいぐるみと、入っていた紙袋を思い巡らして、折り畳んでおいた大きな紙袋を再び広げてみる。けど、何も見当たらない。

念のためにと逆さにしてガサガサ振ってみても、レシート一枚出てこない。

首を捻るあたしの前で、「アホか、おまえは」と言いたげに目を細めていたミカエルは、ヒントもよこさずに黙りこくってレモネードを味わっていた。

「何も無いよ？」

意地悪なんだから、とむくれて、膝に乗せ直したりラッククマに話しかける。

「教えてくれたっていいじゃんねえ？ ね、クマちゃん」

おみやげくらい、捻くれた渡し方をしないで素直にくれりゃあいいものを。

「どこまでもねじ曲がってる男なんだからやんなつちやう、アマノジヤクはこれだからイヤよね」「メールや電話の通信費もケチるドケチ男なんて最低」とボソボソとクマに抗議をして、同意を求めてみる。

「しきりに、ぬいぐるみに話しかけるのをやめろ。言いたいことがあるなら俺に言え。しかも誰がドケチだって?」

「前だって、掲示板のガラス代、わざわざ徴収したじゃん」

「あれは、君の行動の責任を自覚させただけだ」

「自分だって、あたしへの悪行三昧の行動の責任なんか、自覚したことないじゃんねえ?」

ミカエルを無視して、再びクマへ語りかけた直後。

「あ

声を上げて、クマを目の高さまで引き上げてみた。

リラックマの首に巻かれた、大きな赤いリボンの結び目の真ん中に、リングのような何かが通されて留められていたのだ。

キラキラした金属は見ていたけれど、てっきり飾りだと思っていたので、慌ててリボンをほどいて外してみる。

シンプルなプラチナのデザインのもので、二つ重ねて通されていた。

「指輪が……二つ？」

手のひらに載せてじっと見ると、それぞれの内側に真つ赤なルビ
ーが埋め込まれていて、『Michael』と『Amika
』の名前が刻まれている。

「それが本命のおみやげ。東京に戻ってから買いに行ったんだ」

ようやく気づいたか、と苦笑して、ミカエルが言う。

「代々伝わる正式なマリッジリングは、結婚式のときに。これは、
結婚式までのステディリングみたいなものと思って選んだ」

「ステディリング……」

「結婚しない！ってブチ切れて、家出されなかったために。家出しても、飼い主がいるって分かるように」

「あたしは犬じゃない」

ステディリングなんて聞かされ、気が動転してしまい、苦情しかスムーズに出て来ない。

TIFFANYの刻印を見やり、あの手錠と同じだと思い、「手錠と同じブランドだね」と咄嗟に言いかけて、それをここで出すのも微妙な話だよと口を噤んだ。

「いい男とみれば、ふらふらホイホイくっついて行く癖があるだろうが」

「女と遊び倒してきたあんたにだけは言われたくないよ」

口論だけは滑らかに言えるのが、自分でも可愛くなさすぎると哀しくなる。

それに、リボンから外したはいいけど、このリングをどうしたも
のかと戸惑っていたら、立ち上がったミカエルがあたしの隣へと移
動してきた。

すぐ身近に来られたせいであたしは硬直しているのに、さりげな
く右手の手のひらから指輪を一つ取り、あたしの左手の指に嵌めよ
うとする。 Michaelと刻まれたほうの指輪を。

「前に貰った指輪……付けたままだけど」

「一緒に付ければいい。重ねづけできるものを選んだから」

薬指に通されたステディリングを見つめっていると、ミカエルに左
手を差し出される。

あたしに、もう一つを嵌めると言っているのだと分かり、ミカエ
ルの薬指にお揃いの指輪を嵌めた。

彼の身につけるものに、自分の名前が刻まれてると思うだけで、
彼に触れている指先まで震えてくる。

「赤いリボンと赤いルビー……運命の赤い糸のイメージに合うだろ？ 元は東洋の伝説だし、日本育ちの君に合わせてみた。赤は、君が一番似合う色でもあるから」

運命の、赤い、糸……

「左手の小指が、赤い糸で繋がっているっていうあの話って、東洋の伝説だったの？」

「日本と中国にある話。俺と君は……生まれた時からの許婚だけど」

ミカエルが、あたしの左手の小指に、自分の左手の小指を絡めてくる。

「君で、よかった」

「……ミカエル……」

指を絡めたまま、頬を傾けてきたミカエルの唇と、微かに触れ合っていた。

その唇で、あたしの左手に触れたミカエルが、手首の脈打つとこ

るから小指へと、キスを重ねる。

「女から男に鈴蘭の香りを贈る意味を、知ってる？」

僅かに首を振ったあたしに、ミカエルが微笑んだ。その微笑が、美しい花が匂やかに綻ぶように綺麗で、あたしは息を呑んで見入っていた。

「恋の告白」

「そういうこと、よく知ってるね。……あたしのは、贈ってるわけじゃないけど」

たまたま貰って、付けてみただけで。と、弁明する口調が、しどろもどろになる。

シヤラがあえて狙った、なんてことは、ないと思うんだけど……
……。

その上、バスローブのままのミカエルの首筋や胸元が艶めかしく、

首の窪みにたまらない色気を感じてしまった。

そう思ったのを悟られないように目を伏せたまぶたに、優しいキスが落ちる。

「君らしい」

「……何が？」

「この香りが」

あたしの手首に触れていたミカエルの唇から、鈴蘭の香りが漂ってくる。

花言葉の純潔とか、純愛とか　純愛は、ふらふらしていた自分を否定できないので主張できないけど、純潔なら、自分に重ねられる。

あたしに触れられるのは、ミカエルだけ。

あたしの肌で包めるのは、ミカエルだけ。

重ねたキスから、甘い花とシトラスが絡み合う味がした。

レモネードの果実の名残りど、可憐な花の清々しさ。

透明な風に包まれているみたいなキスで、甘酸っぱくて、胸がきゅっと痛くなる。

初めてのキスじゃないのに、それ以上の夜も過ごしたのに、なんでこんなにドキドキしているんだろう。

止まらない震えで、小さく歯を鳴らしたあたしを、ミカエルが伏せた長いまつ毛越しに見つめている。

あたしだけを見つめる瞳。

照れ臭くて、視界から消えてしまいたいと思うのに、離れるなんて絶対嫌だと訴えている恋心を、どうすれば上手くコントロールできるの？

離れている少しの距離がもどかしくて、じれったくなる。

あたしを、離さないで。

躊躇いを飛び越えて、抱えていたぬいぐるみを二人の間に挟んだままミカエルに腕を回したら、彼の髪が、指にひんやりと冷たかった。

この髪を、乾かした思い出も、今はただ愛しい。

あたしでは無理だと、彼を支えられないと思ったあの感情も、乗り越えていける。彼に、恋してしまったあたしなら。

そう思い募ったとき、売り言葉に買い言葉の流れですっかり忘れていたことに気づいて、焦ってミカエルから唇を引き離した。

「頭痛、ひどくない？ 疲れは？ 今晚は眠れそう？」

すぐ他のことで頭がいつぱいになっちゃう自分に反省しつつ、矢継ぎ早に訊ねたら、双眸に甘い光を閃かせたミカエルが、あたしの頭を自分へと引き寄せる。

「俺の理解の範疇を超えている、突拍子もない君に再会したら、元気になった」

小さく揺れている、掠れた声。

甘さを帯びているせいなのか、いきいきと元気な人の声には聞こえない。……妙に色っぽいのも、具合が悪い徴候だったらどうしよう？

風邪をひいてワガママ王子になったときみたいな、あれに似た雰
囲気があるし。

「ほんとに？ お薬飲んだほうが」

「……黙って」

制されて、さっきより強く、情熱的に、唇が押し当てられていた。

何度も触れられて、何度も抵抗しようとしたキスに、瞬く間に溺
れていく。

もう、抵抗なんてしなくていいんだと思ったら、愛しさだけが溢
れてきて、ミカエルをきつく抱きしめていた。

早いもので、書籍『夏空パラレル』の予約が、セブンネットさんで始まっているようです。

発送はたぶん、24日前後になるのではないかと思うのですが。

今回も、エタニティサイトに番外編SSが掲載される予定です。

掲載は27日以降になるかと思えます。

(先週、急いでSSを仕上げました) > < ;

どうぞ宜しく願います。

それから、メールの返信が滞っていてすみません。

また、スケジュールが立て込んでいるため、

大変申し訳ございませんが、書籍プレゼントのイベントはお休みさせていただきます。

何卒ご了承ください。

光音 拝

カットソーの裾から、ミカエルの指が触れてくる。

長いキスト、素肌を掠める指。 そうだった。帰ってきて
ウツキウキでいたはいいけど、二人で過ごすって、これからはこう
いうコトが当たり前……

陶酔モードから、ドキドキしていた心臓が「ヒクツ」と引き攣り
そうになる。

なんでそこまで頭が回らないのか、単純な脳細胞が恨めしい。

初めての夜のことは忘れられない思い出だし、イヤかと訊かれた
ら「イヤではない」としか言えないわけで。

慎ましい云々ではなく、返答のしようがないのだ。幸せを感じた
ひとときだったのは確かだけど、あんなことをしょっちゅうされた
ら、あたしは死ぬ。絶対に。

ひと月に一度くらいで勘弁してくれないかな……じゃないと身が
持たないよ。春の結婚式を待たずにベッドで即死した花嫁なんて、
一族の末代まで笑い者にされるって。

キスの途中で、携帯が鳴った。ミカエルのだ。

「……出たほうが……」

無視してキスを続ける唇をどうにか離そうとしても、引いてくれない。

……前にもこんなことがあったような……。

仕方がないので背中髪を軽く引っ張ったら、

「旦那の髪をハゲさせたいのか」

不服そうに目を細めて、ようやく唇を外し顔をそむけた。……まだ旦那じゃないし。

「理解不能で頓珍漢な君といえるだけでも、丸坊主になりそうなのに」

トンチンカンはさておき、理解不能はあたしのセリフだつうの。なんでそう、長いキスの後に悪態をつけるのか、ナゾなんですけど？

「たたく、この男は。じと目で見やるそばで、携帯を耳に当てていたミカエルが、今度は電話の相手にまで英語で毒舌を吐く。」

「もう一度言え、レティシア。君の発音は高飛車で気取り過ぎで、非常に耳触りだ」

「……………」

第五秘書の、レティシアね。いい人だし、英語の発音だって全然気取ってないのに、八つ当たりされて可哀そうに。

カレンがあたしの勝手を制御するとき、たまに訴える言葉、「私がミカエル様に叱責されてもいいんですね」というあれも、チクチクと俺様攻撃をされた恐怖があるからなのだろう。あたしはチクチクどころか、ザクザクやられてきたけど。

それなのに、とんでもない俺様男にゾッコンになってしまったんだから、あたしってマゾなのかも……。

ミカエルが仕事の電話をしている間にさっさと寝てしまうつもりでナイトルームに行き、着替えを済ませてベッドに潜り込む。

傍らに横たえたりラックマのぬいぐるみへと、顔を寄せてみる。

……まだほっぺたが熱い。態度をコロリと変える王様ぶりを見せつけられても、「ミカエルらしい」と微笑笑が零れてくるなんて、重症だ。やっぱりあたし、完全に病気だわ。

理性を取り戻して冷静になろうとすると、長いキスだって、あんなことをしていていいのかと足踏みをする気持ちもある。

夫婦になるのだから、ああいうコミュニケーションは必要だと頭では受け入れているけれど、ミカエルが何を考えてあたしに触れているのかと思うと気が気でなくなる。甘い雰囲気醸し出していたのから一転、悪態モードになれる二重人格っぷりにもうろたえるし。

あたしは、前のあたしじゃない。

キスをされるのも、素肌に彼らしい指を感じるのも、嫌いじゃない。

ミカエルが望むなら、何でもしてあげたい。毎日は無理だけど。

男は、好きじゃなくても何でもできるって言ってたように、情熱的なキスをくれても、体まで許し合っても、何とも思っていないのかもしれないと想像すると、自分の気持ちをどうしようと思つ。

あたしにとつては好きな人でも、ミカエルにとつては単なる結婚相手で、恋なんて論外だと思われていたら……あたし、面倒くさい女になつちゃうよ。

気持ちを打ち明けて、それとこれとは別つて突き放されたら、やつと大切さを自覚したこの恋が哀しいだけのものになる。

ミカエルの突き放し方つて、容赦ないもの。自分の関心が向かない人間に対して、非情になる一面も知っている。

すったもんだでようやく型に納まった嫁で、将来は後継ぎを産まなきゃいけない女だからできる限り優しくしておこう、ぐらいいに見られていれば、恋心なんて持たれても鬱陶しいだけ。

ぬいぐるみも、指輪も、見せてくれる微笑も。優しさに甘えられるなら、それで満足して、本気になつたなんて言わないほうがいい。そう後ろ向きになるあたしは、意気地なしなんだ。

恋は、苦手だ。何度しても、何度つていうか経験は二度しかないけど、いざとなると、とことん弱くなる。

ミカエルへの想いは、気がついたらどんどん大きくなっていて、重くて抱えるのもやつとで、まともに歩くのも難しい。

右往左往して、どう進めばミカエルの負担にならないか、今度はそんな気がかりに足を取られている。

あたしだけのミカエルじゃないから。背負うものが多すぎる人だから。少しでもいい奥さんになりたいなら、あたしの感情まで押しつけて、重荷にしちゃいけない。

電話を無視できなかったのがよっぽど癪に障ったのか、むくれた様子でミカエルが部屋に入ってくる。そこで、クマを抱きかかえてベッドに横になっていいるあたしを見て、僅かに頬を緩めたのがわかった。

「ミカエルって、ほんと性格悪いよね。明日、レティシアに謝ったほうがいいよ?」

クロゼットルームでナイトウェアに着替えたミカエルが歯磨きをして戻って来たところで、機嫌の悪さが続いているのを見て取り、気の毒なレティシアを思って言うておく。

「なぜ?」

「謝るのが嫌ならさ、気難しいあんたに付き合って仕事してくれてんだから、フォローしてあげなよ」

「仕事だと割り切っていていちいち気にしてないだろ。俺の態度に振り回される役立たずなら、そばで仕事なんか任せられるか」

言われてみれば、そうなのかもしれないけど……。精神的にタフ

じやなきや、ミカエルと始終顔をつき合わすのはキツイだろうし。

「なんでいきなり怒ってたの？」

「プライベートを邪魔されたからに決まってるだろ」

「邪魔しようと思っただけじゃないでしょ？ 急ぎの仕事でしょ？」

言い合っている途中でベッドに入ってきて、ミカエルの視線が不服そうにリラックマを見下ろす。

「クマをベッドに連れ込むなよ」

「なんでよ」

「狭くなる」

「ひろいベッドなんだから、いいじゃん」

「君と俺が寝るベッドだ。クマが寝る場所じゃない」

「コレはぬいぐるみ。ほんとのクマだったら、三人で寝るには狭くなっちゃうから難しいだろうけど」

「……狭くなるから難しいの前に、状況的におかしいと思わないか？ クマと人間が同じベッドで寝られると思うのか？」

「つつか、あんたがクマクマ連呼するから、ごっちゃになっちゃったの。ともかく、今日は初めての家で心細いって言うから、ベッドに寝かせてもいいでしょ？」

「先にクマクマ連呼していたのは君だろうが。しかも何だって？ 初めての家で？ 心細いだと？ 君はぬいぐるみと会話ができるのか」

ミカエルの追及を無視したあたしは、どさくさまぎれに毛布の中にリラックマを入れ、ミカエルと自分の間に置くことにした。

「じついうの、日本では仲良く川の字で寝るっていうんだよ。じゃ、

「おやすみなさい！」

「……………」

指で額を擦りながら、ミカエルが溜息をついている。

「子供じゃないんだから。いくつだ、君は」

川の字はさすがにやりすぎ？ とは思うんだけど……………でも、こころでもしないと緊張してくる。

改まって二人並んで同じベッドで寝るなんて、どんな顔して寝るっていうの？

あたしもあたしだよ。初夜をいたしたベッドに先にノコノコと入ってるって、恥知らずどころかその気満々って思われていたら、どうしよう！？ ソファで寝た振りして過ごしちゃえばよかつたのに！

「……………ごめん……………子供っぽい婚約者で」

ミカエルがベッドに入ってきてから、避けるように出ていくのも気まずさ倍増で、ぬいぐるみを砦にしてミカエルと距離を取ろうと試みる。どう見ても不自然だろうけど、頼みの綱はコレだけなのだ。

大嫌いだったのに、大好きになっちゃった人。

近づかれるのも、イヤじゃない。けど、拒みたい。この心理は、なに？

誰かあたしに説明して！！

「謝る必要はない。俺も喜ぶ顔が見たくて買って来たんだ。気に入ってくれたならそれでいい」

目を合わせなくなったあたしにそう言うと、

「おやすみ」

囁いて、ベッドサイドの灯りを絞り、自分の場所に体を横たえた。

「……おやすみ……」

呟き返して、あたしも毛布にもぞもぞと潜り込む。

てつきり、迫られると思っていた。

出会った初っ端から、こっちの0・01ミリ程度の間をこじ開けてまで手を出してきたミカエルの行状からすると、このあっさり感には意外すぎる。

何事もなかったように寝られたら、新妻としては心細いわけで。

まだ妻じゃないけど、妻になる前の味見の段階で「コレはないな。

他にするか」と呆れられ、早々にポイ捨てされたら立ち直れないよ。
“ 独り占めしたいのは分かるけど、あなたのその体じゃ、ご成婚になる前に飽きられるわね。 ”

晩餐会で遭遇した、ミカエルの一夜限りのセフレたち。肉感的な目狐美女に吐かれた毒が、今になって嬉々とした力を奮いだしていた。

抱えたクッションに顔をうずめて視界を遮り、もやもやと膨らむ悔しさと心細さを、心の奥まで押し戻そうとする。

手を伸ばせばすぐのところにいるのに、なんでこんなに苦しくなるんだろう。

離れていた夜も切なくて、隣にいる今もまた、切なさでいっぱいになる。

「阿見香……？」

背を向けた体勢になっていたあたしに、ミカエルが声をかけてきた。鼻水が出てきてしまつて、音を立てないように嚙つたのが聞こえていたらしい。

なんでもない、と答えようとしても、喉が強張ってうまく声が出

せずにいたら、ベッドのスプリングが揺れて、すぐそばにミカエルが近づいてきていた。

顔をそむけているあたしの様子を窺ってから、境界線にしていたぬいぐるみをどかせて、あたしの体をそっと仰向けにする。

「なぜ、泣いてる？」

訊かれたって、あたしだってわかんないだつてば。会えて嬉しいはずなのに、そばで息遣いを感じているだけですごく辛いなんて、意味不明すぎだよ。

本気になったなんて言ったら、困らせちゃう。

あたしだけを見てあたしのことだけを考えてなんて駄々をこねたら、嫌われてしまう。

感情がハリケーンになったみたいに、アップダウンの激しい情緒不安定を引き起こして、涙が溢れてくる。

「ミカエルは……あたしが何を考えているかわからないって、言ったことあったよね？」

あたしもわからないよ。駄目って言えば迫って来て、許したら今度は知らん顔で、なんでそんな勝手なの？ 自分の都合でばかり振り回して、あたしをとことん混乱させる」

「俺を振り回して混乱させるのは君だろ。いきなり怒って泣かれて

も、俺にどうしろと？」

「さっさと背中を向けて寝なくてもいいじゃない！」

「背中は何けてないし、知らん顔もしてない。泣いてるのは、やっぱりまだ体が痛むのか？」

「体？」

「階段から滑り落ちたり、慣れないことをしたせいで」

「慣れないこと？ 体は痛くないよ。ぶつけた腰と背中も、大したことなかったもん」

「体が辛くて泣いてるんじゃないのか？」

「違うよ。ミカエルがうそつきだから！」

飛び出した文句に、真上にある綺麗な瞳がゆっくりと瞬きを繰り返している。

「何の話か……順を追って説明してくれ」

「俺のすべての夜は君のものだって言ったくせに、昨日いなかったじゃない！ 大うそつき」

ミカエルの八つ当たりを責められない。あたしのいちゃもんも、

彼に負けず劣らず性格が悪い。

でも止められなくて、両目を見開いているミカエルをムキになつて睨んでしまふ。

「うそつきだから、嫌い」

と、もう一度言った唇の動きが、近づいてきた唇で止められていた。

「……いいよ、嫌いでも」

「……なんで？」

それって、言外に、恋はいらないうって言ってるの？

そう詰め寄ろうとしたら、目じりの涙の雫にも唇を押し当てて、なぜか楽しげな苦笑を漏らしてくる。

「君は、怒っていると魅力が増して可愛い。勝気で、素直じゃなくて、誰の手にも負えない。君の火のような情熱に、大抵の男は太刀打ちできない」

微笑みながら、涙の痕を辿る唇が優しい。誉められている気がしないのに、大波になっていたあたしの気持ちまで優しくなってくる。

ミカエルの一言や、些細な行動の一つ一つに、くるくると気持ち揺れる。

ハリケーンの渦みたいだった感情が、ほんの少し優しくされただけで、ワルツを踊り始めたみたいだ。

あたしの意味では止められないもの。ミカエルにリードされて、くるくると踊らされている。

実際に手を取られて二人で踊ったときを思い出して、次第に夢見心地になってくる。

「辛い思いをさせて、悪かったと思ってる」

「辛い思い……?」

「君を、俺の世界に、無理矢理に閉じ込めてしまうこと」

頬から唇を離れたミカエルが、真上からあたしの目を覗き込んでくる。

「イギリスで、グランマにも忠告されていた。あの子にこの家は合わない。幸せを望むなら、手放してやれと。けれど、葛藤しながら

ら、結局は自分の我儘を通してしまった。俺に何も期待せずに、ただそばにいてくれる君の優しさを……失いたくなかった。

父が君に会って、話を強引に決めるときも、止めることもしなかった。躊躇いながらも俺を抱きしめてくれる、君の気持ちに甘えて自由を奪ってしまった」

いたわるような指で前髪がすくいなでられ、露わにされた額にミカエルの額が重ねられた。

「ごめん……阿見香」

結婚を決めたことで、謝って欲しいなんて、これっぽっちも思っていないのに。人に謝る育ち方をしてこなかったミカエルに「ごめん」と言われるのは、愛しくて、苦しい。

あたしの中に沈んでくるミカエルの思いを、大事に慈しんで抱きしめたい。

そうしていたら、ミカエルのあたしへの気持ちが恋にならなくても、あたしはずっと、ただ一人の人を愛し続けていける気がする。

本当のあたしは、何も期待してないわけじゃない。

少し前なら違ったけれど、あたしは今、ミカエルに期待している。伝えられない独占欲で、あたしだけを見て欲しいって、思ってる。

でも、あたしを必要だと言ってくれるなら。それだけで、苦しい独占欲も、幸せな恋の力になっていく。ミカエルの前で、たくさん笑えるあたしになれる。

「これから泊まりがけで家を空けるときは、君を連れていくよ。一緒に、行く?」

コクンと小さく頷いて答えたら、ミカエルの眼差しが強い煌めきを帯び始めた。

「世界中を君に見せてあげる。君が願うなら、青い地球を窓から眺められる別荘を宇宙に建てて、そこで二人だけのバカンスを過ごすのもいい。広い宇宙の空間に、俺と君と、二人だけで暮らせる場所を作るんだ」

突飛な発想に目を丸くしたあたしは、ミカエルならその突飛なこととも実現できそうと思ひ、至近距離にいる彼を見上げて声を立てて笑ってしまった。

冗談でも、嬉しい。どんな見知らぬ世界へ連れて行かれても、怖くない。ミカエルと一緒になら。

“君は、一人じゃない。どんなときでも、俺がいる。絶対に、君を一人にはしない。”

震えていたあたしに、ミカエルがくれた魔法の言葉。

意地悪な毒よりも、信頼している人からの思いやりを、信じよう。
疑心暗鬼になって、自分のことも、ミカエルとの関係も、壊してしまわないように。

笑顔になっていたあたしを、真剣な表情で見つめるミカエルが、ふいに唇を重ねてきた。

包み込むような優しいキスで求められて、あたしの唇も自然に解き放たれていく。

少しづつ深まるとキスに浸っているうちに、体の熱が高まっていた。
あたしも、ミカエルも。

ミカエルの体があたしに覆いかぶさり、どこまで絡めても、絡め足りない激しさで舌と舌がもつれあう。

「…………ミカエル…………ゆうべ、眠れてないって」

キスだけじゃ終わらないのを感じて、彼の気を散らそうと、唇をそらしてみる。

「君が隣にいて、我慢するほうがきつい。…………我慢しなくて、いい？」

熱い息遣いは、「やっぱり駄目」と怖気づいたとしても止められない、ミカエルの情熱をあたしに伝えていた。

我慢しようと、していたの？

おやすみって、寝ようとしていたのは……もしかして、あたしの体を気遣ってくれていたのかな。まだ、男の人を受け入れるのに、慣れていないから………

「……あたしは……平気……」

誘ってしまおうようで、ためらう囁きになった甘い息が、天蓋を囲うシフォンのようにあたしとミカエルを包んでいる。

一度見つめ合い、また愛しい唇が巡り合ったとき。ただそれだけなのに、求めてくれる嬉しさとときめきでいっぱいになって、気を失いそうになっているあたしがいた。

自分の中に、自分じゃない体を受け入れるのは、大切な人だから幸せだと思うけど、それだけじゃなくて。秘密めいていて、奇妙で、何かが切ない。

言葉で表せない力で、惹き付け合う。

誰かと体を結んで見つめ合う、この親密さを知ってしまったら、一人には戻れないと思う。

息苦しい束縛と高揚感、自分の深いところまでを分かち合うのは、充たされている瞬間を手にした分、失う怖さまで刻んでいく。

触れられるたびに甘美な涙を流す傷は、癒されることのないもの。

ミカエルに残された、あたしの体なのにこの手で触れられないその傷は、抱かれるたびにあたしを泣かせずにはいられなくなる。

女性として求められた証から、愛したいと悶える涙が流れ、愛されたいと悶える涙が流れ、広がる海になる。

もっと広げて　飛び込んで、どこまでも溺れたいから。助けなんて、いらない。

もっと、深くなれば　ミカエルも一緒に、溺れてくれる？

他の誰も知らない、二人だけの秘密の海に。

誰かの笑い声がする。…… オフィーリアだ。

クイーンパレスの広大な庭園や、花々の咲き乱れる温室が脳裏を駆け巡る。

向日葵や真っ赤なサルビア、ラベンダーが色を成す花の絨毯を、あたしは馬に乗って駆け抜けていた。

馬は、ハートスターだ。隣には、白馬が並んで走っている。ミカエルの愛馬の、カサブランカ。

馬上から、ミカエルがふざけて伸ばしてきた手に、あたしは笑って指を絡めていた。

海風の涼やかさと、光を纏う金の髪の毛の眩しさが目に沁みて、ゆっくりとまばたきをする。

光の煌めきを再び視界にとらえたくて、温もりで気だるくなった瞼を持ち上げる。

目が馴染んできたときには、あたしは、ミカエルの腕の中にいた。東京の、家。

夢を、見ていたんだ。とても、幸せな　夢。

その夢へと繋がる、幸せな朝が、ここにある。

あたしを抱きしめながら、ミカエルはまだ眠っていた。二重三重と引かれた遮光カーテンの向こうには、早朝の気配がする。

自分もミカエルも、素肌をさらしたままこうしているのは、目が覚めてみると気恥ずかしいけれど、ミカエルが起きるまではこうしていたいと思った。

綺麗な顔や胸元を間近にしているのも照れくさすぎて、目を閉じてもう一度寝てしまおうとしたら、あたしの身動きで薄っすらと目を覚ましたミカエルが腕に力を込めてくる。

しっかりと抱き寄せられると、息が苦しい。

吸いつくように触れ合う肌の艶めかしさが増して、頬の火照りがじわじわと全身に広がります。

ただ暑いだけなのかもしれないけど、こうしていたら頭に血がのぼりそうなので断念するしかない。先に起きておこうと、幸福なまどろみの未練を断ち切ろうとする。

「ミカエル……おはよう」

声をかけると、眠たげに瞼を上げたミカエルが、ほの甘い微笑を浮かべた。

「…………おはよう…………」

そんな素直な微笑を見せられたら、暑いだけじゃなくて、思考力が蕩けてあたしは廃人になりそうなんですけど。

「あたしね、もう起きようかと」

言ったら、不満そうに漏らした吐息を、あたしの耳元へと忍ばせてくる。

「…………まだ朝じゃない」

「もう朝だよ？ 何時かはわからないけど」

「俺が朝じゃないと言えば、朝じゃない。これからはそういつことだから」

「はい？」

なんなの、その俺流発言は。

夜の名残りを滲ませた息が、耳朶から首筋に広がり、仰向けにされた体がミカエルの両腕に囲われる。

喉元から顎へつたい登るキスがくすぐったくて、「あっ」と掠れた声を上げたら、たっぷりと熱を含んだ唇に自由を奪われていた。昨夜の続きのように。

「……ミカエル、朝だつてば」

起きてすぐになぜこうなるのかと理解に苦しみつつ、吸いついて離れ難い肌の艶めかしさで、頭に血がのぼっていく自覚もあったのは事実で、体は朝でも夜でも関係ないんだと感じてはいる。

心とは裏腹に。

「……俺が、いや……？」

キスを止めたミカエルが、至近距離からあたしを覗き込む。ちょっと意地悪そうに。

そういう訊き方は、卑怯でしょ。

しかも、人の体を興奮するよう仕向けて、手応えを感じているくせに、それを言う？

イヤだって言ったら、ぜーったいふて腐れるくせに。

「あのね……ミカエル。約束して欲しいの。学校で余計なことを言

わないでくれる？ その、結婚がどうか。今まで通りでいて欲しいの。大騒ぎにしたくないし」

学校に行くならと気がかりでいたことを、意地悪そうな眼差しで思い出して提案した。

先手を打っておかなければ、とんでもないことを言い出されかねない。

「交換条件でくるとはね」

「え？ 交換のつもりはないんだけど」

「条件は、のもう。約束する。そのかわり……」

「……その、かわり……？」

言葉の先を知るのが怖いのに、怖いもの知りたさで喉がヒクツと痙攣する。

ベッドサイドの灯りを受けたミカエルの瞳が、危うさを孕んで魅惑的に煌めくの見れば、答えは聞くまでもないのに。

「今日は一日、寝室から出さない」

う、そ。まじで……？

そこまでは、予想していなかった。

だってあなた、仕事は！？とか、あたしもカリキュラムが！とか、学校の準備が！とか、一日寝室から出なかつたら屋敷の皆になんて思われるか！！とか。

だけど、抵抗して大人しく引き下がる相手なら、あたしとミカエルは、こじれにこじれることもなかつたわけで。最初から。

乱れるキスに、諦めるしかないのは明らかで。

たとえ結婚というしがらみの中であっても、一夜限りの人たちと自分は違つと、求められている安心感を手にしたら、彼の言うなりに降参するしかないあたしがいた。

ミカエルは、宣言通り丸一日、あたしを寝室から出さなかつた。部屋の外に運ばれていた食事を食べたり、二人でお風呂に入ったりするほかは、ベッドの上で過ごしていた。

寝室から出さないなんてありえない、と思つたのに、しつとりと汗ばむあたしの体を片時も離さず、時折、ささやかな胸のふくらみ

にうつ伏せて眠るミカエルを抱きしめていたら、愛しくて大切に、涙ぐんでしまう。

彼以外に大切なものはこの世にはないと、噛みしめる想いに浸されていた。

けれど、昂った熱が平常に戻れば、体のたるさと虚脱感、頭がくらくらす疲労感で、精神的にも肉体的にもハードすぎるコミュニケーションにぐったりしていたのは否定できない。

翌日の朝、制服を着て食卓に着くと、シャラやダンジズを含めた全員のご機嫌がすこぶる眩しかった。お天気に恵まれた朝の日差しが眩しいだけではないと思う。

シャラもダンジズも、仕事を放棄したミカエルのせいで忙しかっただろうに、なぜかにこやかだし。

ミカエルがああ船をミサイルで爆破してからというものの、破壊されることなくなくなったピカピカのガラスを恨めしげに見上げる。

割れなくなったのも狙われずにいるのも、歓迎すべきことだけど、今朝ばかりは屋敷中に充満する無言の笑顔と晴れやかな空気が、純情なあたしには針のむしろのようだ。

ガラスの一枚でも割れて、風通しが良くなればいいのに。あからさまにあたしとミカエルを見ない、全員のさり気ない視線が、ウキウキビームになってこちらに注がれているのが何とも複雑だ。

寝室から出てこないで何をいたしていたかを、誰も知っている
だろうこのムードを、絞め殺したい。

ミカエルと言えば、ベッドでのこともバスルームでのことも、何
も覚えていませんって顔で、優雅に食前の茶を嗜んでいた。心なし
か、彼の機嫌もすこぶる良さげに見える。

それもまた気に入らない。人を何度も気絶させておきながら。

あたしだけが、いじらしい脳ミソに恥ずかしい記憶満載なんて、
許せない。

健やかな朝日が憂鬱で、なんかもう、純情乙女の時代は終わった
んだなと感傷まで誘われてブルーになる。

しかも給仕されたスープを見おろして、またどんより。「天然山
芋じよのポタージユです」……って。

よりによつて、なんでこれ？ 狙ってるのか？ と疑ってしまう
のも、すでに純情乙女じゃない。

曲がらずに考えれば、山芋は秋からが旬の季節の野菜だから、取
れ立ての物がメニューに出されたわけ。

「ウナギと並んで精がつく食材ですから」とか、「白くてトロミの
ある風味が素晴らしいですよ」とか、「野菜の形もナニかにそっくり

りで御祝いに最適」とか、下品すぎる裏があるなんて考えちゃいけない。

何度も気絶して、思考回路がイカレちゃったにしても。

「栄養価が高くて精がつく食い物なんだ」と、中学生だったあたしにあらぬ知識を吹き込んでいた祖父まで、恨めしいっただらない。

「食べないのか？ ぼんやりして」

差し向かいのミカエルが食事の手を止めて言うので、「誰のせいだと思っとんじゃ、われ！」と突っかかりたいモヤモヤを堪えて、食指の進まないスープを口に運ぶ。

グランマからメールの返事がないのも憂鬱だ。

激昂して、周囲にヒステリーをぶちまけていたらどうしよう。病身なのに、怒りのあまり危篤状態にでもなったらやばすぎる。

アテイからは、「ミカエル様にどんな弱味を握られちゃったの！？ なんなら私が直談判してあげる。阿見香お姉さま、早まらないで！」と、電話が来た。

あたしの意思だと言っても、あたしがミカエルに脅されていると信じて疑わないあたり、先見の明でもあったのだろうか。

ブレイズやジュード、誰が誰だかわからない一族の人たちからは「正式な御婚約、おめでとございます」の祝辞メールがわんさか届いている。

ミカエルを好きだと言っていたブレイズも難解な人だ。冷静沈着な女性だから、ミカエルが誰と結婚しようと、相手があたしなものも頓着してないだろうけど、次にどんな顔をして会えばいいのかと頭が痛い。

「ん〜！ このスープ、和と洋の合体が絶妙ね。口当たりがねつとりしたジネンジョと、濃厚であまあい生クリームが、舌の上で絡み合う感じに悶えるわ。そう思わない？ 阿見香」

満足げに目を細め舌鼓を打つシヤラを、スプーンをくわえたまま、ジト目で見やる。

そこであたしに、話をふる？ わざと？ やっぱり皆して、狙ってるの？

合体。口当たりがねつとり。

濃厚であまあい生クリームが、舌の上で絡み合い、悶えて

これはあたしの勘ぐりすぎよ。絶世の美女で才媛のシヤラが、そんな下世話な話をするわけがない。しかも食卓で。断じてあるわけがないとわかってるのに、そこから抜け出せない自分が怖すぎる。

恋する乙女って、世の中が汚れなき桃色薔薇色に見えるらしいのに。

ヤマイモに過剰反応しているあたしは、女子高生どころか、人間と名乗るのも許されない気がする……。

それもこれも、麗しい王子然として取り澄ましている、二重人格も甚だしいミカエルのせいだ。

お久しぶりの更新になります。

今回の更新は、R18サイドはお休みいたします。

そのうちデート編を…と考え中。

返信不要でメールを下さった方、ありがたくメールを拝読させて頂いております。

いつもありがとうございます。(一一)

今回の更新、若干下ネタが入ってるので、苦手な方はゴメンナサイ；

集まりがあると、よせばいいのにお笑い切り込み隊長として張り切り、

下ネタでかつ飛ばすのが光音の中の人でございます。

(関東人なのに)

目立ちたがりではないんですよ。(たぶん)

いつか「佐野シモーネ」で下ネタ小説を書こうかと狙っているところですよ。(^^^)

(ほんとか??)

次回更新は、もうちょっととお話を進められるでしょうか。(苦笑)

光音 拝

ミカエルの憂鬱 1 【番外編・再掲載】（前書き）

番外編、『ミカエルの憂鬱』の再掲載をします。

本編の次の更新まで時間が空きそうなので、分けて更新します。
数日置きか週一掲載になると思います。

内容は、第二部と第三部の間のお話になります。

再掲載は、こちらからお願いさせて頂き、出版社から許可を頂いて
ますが、

出版社からの要望で、今後またネット上から下げる場合もあります。
ご了承下さい。

原稿は以前掲載していたものと同じです。

誤字脱字も、気づかないものは残っていると思うので、ご容赦下さい。
（苦笑）

光音 拝

D'ou? venons-nous? Que somme
s-nous? O? allons-nous?

“我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか”

ポール・ゴーギャン

やばい女にひっかかった。

彼女に出会って間もない頃から、俺の心の敏感な領域で警鐘が鳴っていた。

それははっきりと響きながら、息を潜めて意識的に耳を傾けなけ

れば理由の掴めない音で、永遠に解けない迷路そのものの心の内奥で警告を訴えていた。

それだけで危険が判り、ブレーキをかけるなり方向転換するなり出来れば、誰も苦勞はしない。

厄介なのは、この手の警鐘は、肉体の持ち主の幸・不幸で判断されるものではないこと。

生死の暗示や、生理的嫌悪感などとは違う直感。

神が近づいても、悪魔が近づいても、警告音は同じなのだ。

気をつける。

自分の目を開いて、自分の心ですべてを見る。

運命の分かれ道のどちらを選ぶかは、己自身だ。

この身一つで、いくつもの道を選ぶことは、不可能だ。

俺が選んだ運命は、本能に従う道だった。

実らなくてもいい。この想いの中で生きようと決めていた。

警鐘を聴くのと同じ時に、俺の本心は決意していたのだと思う。

そして俺は、ずっと求めていた答えを見つけた。俺の生きる真理を。

”我々はどこから来たのか”

見るべきは過去ではなく

”我々は何者か”

愛を求め、愛を知る者

”我々はどこへ行くのか”

愛の中へ、旅をする者

「本日の午前中に口頭決裁頂きたい案件は五十五件です。依頼を受けた順に述べます」

五十五件。昨日より少ないか。

こんな朝を過ごすようになって、そろそろ三年になる。最初の二年は大学院に通いながら仕事を手伝っていた。総帥となりその座を降りるまで、まだ数十年はこんな日々を追われていくのだろう。

大半が支援依頼の口頭決裁を、学校に行く前に済ませなければならぬ。

普段なら朝食の後で行うのが習慣で、一時間ほどでそれを終えた後に仕事に取り組むのが日課になっていたが、阿見香について学校に出向くとなると変更を要する。

早めにおきて、朝六時から七時までに片付けないと間に合わない。

「オーストリアの少年合唱団より、声楽芸術存続の為の寄付を求める依頼が届いています。近年の入団員の減少対策として、団員の退団後の進学支援を行う決定において、先々の資金繰りに備えた助成金が必要とのことです」

「助成する。ただし合唱団運営側にはなく、団員への奨学金制度を設立し、こちらが奨学金を後援するのが条件。団員それぞれに退団後から二十二歳の大学卒業まで、年間一人五万ドルまで無償援助する。大学に進学しない者は十八歳までの援助、大学を中退した者は奨学金総額の半額を返還する事。事故や病気、家庭の事情があれば審査の上返還は免除。大学新卒後、成績上位者はスマクラグド傘下企業で無条件雇用も可とする」

パソコンで、別口で溜まっている仕事を処理しながら応答する。

第五秘書のレティシアが俺の返事をノートパソコンに打ち込み、

次の案件を読み上げていく。

「続いて英国からです。科学誌ネイチャーからの依頼です。2007年に発見されたアイザック・ニュートン氏による直筆文書に絡み、意見が求められています。氏の旧約聖書解読により2060年に世界の終末が訪れると予言されている内容に基づき、五十年後には地球上の金属が枯渇すると懸念される説と一致する」と述べる学者もいることから、化学博士としてミカエル様のお考えをお伺いしたいそうです」

くだらない。数学者であり自然哲学者であり、近代物理学の祖と言われるニュートンの説とはいえ、百パーセント正しいとはいえない。それを引き合いにして、学者の立場で、世の中を混乱させる主張を垂れ流すなど言いたい。

「申し出の通り、化学者として論文を寄稿する。期限は十二月末日まで猶予が欲しい」

「そのように申し伝えます。同じくネイチャーからの依頼です。論文掲載の為の特別審査員を向こう向こう三年間お願いしたいのとです」

「断る」

「続いてドイツからです。化学専門誌アンゲバンテの編集長、及び副編集長数名の連名で、来年から編集長の任に就いて欲しいとの要請がきています」

「断る。自分にはまだ早いと伝えてくれ」

本音はそんなヒマはないと言いたところだが。

「続いてスイスからです。十一月にジュネーブで開かれる国際科学シンポジウムの招待公演の依頼が届いています」

「断る」

「インジウムの代替品開発について、国際共同元素開発プロジェクトのリーダー、パウロ・マクシミリアン博士より、先年に引き続き研究資金の支援が求められています」

「助成する。年三千万ドルを目処に向こう五年間。研究経過次第で延長も可。研究を急ぐように伝える」

「かしこまりました。続いて南アフリカからです。コンゴ内戦締結の交渉時、スマクラグドス一族が内戦締結の条件として援助を引き受けて建設した空港について、開港式典に来賓として列席をお願いしたいそうです」

「ダンジズを出席させる」

液晶のバックライトに使われるインジウムはレアメタルの一つで、他のレアメタルと同様に絶対数が足りない。日本でも企業が回収している中古携帯や家電が、レアメタルの都市鉱山と言われる由縁でもある。

レアメタルは採掘も製錬もコストが高く、地球での原子量も限られているため大量に作成できない。そのため、その資源の奪い合いが戦争を引き起こし、埋蔵量が見込まれるアフリカ地域では内戦が続く主な原因ともなっている。コンゴでの内戦もレアメタルのコンゴルタンが闘争の原因と見られていた。

世界中で起こる戦争の多くは双方に言い分があり、抑止するのも容易ではない。先進国や常任理事国であっても国レベルで踏み込めない問題も山積みで、中立を国際的に宣言しているスマクラグド

ス一族への調停依頼が年中絶えない。総帥の仕事の半分は、国と国、民族と民族の仲立ち、仲裁業とも言えるだろう。

早い話が、世界中の国家間の厄介事を押し付けられているのがスマクラグドスの総帥だ。

財閥の運営は一族の中枢に任せ、揉め事解決にも多額に入用になる資金源を強化させている。

勿論タダでやっているわけではないので、方々からそれなりに見返りはあり、湯水のように金銭を遣っても損失しないだけの経済力はある。

仲裁と援助により利得権利も増し、更に経済基盤が強固になる連鎖が衰え知らずに生じていく。

「続いてスコットランドからです。十二月にエジンバラで開かれる国際医学学会にて、遺伝子支配における秩序と解放をテーマにしたデイスカッション形式講演 会の進行役を務めてくれとの依頼です。現在決定している出席者は、脳科学権威のアラン・ジェラルド氏、医学博士のルーベル・サン氏、農学博士のパリス・ウォルシュ氏、宗教学者のエレイン・テレシコワ氏、生物学者のキンバリー・モスコーヴィッツ氏」

秘書が名を挙げ連ねている途中で手を上げて合図する。
「引き受ける」

「宇宙エレベーターの開発について支援の要請です。カルフォルニ

ア工科大学と東京工業大学、ケンブリッジ大学とシンガポール大学などが合同で立ち上げた研究チームから、研究費及び、一族からの人材・研究総監督者が数名求められています。なお研究費については現在、シンガポール政府が先んじて一億ドルの支援を決定しています」

「支援する。人材協力も惜しまない。必要な研究費は、経過報告を検討して決定する。初年度についてのみ五千万ドルの支援を確約」

「そのように申し伝えます。続いてアメリカから、ミスユニバースの特別審査員を務めて欲しいとの要請が来ています。こちらはシャラ様にも届いています」

「俺は断る」

「かしこまりました。続いてベルギー王室からの招待状です。皇太子ご夫妻のご結婚記念日に合わせて、十二月四日に開かれる晩餐会への招待状が届いています。阿見香様と是非ご出席下さいと夫妻より直筆のお手紙が添えられていますので、後ほどご覧下さい」

……十二月。

キィを打っていた自分の指が止まっていた。

阿見香はその時まで、俺のそばにいるだろうか。

「阿見香は恐らく無理だろう。とはいえ、俺一人が出席するのも失

礼になる。シャラとダンジズを代理で行かせる。この件の返礼は俺が直接するから、代理が出席する旨を先に先方に伝えておけ」

別館の秘書室では、男女合わせて二十数名の人間が働いている。レティシアを含めて彼らたちの間でも、阿見香の評判は悪くない。

頭脳は馬鹿だがでしゃばらず、気性は明るく、求められた事には努力する。シャラは阿見香を妹のように可愛がり、ダンジズも使用人たちも微笑ましく彼女を見守っている。

無理だろうと答えたことに、勤務中に珍しく、レティシアも気を引かれたのだろう。

僅かに沈黙した後、余計な口出しを控えて次の案件を読み上げた。

「……かしこまりました。続いてアイスランドからの支援要請です」

新学期の始まる今朝、登校前に口頭決裁を終えて部屋に戻れば、制服に着替えてベッドに座り、足をぶらぶらさせたあいつがいた。

ニヤニヤと携帯をいじってる。メールの相手は絶対にあの男。檀聖。

あんなつまらない男の、どこがいいんだか。

昨日も阿見香とは学校のことと言い争っていたから、俺の顔を見るなり、彼女は嫌悪感むき出しでそっぽを向いた。

さっきまでのニヤニヤ笑いはどうした？
毛虫のカタマリでも見た顔しやがって。

その日はお互い無視を決めこみ、帰宅してからもニヤニヤ携帯いじりを目撃した俺は、シヤラに文句を言った。

「阿見香に携帯ばっかりいじらせるな。そんな暇があるならカリキ
コラムを増やせ」

「今だっていっぱいいっぱいよ？ 携帯の息抜きくらいいいじゃないの？」

驚きと非難の声を向けてくる妹を見ないふりで、言葉を続ける。

「俺があいつに言えば角が立つ。君の采配でカリキュラムの増加を決めてくれ」

問答無用で押し付けた俺に、シヤラが瞳をグルリと回し、首をふって吐息を漏らした。

「泣き落としを使うしかないわね……」

性格が悪いのは充分承知しているが、こっちは毎晩ベッドで苦悶に耐えてるんだ。

これくらいの嫌がらせはさせてもらおう。

まったく、毎晩同じベッドに生身のオンナを寝かせて何もしないなんてのは、拷問そのものだ。健康な男にとっては生き地獄でしかない。

苦悶の余り、自分が男に生まれたこと、人間であることさえ罰しなくなる辛さは、女には
取り分け鈍いあいつには、絶対分
かり得ないことだろう。

好きだとか嫌いだとか、愛だとか恋だとかは関係なく、男にとって女が隣りに寝ている、それだけで理性が吹き飛ぶ状況なのに。

自分の中で、あいつが、かけがえのない存在になっていることが、煮え立つ苦しみに更に火をくべている。

業火に煽られ、心が、欲望が、グツグツ沸騰する苦悩に、夜毎さいなまれている。隣りでスヤスヤと眠るあいつの首を絞めて殺してしまえと、何度悪魔の囁きを聞いたことが。

それもこれも、惚れた弱みというやつなのだろう。どうでもよかったらさっさと犯してる。自分を押し殺して我慢なんかするもんか。

手も出せない。自分のもの出来ない。

なのに毎夜、俺の隣りにいる。平和そうな顔で眠り、他の男の名前を寝言で呟いている。

なんでこんな女にひっかかったんだ。

俺の人生は、完全に呪われている。

思い返せば、最初の出会いからして呪われていた。

次の日からあいつのいる学校に行くという時、遠目からでも一度顔を見ておきたいという俺の希望で、イギリスから到着した足で空港から急遽そこへ向かった。

「今は下校途中でハンバーガーショップにいます」と、彼女が見つかってからずっと見張らせている者から連絡を受けて着いた場所は俺やダンジズ、シャラには相当場違いだったのだろう。

外にいても自分たちが目立つだけで中の様子が確認できず、中に踏み入れば客のみならず店員たちも固まっていた。日本人以外の人種がそこまで珍しいのかと思いつながら、店内を見回す。

嗅いだことのない油の匂いと煙草の匂いに混ざり、日頃は滅多に間近に接することのない、一般階層の人間たちが密集する人いきれが充満した狭い空間に五感が慣れずに、眉を顰めた。

中に入れば位置関係でよく見えず遠目どころじゃなくなり、少しでも席に近づいてみようと思えば、こちらを注目して静まり返りつつある店内にテンションの高い少女たちの声が響いている。話に夢中であるその二人だけが、俺たちに気づいていないようだった。

あの髪型と、横顔と、制服には、見覚えがある……………

その向かい側にいる少女の顔も、調査書の写真で一度目にした記憶があった。確か、フヅキという名前じゃなかったか。

「あんたの話、微妙なんだよ。なんか、卑猥っていうの？」

「ヒワイ？」

「ガマンできないだの、バコバコだの、痛いだの。うっ、て叫んでとか、やめれ。並べるとマジエロくさい」

「エロくさい！？ やめてよっ。文月はエロ漫画読みすぎなんだよ」

……………エロくさい？ 何の話をしてるんだ、こいつらは。しかも公衆の面前で。

明日から学校に行くつもりだし、この際だから面が割れてもかまわないだろうと傍に近づきながら、自分たちの世界で騒いでいる二人を見やり俺は更にきつく顔を顰めていた。

「漫画は芸術よ」

「ええ？ あのすぐに脱いじゃうやつちゃうの話が？」

「そういうのばっかじゃないし。……それより」

「でもそういうの、多くない？ この間、文月から借りたレイプものも怖かったよ？ 俺がイカせてやるとか、俺じゃないとイケない体にしてやるとか、犯されても体は正直だとか。ふざけてるよ、レイプはレイプじゃん」

「そうなんだけど。いや、そうじゃなくて。あの話は、男の心の深い闇が、癒されていく繋がりについてさ。そうじゃなくて、後ろ」
「癒されていく繋がり？ なんかやらしー」

友人に促されてようやく振り返った女を見て、すぐにそれが本人だと分かった。

高橋阿見香。

父の三番目の弟で、俺の叔父のジャーメインが、極東のこの国に遺した愛娘。

一族に知られることも、守られることもなく、自分がスマクラグドスの高位にある人間だと知ることもなく、十七年育ってきた娘。

そして、俺の花嫁候補筆頭。

これが。

さっきから、エロだのレイプだのやらしいだの、大声で話しているこの馬鹿女が。

俺の未来の花嫁。

………激しい頭痛がする。

「高橋阿見香って、どっち?」

分かりきっていることを確かめずにいられないほど、俺は茫然としていた。

俺が茫然とするのは、生まれてから記憶にある限り、片手で数えるほどもない。

この状況ではどっちでも大差はないのだが、一際でかい声で騒い

でいたほうが、女として問題がありそうだと頭を抱えたい思いがしていた。

フヅキという少女が無言で彼女を指差すので、絶望に陥りながら、俺はその衝撃を吐露しなければ眩暈と吐き気で気が遠くなりそうだった。吐き気は、この密閉空間に溢れている安っぽい食べ物匂いのせいもあるが。

「こいつ？ さっきからレイプだのイカせてやるだの、犯されても体は正直だの、頭がおかしい発言を大声で繰り返してる、これ？」

明日地球が滅びると知らされたとしても、俺がここまで深刻な絶望感に突き落とされることはないだろう。それは断言できる。

「最悪」

そう吐き出した結果は、更なる最悪を招いていた。

視界がピンクに染まった時、とっさに何が起きたのか把握できなかった。

動きを止めようすれば可能だったはずなのに、それをせずに受け止めたのは、非力な少女相手だと油断していたからだだった。

冷たいものが前髪や頬を濡らし、汚されたサングラスで俺は視界を失ったまま、呆気にとられて立ち尽くしていた。

「この世から男が全部いなくなっても、あんなにかまっぴらゴミンよ」

捨て台詞と共に、荒々しい足音が去っていく。

相当気が強い性格らしく、暴言の応酬で俺に怯まずに食ってかかってきた彼女が、俺に面と向かって暴言を吐く人間すら今までいなかったたので、無礼極まりない彼女にこっちがぶつけた怒りもかたりのものだったのは否定はできないが。

それに歯向かってきた彼女から、どうやらシェイクを浴びせられたらしい。

ストロベリー・バニラの甘ったるい匂いは、俺を宥めるものではなく、シェイクの冷たさも怒りを冷ますものになるわけがなかった。

「……………ミハイル様……………」

こんなに恐る恐る呼びかけてくるダンジズの声を聞くのは、初めてだ。それくらいの判断力はあったが、怒りが爆発する限界地点ギリギリにいる自分では、それくらいを認識するので精一杯だった。

爆発したらどうなる？

それを自分で知りたいとも思った。今まで、爆発などしたことがない、抑えてきた自分から何が飛び出すのか、興味があった。

シヤラが、店員から受け取ってきたハンドタオルで俺の顔を拭くのを手伝う。

「一度、洗面室に行きましょう」
ダンジズが急いで俺を促していく。

顔を洗い、俺とダンジズが洗面室から出た途端に再び静まり返った店を出て車に乗り込んでからも、俺は無言だった。

シヤラもダンジズも、腫れ物に触るがごとく黙っている。不自然なほど。

あの女……

あの女だけは、一生許さない。

常識なしのヒステリー、東洋の子ザルと言えばサルにも失礼な馬鹿女の登場で、花嫁候補筆頭から次席になったヴィクトリアも最悪だが、どっちもどっちだ。

この世から男が全部いなくなっても、あんなにかまっぴらゴミンだど？

それはこっちのセリフだ。

地球から女がいなくなっても、あの女とヴィクトリアだけはご免だ。

薄々勘付いてはいたが、俺に女難の相があるのは決定的だろう。

掟で定められた血族婚をしなければならず自由な恋愛は出来ないも同然の上、物心がついた時から気忙しい日々を過ごして、異性に関心を持つ余裕もなかった。

子供時代からの気晴らしは、乗馬とピアノだった。

限られた自由時間に、音楽室でピアノを弾いている時と馬に接している時だけが、安らげるひとときだった。クイーンパレスの敷地、ブルーレース・フォレストにあるエデンと呼ばれる温室が改築されてからは、そこで過ごすことも息抜きになっている。

その限られた自由のピアノも、大人たちに「ここで弾け、あそこで弾け」とパーティに引つ張り出されると新たなストレスの種になり、大学が夏休みになってパレスで過ごしていた十歳のある日、俺は両親にぶちまけた。

「俺は大人の操り人形になるために生まれたんですか？ 勉強はするし、やれと言われたことはやります。けれど、ピアノは二度と人

前で弾きたくありません」

両親は何も言わなかったが、以降、「ピアノを」と誰からも強要されることはなくなった。

十三で訪れた初恋で、恋人になった彼女からねだられても、ピアノは絶対に弾かなかった。頑なに嫌がったのは、俺が精神的にまだ子供だったせいもあると思う。

思い出すと、胸がえぐられそうになる恋。

双子の兄妹だと知らずに巡り会い、俺とシヤラは恋に落ちた。

実の兄妹だと判り、想いが無残に断ち切られてからの苦しみは、数年経った今も簡単には言い表せない。

シヤラとの別れの後、十六から十八まではアメリカに留学し大学院に通っていた。

その時期は、嫡男として積み積もってきた鬱憤と、運命を罵倒する烈しい苛立ち、ぶつけるところのない怒りと空虚な孤独感で、ノ

イローゼになりかけていた。

阿見香と出会う少し前までは、睡眠薬がないと夜は眠ることもできなかった。

昼間は多忙で夜は強い薬漬け、精神が休まる暇がなく、慢性的な頭痛にも苛まれるようになる。

気晴らしに女性を相手にしても、一瞬で過ぎ去る快樂は、慰めにもならなかった。

慣れない人間の人肌を疎ましく思いながら、正論のない暗闇に自分を落とし込むことで、何も見えず、何も聞こえない、光も理想も遮断された世界で、俺の心はようやく静寂に浸ることができた。

落ちていくだけの暗い道でも、何も感じず、何も思わず、闇に引きずられるまま沈んでいく心に、安寧を見出した日々。

救いがなくてもよかった。
眩しい光など、煩わしいものでしかない。

眩しい煌きを見れば、触れることのない金の髪を思い出すから。

向日葵色の、風にふわりと揺れる軽やかな髪に頬をうずめた記憶ごと、叶わぬ想いが引きずり出されてしまっ。

眩しい笑顔を見れば、抱きしめて、すぐそばで優しい瞳を見つめることができない苦しみを、味わわなければならなくなる。

光の中で、どうにもならない孤独を無様に晒し続けるよりは、何も見えない闇に自分を放ったほうがいいと思っていた。

その世界ならば、恋した彼女を見なくてもいい。

何も見たくない。何も知りたくない。そう願っていた。

一夜の相手は、誰でもよかった。

一般的にはつまみ食いと言っらしいが、「うちの娘を傷モノにした責任を取れ！」と敬虔なカトリック教徒の親に大学まで怒鳴り込まれた時には、さすがにまいった。

彼女の名誉のために、「すでに娘さんは傷モノでしたよ」と、言い負かすのを控えてやったのに、俺が折れるのを親の隣りで泣きながら待つていた年上女の根性が腹に据えかねて、退学に追い込んだこともある。

女が所属する研究室の教授に、「彼女は頭が悪い」と一言呟いただけで、鵜呑みにした世間知らずの単純な教授が女を蔑ろにし、我慢が続かなかった本人が修士課程の途中で出て行っただけなのだが。

俺を嵌めようとした根性からして頭が悪いんだから、嘘は言っていない。二十四の女が両親を駆り出して、十七の男に婚約を迫るのも常軌を逸してる。

以降、遊び相手は一族の女、中枢以外の者限定にすると学習した。嫌な言い方だが、傍系でも末端でも勝手知る一族の人間ならば、誰も俺に苦情は言えない。

けれど、「恋人にもなれない関係」だと伝えているのにも関わらず、「自分こそは特別になれる」と意気込む女、勘違いするうぬぼれ屋が多かった。世間一般の女に限らず、血族婚の掟を承知しているはずの一族の女でさえも。

加えて、一度寝ただけで結婚への切符が手に入ったと思ひ込める貪欲さにもうんざりさせられた。

愛人でもいいなど言い出された日には、二度と口を利かない人物リストに問答無用で追加した。他人に見られないよう、俺の脳内にあるリストだ。

こつちも身勝手な男だが、相手も身勝手な女たちだ。罪悪感など微塵もなかった。

大学院を修了してイギリスに戻った頃、「この身を捧げたのだからせめて愛人にしてくれ」と、嘆願書が数名の女たちから長老会に出されたのをきっかけに、長老会から叱責されるまでもなく「女はこりごりだ」と学び、ストレスの捌け口を女に求めることを終わりにした。

誰かを利用して自分を傷つける行為にも、疲れきっていたのだと思っ。

ミカエルの憂鬱 2

未来も花嫁もどうでもいい。

課せられている義務だけを果たして生きていけばいい。そう諦めていた。

十九の誕生日を迎えれば、花嫁候補筆頭が正式に決まり、婚約が整うのだ。

筆頭候補は、よりによって、あのヴィクトリア。

黒魔術を使つてるとか悪霊との交霊術が趣味だとか、一族内でも散々に噂され、そう批判されてもしょうがない独特の風貌をしている。

美醜を問われれば、容姿の判断に興味がない俺でも、「美人とは言える」と返せる美貌の持ち主だが、如何せん存在の全てが気味が悪い。ひと目見ただけで、誰もがその眼差から目をそらしたくなる、異様な目つきをしていた。

暗闇でも、フクロウの様にピカリと光るのでは思わせるライム色の瞳。一度射程距離に捕えられたら逃れられず、血の一滴まで吸い尽くされるのでは、と、見る者に悪寒を覚えさせる存在感は見事と言ってもいい。他人事ならば。

魔女狩りが現代に復活すれば、喜んで差し出したい。差し出さなくても真っ先に連行され火あぶりにされそうなあれが、自分の花候

補筆頭とは。

俺の人生は、呪われている。

怪しげな噂だけじゃない。

四、五年前には、当時居た寄宿学校の後輩に、目立たない針拷問、濃いベージュのマニキュアを塗らせた足の爪と指の境目に、針を刺して苦痛を与えていた事が発覚し、長老会からも嚴重注意を受けていた。

報告によれば、十歳に満たない頃からそうした拷問を趣味としていて、口止めまでして脅していたというのだから、恐ろしい気性だ。

注意を受けたその後は表向きは品行方正を守り、成績も優秀だったため花嫁資格は剥奪されずに存続されたが、「いくら血が第一とはいえそんな女を総帥の妻にしているのか」と理解に苦しむ。逆らう人間は問答無用で拷問して、恐怖心だけで一族を束ねかねない。

長老会にも、ヴィクトリアの縁故で何かと言えば彼女を花嫁にしようとは画策する人間からごり押しがあり、それはヴィクトリアの事に限った難題ではないが、父親も時折頭を悩ませていた。

「ミカエル様」

鈴を転がしたような声に呼び止められ、ヴィクトリアを横目で見やった。

パリ大学に行っているはずなのに今時期にクイーンパレスにいるということは、俺の誕生日と正式な婚約に合わせて、意気揚々と舞い戻ってきたのだろう。

食事の時以外は出来るだけ顔を合わさないよう配慮していたのに、廊下で掴まってしまい、内心で舌打ちする。

「もう少しでお誕生日ですわね。私からも、とっておきのプレゼントを考えておりますの。お楽しみになさっていて」

綺麗な声といえるのに聞くたびに虫唾が走るのは、俺の偏見、偏聴だろうか。媚びて甘えてくるイントネーションが、嫌悪感を強くする。

「必要なものは揃ってます。何もいりません」

素っ気無く答えれば、「ふふふっ」と、吐息を鼻に絡めた微笑を浮かべて、紅い唇を妖艶に広げている。

………とっておきだった？ 知りたくもない。

「相変わらず、冷たいお方。でも、誰に対してもそうなのが、あなたのお優しさでもあるのよね。私は良く存じてますわ」

良く知ってる？ 勘違いも甚だしい。

何かくれるというなら、一族を離籍する請願書でも寄越せよと言いたい。

この目狐女とベッドを共にするくらいなら、アティアナがブレイズ相手のほうが、まだ自分を許せる気がする。

どうしても結婚するとなれば、子孫を残すのは体外受精でもいい。それで充分義務は果たせるはずだ。

過去に遊びすぎて勃起機能障害になったとか、何とか理由をつけて、寝室を別にする策も講じなければならぬ。ふしだらな経験も、いざという時は役に立つものだ。

「話はそれだけですか。忙しいのでこれで失礼」

踵を返すと、ヴィクトリアの手が俺の肘に置かれた。勝手に触るなど睨みつけたいのを堪えて、さり気なく身をかわし向き直る。

「まだ何か？」

「いつまで、花嫁の私に、つれなくするおつもり？ 私の御主人様」

口角を持ち上げて不敵に笑い、ギラつく眼差だけは常に冷やかな従妹を、俺も冷やかな眼差で見つめ返す。結婚しても絶対に、この女は抱かない。俺にも触れさせないと、心で決定を下しながら。

「まだあなたが花嫁になるとは決まっていますよ。ハロルドの娘、ヴィクトリア」

ハロルドとは、オースティン・ハロルド・ケイパー・スマクラグドス。

ヴィクトリアの父で、オースティンと呼ばれるのを嫌い、ミドルネームのハロルドを常用していた。一族を破門された今は、彼はスマクラグドスの姓は名乗れない。

大罪を犯し、総帥の恩赦で処刑にはされずに一族を追い出された彼女の父の名をあえて冠することで、「血族婚の順位がどうある」と、俺から見ればあなたは永遠に罪人の娘。花嫁となってもそれは変わらない」言外にそう告げた。

残酷かもしれないが、それぐらい突き放さないと我慢がならない。俺個人の僅かな権利、意思表示をするくらい、許されてもいいはずだ。

この家に生まれた定めとして、彼女を妻にしなければならぬのなら。

見開かれた彼女の瞳を一瞥して、俺はその場を後にした。

再来週の誕生日に婚約が整っても、形式以上のものを彼女に与えるつもりはないし、婚姻後に女主人として行使できる権利も制限しなければと思い決める。

でないと、ああいう眼差の持ち主は、立場を利用して傍若無人に何をしてくすか分からない。気に入らない侍女の首をはねて、その辺に吊るされてもしたらシャレにならない。

次期総帥の花嫁は、現総帥の兄弟の娘が第一の候補となる。兄弟に娘がいなければ姉妹の娘が候補となるように、まずは男の血筋が優先される。

第一候補の中の順位は、次男の長女から優先され、次男に娘がいなければ三男の娘へと権利は移動する。

父は五人兄弟の長男で、次男と三男に娘はいない。次男のキーラの息子がダンジズで、妹にシヤラがいるが、シヤラは俺の両親の実子であり、次男の元へ養子に出されていた。

四男のジャーメイン、父から見て三番目の弟は、日本で行方不明になっている。

五男のオースティン・ハロルドは、父の四番目の弟で、彼の一人娘がヴィクトリアだ。

ハロルドは、生まれて間もない娘と新妻を一族に残し、全財産を没収されて姓も奪われ、身一つで一族から締め出されている。

彼の抱えている怨恨は、凄まじいものだろう。誰もが予測できる怨嗟の復讐を見越しながら、父がなぜハロルドを野放しにしたのか理解できなかった。

いつだったか、父の真意を問い質したことがある。

「チャンスを与えただけだ」と、父は答えた。

「癌細胞はすべての肉体に宿る。健康な体にもだ。おまえも医学を学んでいるなら解るだろう。撲滅することはできない。共存が必要だ。ハロルドは一族の癌、世界の癌だが、彼自身の力でどこまで成長するのか興味がある」

「一族のためにならなくても？」

「なるだろう。戦う相手がいてこそ体制は強くなり結束は増す。戦う相手を早々に潰してしまえば、力を持ちすぎた組織のエゴは肥大する。そうなれば自ら呆気なく自滅するだけだ」

「戦う相手は今だっていくらでもいるでしょう」

「そうでもない。張り合いがないと思うこともある」

そう言って微笑する父は、時折、自分の親とは思えないほど気品に満ち、神々しく見える時があった。

腰より長い真っ直ぐなライトブロンドにエメラルドの眼差、年齢

不詳と言われる若々しい容姿、静謐を湛えた穏健な物腰。ただそこに端座しているだけで神気を漂わせているとも囁かれ、目前にして平伏さない者はいないとも称されていた。

バチカンのローマ法王が、身震いして最敬礼し、「言葉を尽くしても礼讃しきれない」と呟いたという逸話もある。

それは大袈裟に膨らんだ話だろうと俺は思っているが。

温厚な様相の奥に好戦的な一面もあり、そして妻にはベタベタに甘い夫でもある。

子供は抱かない癖に 俺は父に抱かれた記憶がなく、弟もそれは同じなのだが、妻だけは見るたびに膝に抱きかかえていた。

俺が十歳を過ぎてからは、それまでだって少なかつた親に会う頻度が年に二度か三度になり、妻を膝に乗せている姿を目撃するのは難しくなったが、息子がそろそろ二十歳を迎える今になっても、あの夫婦はあのままだろう。

ヴィクトリアと結婚。

覚悟を決めていたとはいえ、シャレにならない現実に気が滅入っていた矢先のことだった。

誕生日直前に、行方不明になっていた叔父、ジャーメインの娘がいることが判明した。

神は俺を見捨てなかったか。

生まれて初めてそう思ったが、その後の調査報告書を読んでどうしたものかと頭を抱えた。

見た目は別に問わない。

性格や嗜好、行動にも取り立てて異常性はなさそうだ。

小学・中学・高校の内申書にも、特筆されている問題はなかった。それらの点は、ヴィクトリアより数段マシと言える。

が、今まで接したことのないタイプの人間、ごく一般的な人間であることに不安を禁じえない。

彼女の学校の指導教員たちが記していた内申書には、それぞれ表現は違っても一様にこう書かれていた。

<非常に我慢強い。好き嫌いを表に出さず真面目で思いやりがある。目立った行動を好まず控えめだが、意志強く集団行動の迎合を苦手とする。>

問題なく学校生活に従うが存在感を含めて個性がある。また興味の無い事象に極めて無関心な性格のため孤立した状況に置かれやすい。周囲から干渉がないほうが気楽な様子である。

気の強さもあり集団から嫌がらせを受ける傾向があり、母子家庭で育った影響か自立心旺盛で忍耐力が強く、困難を乗り越える精神力は優れている。出席日数も優良。>

「……………」

詳細に書かれてはいるが、どういう女なのかピンとこない。

制服を着た顔写真を、「これが自分の未来の花嫁になったら」、と眺めて見ても、何の感慨も沸かなかつた。

虹彩が黒いもの、緑に写ったものがあり、一族の中でも珍重されてきたThe Sun and Night Queenの瞳の持ち主だとは分かったが、それ以外は何から何まで興味がない。

いきなり現れて、いきなり花嫁として見ると言われても無茶な話だ。

ごく普通の女。どこかですれ違っても、記憶にも留まらず通り過ぎていく程度の。

報告書を引き出しに仕舞い、一度見ただけのそれを再び広げることとはなかった。

ただ一つ、「ヴィクトリアよりましだろう」感想はそれだけだった。

前代未聞の珍事に、中枢も長老会も揉めに揉めた。

「とにかく一刻も早く保護しろ」の推進派と、「はっきりした事が

判明しないうちに妙な人間を取り込んで困る」との慎重派、「正しい血筋だとしても、十七年も一般人で生活してきた者を花嫁にするのは問題がある」という頑固な保守派で対立した。

鶴の一声で事態を収拾できる身でありながら、父親は介入しなかった。彼女に気づかれずに護衛を付けるよう指示しただけで、事の経過を観察していた。

それは阿見香を家に迎えた今も変わらない。

息子の俺にも本心や手の内は明かさない人だから、何を考えているかは分からないが、恐らくヴィクトリア周辺の人間たちを刺激しないよう懸念して中立を保っているのだろう。

当事者の俺が「彼女に会う」と決断しているにも関わらず、慎重派と保守派は首を縦に振らなかった。

日本の学校では四月に健康診断があるとの情報を得て、本人に知られることなくそれが利用できるとの話が出てから、「その結果次第で」とようやく意見の一致をみたのだ。

間も無く彼女の高校で行われた健康診断で、採血された血液を学校側から入手し血縁関係を調べたところ、確かに叔父の娘で俺とは従兄妹関係になることが判明した。

その血液検査も一度目は血液の取替えが起り、「血縁ではない」との最初の診断に、「報告書で確認したこれまでの健康診断のカルテと血液のタイプが違う」と真つ先にダンジズが気づいた。

「保管ミスにより」ともう一度彼女から採血した後で、二度目は血液が盗まれる事件が発生。

三度目は、「貧血が疑われる」と偽って採血し、それをどうにか検査に回せて「血縁の可能性99%」の最終結果が出る頃には五月になっていた。

明らかに妨害をしている者達がいて、しかも内部情報が筒抜けになっている。花嫁のことより、内部調査を行い人物関係を総洗いするほうに忙しくなり、総帥の権限で長老会も解散、新たな人選で百二十人が選ばれた。

再選は九十人で、三十人が降格され、そのうち二人が一族から破門された。

執拗なヴィクトリア擁護派の人間で、証拠は拳がらなかったが、ヴィクトリアの父のハロルドと連携している事が発覚したためだ。

ハロルドが、現在はスマクラグドスと敵対する秘密結社、いわゆる超能力を操り、この一族を解体しようと狙う集団の組織の幹部を務めている事情を把握してはいたが、手を尽くして中枢や長老会の一部の人間に接触している問題が浮き彫りになり、体制強化に父も俺もダンジズも尽力した。

ハロルドとは面識がないが、非常にカリスマ性があり人を操る才があり、また攻撃的な超能力の使い手であるとも知られている。

「生まれた順番で運命が定められているとは、おかしな話だ」とは、

彼の口癖であつたらしい。

総帥の任に就けるのは、兄弟であれば嫡男と決められている。

どんなに優秀な人間であっても、嫡男が譲らなければ、二番目三番目が総帥に立つ事は有り得ない。

ハロルドは自分が五番目に生まれた運命を憎悪し、「自分は総帥を補佐する人間ではない」と、兄たちを抹殺しようとして画策した果てに、父の三番目の弟ジャーメインの命を追い詰めてしまった。

五人兄弟の中で突出した知力を持ち、サイキックまで自在に使えるならば、補佐の身分に甘んじるのは彼にとって痛恨の極みであり、自尊心が許さなかつたのだらう。

六月に入り、阿見香を迎え入れる方向で長老会の意見が終決した。

その後、阿見香に事情が伝わってから、長老会からの慎重論で二度血液検査をしたが、血縁である事実を疑うほうが無理がある結果だった。

「このタイプの、幼いうちから自我が成人並みに確立されてきた女

性は、無理強いして今の生活から引き離すと後々が大変かもしれないよ」

そう進言してきたのはダンジズだった。彼は俺の側近を務める仕事柄、人物や物事を詳細に分析するのに長けている。

「報告書では、かなり母親思いでもあるようですから」

「かといって、捕獲しないわけにはいかないだろ」

「ご本人を前にして、捕獲とは仰いませんように。隔離ならまだしも、珍獣じゃないんですから」

「捕獲も隔離も、この際似たようなものだ。花嫁として安全を守るために、檻に入れるようなものだからな」

皮肉る俺を無視して、ダンジズがさらりと対策を提案してくる。

「学校に潜入して、しばらく周辺警護するのはいかがでしょう。すぐに人選致します」

「他人任せにしておくのは気が進まない。どうにかして身柄を確保しなければ落ち着かない。あの薄気味の悪い目狐のヴィクトリアを娶るくらいなら、東洋の小ザルだろうと出来損ないのチンパンジーだろうとかまわない」

身柄の確保だのと、人間の花嫁の話をしているとは思えない口の悪さだが、その時点での俺が、彼女に対してそれ以上の感情を抱くのは至難の業だと言っても過言ではなかった。

こちらの自虐的な物言いに反応を示さず、ダンジズが話を続ける。

「他の人間では気が進まないのでしたら、私が赴いても宜しいでしょうか。様子を見ながら、それとなく本人に話を伝え、説得してまいります」

「おまえが行くって？」

「こう申してはなんですが、SPにお任せしたくないのであれば、私が一番適任かと思われます」

ダンジズなら武術の腕前は一流、見えないサイキック攻撃からの防御は勿論、温厚に相手を懐柔する意味でも最適なのは違いない。

「どう見ても、十七の高校生には見えないだろ」

ダンジズを眺めると、

「それは致し方ありませんが」

苦笑している。

「俺が行ってもいい」

「ミハイル様ですか？」

驚きに混じる、あなたも高校生には見えませんよと言いたげな様子を受け流す。

「ダンジズが行くのも俺が行くのも、変わらない。なら俺が行く。自分の花嫁候補を、自分で守れないでどうする」

「ですが」

「それに俺とのことはどうあれ、身を挺して守ってやらなきゃならないとも思う。存在が見つからなかったとはいえ、十七年間、放っておかれていた娘だ。自分 は一族に守られて育ってきたが、彼女は何の恩恵もなく育ってきた。全力で守らなければ、娘や一族を案じて亡くなられたらどう叔父上にも申し訳が立たない」

溜息をついて言い、それに、と、憂鬱な事を思い浮かべる。

花嫁の条件は、処女であることが望ましい。

俺はそんなものはどうでもいいと思うのだが、長老会の中でも保守派が「花嫁は処女でなければ認められない」と頑なに過去の決まりを崩さない。

徹底して調査させた報告書を見れば、男付き合いが無い寂しい青春を生きてきたのは確からしい。

彼女の親友やその周辺へと漏れ伝わっている話を聞き込んだプロの調査員も、「純潔であるのは間違いないと思われます」と報告してきていた。

その点が「身辺清潔で花嫁資格あり」と長老たちに納得されているのも、「自由な身でいた年頃の女なのに、恋人の一人もいないのは微妙じゃないか？」と思えるところだが、生娘かどうか、こればかりは本人に確かめなければ真実は分からないだろう。

確かめるためにも、俺が接近する必要がある。

処女じゃないと分かれば、花嫁権利はさつさとなかったことにされるだろうが、俺が「処女だった」と言い張り本人にも口止めをすれば、どうにかなりそうな気もする。一族の中枢や長老たちの前でそれを正銘するわけではないのだから。

どっちだつて俺はかまわない。あの目狐女から逃げられるなら、この際本気で動物園のチンパンジーと結婚するのも厭わなくらいの、自暴自棄な心境でもあった。

ミカエルの憂鬱 2 (後書き)

メールの返信が遅れています。
すみません。(一一)

学校へ通うようになって数日。

自分で行くと言いながら、「なんで俺がこんな所に」と、後悔と苦痛に苛まれていた。

九歳まで一族のカリキュラムを受け、個人指導で学んできた自分だから、集団で学習する場は大学と大学院しか知らなかった。

無機質で面白みの欠片もない空間に、同じ服を着た人間がぞろぞろといて、退屈な授業とやらを受ける。

俺自身は携帯を持ち込んで仕事をすることを学校に許可させてるが、眺めているだけでもこのカリキュラムのつまらなさは異常だ。自分も勉強は義務でこなしてきたけれど、こんなつまらない内容で何年も何年も学習させられていたら、気が狂っていたと思う。

よくまあ、誰も彼も黙ってやってるもんだ。

日本人は世界の中でも忍耐強い人種といわれるが、当然だ。学力を鍛えるというより、忍耐力ばかりを試されている苦行の場じゃないか。

席替えがあり、俺の要望を汲んだ担任が、隣りの席にあの女を座らせる。

うんざりした顔で机ごと隣りに移動してきたあいつのことは、なるべく見ないようにしていた。シェイクをぶっかけられてからとい

うもの、ちらりと見るだけでも腹立たしくて仕方がない。

なんでこんな奴のために、俺がこんな所にいなきゃならないんだ。

守り？ 護衛？ ふざけるな。

日本に来る前、ダンジズに、自分から行くと言ったことを心底悔やまずにはいられない。

義務。責任。

それらの抑圧で自分を押し殺して納得させ、俺は心の中で溜息をついた。

さっさと捕獲してこっちの家に放り込んでおけば話は早いのだが、後々の面倒を考えると、相手の生活環境や心情も考慮してやらなきゃならない。

母娘を引き離せば、もう二度と一緒に暮らせないのだ。

叔父の正式な妻ではなく、一族の人間でもない母親を、スマクラグドスの家には迎え入れられない。客としてたまに来る分にはいいが、赤の他人同然の付き合いしか今後は許されなくなる。

………気が重い。二人だけで力を合わせて生きてきただろう、仲の良い母娘を別れさせるのは。

時間の許す限り二人でいさせてやりたいとも思いながら、なんで俺が、こんな奴にそこまで配慮してやらなきゃならないんだと不満も絶えない。

まったく、イライラする。

学生としての対面上、テストだけは受けると学校側と約束をしていたので、携帯を置いて、回されてきた答案に取り組み。数学の抜き打ちテストだった。

考えなくても解るそれにペンを走らせ二、三分で答案を埋めると、再び携帯を手に、ひっきりなしに送信されてくる案件に手短に返信する。

答案用紙を隣りと取り替えるとの指示で、変わったことをするもんだなと面白く思い、あいつの席に答案を滑らせた。

嫌そうに自分の答案を渡してきたあの女の解答を見て、一瞬、呼吸が止まる。

自分の視力がおかしくなったかと、両目を見開いた後でまばたきを繰り返すこと数回。

……なんだ、これは。

俺への当てつけか？

と思ったが、答案を隣りと取り替えると教師が指示したのは、テストが終了してからだ。

……。

どうやったらかこうなる？ 公式はどうした？

それともこれは、気晴らしに数字で落書きをしてるのか？

よくよく眺めれば、懸命に解答を試みた形跡が見て取れたので、俺はだんだん眩暈を覚えた。椅子に座っていて眩暈なんか、重症だ。

……油断した。報告書に添付されていた成績表までは、じっくり

見なかった。中枢の血を引く人間で知能に問題のある者は、今まで聞いたこともなかったせいで。

前もって知っていれば、ここまでの衝撃は受けなかったはずだ。

正気でこれをやってるなら、今までこいつは、学校で何を勉強してきたんだ？

愕然と

俺がそうなるなんて滅多にないが、愕然と彼女のほうを見れば、向こうも俺とは違う意味で愕然とした顔をして、俺を見ていた。「あんた、何者？」そう言いたげな目つきで。

今この学校の授業で行われている理系の内容は、七歳の時にはクリアしてきた自分だ。

それが当然とは考えていない。世間一般とは著しくかけ離れているのも理解はしている。

相応の教育を押し付けられてこなしてきた人間なら、ある程度は出来ることだろうから、自分が天才だとは思わないし、特別優秀に生まれついたとも思わない。

けれど………これは、ひどすぎるだろ。いくらなんでも。

「何の病気だ？」

「はい？」

尻上がりには訊き返され、皮肉と本気の混じった暴言を放る。

「どんな異常が起これば、そこまでバカになれるんだ」

相当カチンときたのだろう、アルミ製のペンケースに持っていた赤ペンを投げ入れ、ケースごと持ち上げ机に叩きつける勢いで蓋をしている。

静かな教室内にガシャンツと響いた物音で、クラス中が後ろを振り返り、右隣の檀とかいう男も何事かと彼女を眺めていたが、彼女は何も目に入っていないようだった。

怒ると態度に出やすいが、イラつくと周りの様子や漂う空気もおかまいなしの無頓着、怒気だけが頭を占める性質なのだろう。

……………グランマに似ていると言われれば、そうとも言える。大抵は冷静沈着の寡黙な人だが、たまにヒステリーを起こすと手がつけられない、激情型の性格をしている祖母に。

シェイク事件についても、ダンジズやシャラは口を揃えて「彼女

の性格は間違いないくグランマの血を受け継いでいる」と感嘆していたほどだ。

血筋の証拠、血は争えないということが。そんなところ、似なくていいのに。

祖母ほどヒステリーがひどくないことを祈りたい。

彼女の親友の興田文月だけが、後ろを見ながら楽しげな笑みを浮かべている。親友の怒りを笑いのタネにして楽しむ、いいのが悪いのかよく分からないコンビだ。

俺が注視しても、動じない顔で素知らぬふりをするあたり、彼女と長年の付き合いのある人間らしいと納得はできるが。

もう一度隣りを窺えば、怒り冷め遣らぬ沈黙で彼女は前を見据えていた。

その横顔に、目を奪われる。

女の怒りほど厄介なものはないと思っていたが、この女は……怒ると綺麗だ。

張りつめた無言の緊張が、同じ歳のクラスメイトより大人びた顔立ちを引き立たせ、凜とした気配を放っている。

窓から射す太陽の光で黒から緑へと虹彩が変わる眼差が、鋭い怒りの表情に神秘性を加え、子供だと思っていた少女を、瞬きの合間に違う存在にしていた。

思わぬ変化を目の当たりにして、戸惑いながら目を見張る。

なんなんだ？ この女は。

男の狩りの本能を、疼かせる女。

つまらない女。報告書を見た時には、そう思っていた。

出会った日は、「冗談じゃない！」と怒り心頭に達し、目の前に核爆弾を飛ばすスイッチがあつたら押ししていたかもしれないと思えるほどムカついていた。

なのに、こうして今、綺麗だと思いながら。不覚にも、彼女の横顔から目が離せない自分がある。……………信じられないことに。

隣の男が彼女に何か話しかけ、阿見香はそれに不機嫌なままで答えていた。

授業が終了すると彼女はケロリとした顔をして、親友のいる席へと移動していく。瞬間的に怒りが沸騰しても、長続きはしないタイプらしい。

グランマよりは扱いやすいか。

「ミカエルさまあ。物憂いお顔をなさって、どうしたのお？」

キンキン声のうるさい連中が集まってきたので、頬杖をついて上目遣いにちらりと眺め回す。

「日本の女の子たちは賑やかだね」

意味ありげな視線で当たり障りのないことを言うだけで、彼女たちはますます賑やかになり、なぜか機嫌も更に良くなる。

こっちは九割方嫌味で伝えても、悟られていない。

聞きたいことしか聞かない、自分の都合の良いようにしか解釈しないのは、万国共通の女の資質といえるらしい。

自分の花嫁候補筆頭が、その典型中の典型、話のまるで通じない人間だとは、この時の俺はまだ知らずにいた。

自分の中に、埋まらない空洞があると気づき始めたのは、いつからだったか。

様々な教育を受け始めて間も無い頃には、疑問が芽生えていた気がする。

阿見香と出会ってから、その空洞が、少しずつ変化し始めていた。

知識が増え知力が向上するほど重圧は増して、精神も体も幼いま
まの気持ちがついていけなかった子供時代。

自分が何をしているのか、どこへ行くのか見えないまま、勉強を
すればそれも分かるようになるのだと思い、学習する事に歯向かい
はしなかった。

四歳かそれくらいでは、強い感情があっても漠然としすぎていて、
何をどう言い表していいか分からず、俺は常に不機嫌な子供だった
と思う。

「あなた様は、世界に散らばる一千万人の一族を統率するお方。そ
れは、ご自身のお力で世界を守り導くということでもあります」

ずっと、そう言い聞かされて育ってきた。

幼い時は、難解な理屈は分からなかったが、非常な重責であるこ
と、それだけはひしひしと感じていたから、与えられるカリキュラ
ムは必死でこなしてきた。

弟のエリジャが生まれてからも、母親譲りの虚弱体質な彼に負担はかけられない、嫡男として自分で家のことを負わなければならぬいと呑み込んで、努力してきた。

総帥の男児は、五歳と八歳の時に、儀式を受けるのが仕来りになっている。

スマクラグドス島にある神殿に籠り、九日に渡って禊を行うのだ。

神殿は二千年前に建てられた石造りの大きなものだが、海からの風雨による昔年の浸食もあり、中世期には神殿を覆い保護するための建物ができ、その後何度か増改築を繰り返して今に至る。

そのため内部は、外神殿と内神殿に分けられ、内神殿が最も古い聖なる場所として扱われる。

内神殿の火を祭る聖殿の奥には秘石の宮があり、その宮まで入れるのは神殿の総監督者、火司長とも呼ばれる聖尊火司、総帥とその妻、次期総帥と定められた子供のみに限られていた。

秘石の宮には、エメラルド貴石が三石、保管されている。

西暦二十九年に生まれ、一族の基盤を創ったと言われるラマイエ、エヴァ、エリニヨの三人が、誕生時に母親の胎内から握って生まれてきたと伝わるもので、次期総帥、或いは総帥の結婚式の時のみ、火を祭る聖殿にて公開されてきた。

近年の成分解析によれば、エメラルドではあっても、地球上にはない元素が含まれていると判明し、一族内でも謎の力を持つ石として、畏怖と枢要の念を込めて厳重に扱われている。

神殿を管理する一名の聖尊火司と、十名の聖準火司は世襲制であり、三十歳で神殿に上がれば生涯そこを出ることはない。

その役の名の通り、上古から二千年に渡り燃え盛る神火を守り、神に祈り捧げるのが彼らの生活である。

教理や経典を持たず、信仰を一族内外に強いる教義はないので、宗教としては括られていない。

神殿を守り、神火を守り、秘石を守り、神に祈りを捧げる祭祀を行う。

総帥とその息子、聖尊火司たちに課せられた役割というだけで、組織をその行為で支配することはないが、神聖なるものと敬われ、一族を纏める絶大な吸引力となっているのは否めない。

神への祈りも、人間の価値観で神を名付けて呼ばない決まりがここにはある。

宗教を持つ自由は誰にでも容認しているので、「各々に、好きな信仰を持ち、好きな名で神を呼べばいい」という考えが、あえて言えば唯一の教義と言えるかもしれない。

神の名を限定すれば争いは絶えず起こるものだと、受容と自由を精神基盤に二十世紀以上栄えてきたスマクラグドス一族は、世界でも異質な民族と認識され、恐れの日でも見られてきた。

恐れは多分、総帥を含めた一族が「変わった血を持つ」と囁かれている事にも起因しているのだろう。

総帥から生まれた子供は、大抵は異質な血を濃く受け継いでいるが、男児だけがその血を使いこなすための儀式を受ける。

その中でも次期総帥と定められた子供は、長年、総帥の父と同じ祭祀を行うことにより、祈りの訓練の中で集中する力が増すため、受け継いだ血が研ぎ澄まされ強化されていく。

男児だけが受ける儀式とは、いま思い出すだけでもうんざりさせられるが、五歳と八歳の年の春分の日以内神殿の石室に籠り、真つ暗な中でただ一人過ごすのである。しかも素っ裸でだ。

食事は聖尊火司が運んでくるのを手探りで食べるが、口を利くことは許されない。

儀式の為に溜められた雨水と、同様に儀式の為に飼育された羊の乳、神木として育てられているオリーブの聖油で、聖尊火司が毎日体を清めてくる。その時も口を利けず、羊の乳とオリーブ油の匂いだけが充満する中で体を磨かれる。

自分の名の音から創られた聖音を唱えることだけが、声に出すのを許されていた。

暗闇の中で一日、それを唱えてすごし、その後体が清められると、

聖尊火司に導かれて次の石室へ移動する。その時も灯りは何も無い。これを九日間繰り返し返した後で、ようやく儀式は修了する。

何も見えない中はずっとしていると、人間の精神状態はおかしくなりかける。子供じゃなくても発狂するだろう儀式を通じて、精神力がとことん試されるのだ。

泣き叫んだり、精神に異常をきたしそうだと聖尊火司が判断すれば、儀式はそこで終わり、総帥になる権利も持てなくなる。

絶叫する寸前になる恐怖と震えが一日目に訪れ、それを乗り越えると、後は静寂の世界に佇むだけだった。

何も無い宇宙のなかに、自分だけがいる。そのうち、自分が本当にいるのかどうかも、怪しくなってくる。

何も見えないはずなのに、星や星雲の散らばる宇宙が周囲に広がり、どこまでも無限に続いているような幻覚が始まり、肉体を超えてただそこに在るだけの自分を感じるようになると、頭の奥に閃光が走り出す。太陽よりも眩しい光が体内でスパークして、意識を失うのだ。

それが訪れた後は再び暗闇に戻るのだが、以降は儀式の間、恐怖を微塵も感じなくなり平穩に浸っていく、不思議な体験だった。

脳科学的に言えば、限界状態を強いられて松果体を含めた分泌器官が異常をきたしたのだらうと今になると思う。

病気や怪我を治癒する能力や、目に見えない攻撃に対して無意識に防御が働くのも、生来の血の力をこの妙な儀式で目覚めさせ解放させたせいではないかと考えられなくもない。

心身を浄める禊と言いながら、儀式の目的はそれなのだらう、と。

故に、俺は心中密かに、「馬鹿になる儀式」と呼んでいる。古からの伝統を罵倒するものなので、誰にも言えないことだが。

八歳でもう一度その儀式を受けたときには、泣き喚いて途中で終わらせてやろうと本気で思っていた。

総帥になんかなりたくない。まっぴらだ。

そう思っていたのに、結局最後まで儀式を終えてしまった自分が憂鬱だった。

四歳下の弟がもう少し丈夫で元気だったら、間違いなく途中で棄権していた。

その弟も二度の儀式を無事に済ませ、十年経ってみれば、殺すのにも苦勞しそうな健康体になりやがって、意気揚々とアメリカでの暮らしを満喫している。

俺の、兄としての思いやりはいつたい何だったんだと、未だに憎らしいことこの上ない。

五歳のある日、楔の儀式を終えて数日後、聖尊火司　火司長に俺は言った。

「どうして、こんな儀式や、祭祀を、しなきゃならない？」

「世界の平和のための、ミカエル様の御役目にございます」

「世界の平和？」

「一族が、世界の民が、幸せでありますようにお祈りするのです」

「じゃあ、俺の幸せは、誰が祈るの？」

「ご両親様も、私も、一族の皆がお祈り申し上げております」

「祈ってくれてるのに、俺は幸せを感じない。なら祈りなんて、何の効果もない」

白く長い真っ直ぐな髪と、髪と同じ髭を蓄えた彼は、双眸を覆うように伸びた白眉の下の眼差を緩ませた。

「失礼ながら、ミカエル様。広い世界を見渡しますと……」

「ごはんも食べられない人がいるんですよ。手足が不自由な人も目が見えない人も、耳が聴こえない人もいる。教授からそう教わった」
「左様でございます」

「じゃあ、心がなければ、どうするの？」

「心が……でございますか」

「手がないうちに、足がないように、心がなかったらどうすればいい？ 心がなかったら、幸せも分からないよね？ 俺が幸せを感じられないのも、心がないせいかもしれない」

「御父君も聡い御子様でしたが、思っていた通りあなた様は彼以上でございますね」

快活な笑い声を上げて、彼は気安く俺の肩に大きな手を置いた。

「あなた様にこう申し上げるのは躊躇いがありますが、世の中は不平等だと思われませんか？」

「思っ」

「けれど、心だけは平等なのです。その平等は生き物の尊厳として、大切にされなければならぬことです。」

心を持つのも、持たないのも、どのような心を持つのかも、それぞれの人の自由でございます。根本でありながら、最上の自由といえますでしょう」

外神殿の回廊に立ち、俺は火司長を見上げた。

火司長は、この回廊から先へは行けない。生涯、この神殿で過ごすなければならない身だからだ。

彼は、自由ではないかもしれない。けれど、心という形で、自由を得ていると言いたいのだろうか。

そのとき、俺は、彼のその姿に自分を重ねなければいけない気がしていた。

一族を治める立場というしがらみのなかで、自分もそのように生きなければならぬのだと、子供心に思い、その息苦しさ押し潰されそうになった。

火司長のようには、俺は、なれない。そう思った。

「風が出てきました」

火司長が、床まで届く長い衣、たつぷりとした襷のある深緑の聖衣を広げて、傍に立つ俺をシヨールで囲うように包み込んだ。

誰もが、容易には俺には触れない。身支度を手伝う使用人も侍従も、高価な骨董品でも扱う慎重さで、気を遣って俺に触れていた。

だから、何の気兼ねも見せず、小さな子供を当たり前に守る態度で火司長がそうしてきたことに、驚きを隠せなかった。

こわごわと見上げると、火司長は、誰をも安堵させるだろう優しい微笑を浮かべて、頷いた。

「今時季の春風は、冷たいですから。お風邪など召されませんよう」

聖衣の中は、温かかった。守られている安心感で、すぐにでも眠くなってしまうそうなほど。

彼は、俺が何を求めているのかを、知っている気がした。

「……俺は、自分がこれから、どうすればいいのか分からない。」

俺も、火司長も、みんな、どこに行くの？ どうしてみんな、生きてくるの？」

赤々とした夕陽を眺める火司長の、薄いグリーンの瞳が、日没の色に染まっている。

威厳を湛えながら、どこまでも穏やかな、揺ぎ無い平安を知る者の眼差をしていた。

「私を得た答えは、ミカエル様を得るだろう答えとは違つかもしれませんし、同じかもしれせん。ですが、私たちはこの命を終えても、再びこの世界で、巡り会うことでしょう」

「それは……生まれ変わりとかで、また会ってこと？」

「生まれ変わりについては、私は存じません。ただ、この身が土にて塵となり、あるいは火に焼かれて大気に溶け、他の生きとし生けるものに必要な力となりますならば、新たな命の中で、生を助ける力になるのだと思います。そのようにして、違う生き物の一部となり、あなた様や他の人々に邂逅することもあるだろうと、私は考えております」

「助ける力として、また生きていくの……？」

「ミカエル様も、私も、誰も、一人で生きているのではない、という事は、そのような意味もあるのでしよう。」

「どのような形であれ、私たちは支えあわねば生きていきません。力の大小はあっても、誰もがそうして生き、続いていきます。支える力が大きいからといって、何も特別なことではございません。助け合い、存在する。それだけのことでないでしょうか」

火司長の話は、俺には難しかった。

もっと聞きたくても、イギリスのクイーンパレスからスマクラグドス島へ渡る機会は、なかなか持てなかった。

その翌年、火司長は、病気で儂くなった。

俺は永遠に、俺の求める答えを失ったのだと思った。

最初に阿見香にキスをしたのは、懲らしめるための嫌がらせだった。

シエイクをぶっかけられた怨みが冷め遣らずにいた数日後、「あなたに謝ることなんか何もない」と、まるで反省の色もなく言い放たれ、水をぶっかけ返した俺に、次は室内履きが投げつけられた。

上履きとも言づらいそれは、どう見ても清潔なものじゃない。汚れた廊下もトイレも歩き回っているものを、人の頭に投げつける無神経さに本気で殺意を覚えた。

他人に対して、ここまで激しく感情が突き動かされたのは初めてだ。

こんな女の横顔に、一瞬でも目を奪われた自分さえ罵りたくなる。

正面から睨み据えた俺を、阿見香は、「喧嘩上等」とでも言いたげな顔で受けて立っていた。

俺が睨んで、怯まなかった人間は殆どいない。

幼馴染みのダンジズですら、恐怖とは別の身構えた警戒を示して、目を合わさない態度で俺の怒りの矛先をかわす術を身につけている。決して正面から対峙しようとはしない。

激怒することも余りなかったが、感情を頭にしない俺が強く一瞥をくれるだけで、大抵の者は引き下がる。俺の立場を知らない者でもそうだった。

勝気なんてもんじゃないだろ、こいつは。どこまでぶてぶてしいんだ。

怖いもの知らずなのか、単なる無知の虚勢なのかは知らないが、その根性だけは誉めてやる。

「やられた事はやり返すんでしょ？ どうぞやり返して。二倍でも三倍でも。受けて立ってやろうじゃないの」

啖呵を切った女を力づくで抱きかかえ抵抗を封じ込み、使われていない音楽室に放り込んだ俺は、ドアの鍵を閉めた後でどうしてやるるか思案した。

憤りが昂じて、このまま陵辱してやろうかとも思っていた。誰も俺に文句は言えず、日本の法も余程の事でない限り介入は出来ない。

腹立たしいことに、こいつはこれでも、俺の花嫁筆頭と見なされている女。俺が何をしてるかまいはしない。

ピアノに体を押し付けて無言で睨めば、阿見香もまた俺を無言で睨んでくる。

脅えた後悔を僅かに瞳に滲ませながらも、絶対に目をそらそうとしない。

度胸だけは一人前か。微分積分もまともに解けない脳無しのクセして。

何かが、強くぶつかり合う。

激しい怒りを込めて男を見つめる少女の眼差に、自分の中の何かが触発されている。

女を捻じ伏せて跪かせる、徹底的にいたぶって降参させると、男の本能が蠢いている。

生意気で常識なしの無神経、軽蔑にしか値しないと思いながら、

相手が誰であろうと容易に屈しない真つ直ぐな強さに、貫かれている自分がいた。

身構える隙もなく、真剣な瞳に、体の奥まで鋭く射抜かれていく。

こんなに真剣に、俺を見つめた人間がいただろうか。

躊躇いも迷いもなく、体当たりしてくる素直さで。

恋人としてお互いを許しあつた関係ではなく。

どうにかして俺を手に入れようとするとする切迫した欲望でもなく。地位や名声や施しを求めてくるものでもなく。

俺に何の期待もせず、ただの人間として見つめてくる瞳。

どちらも最低さをぶちまけて、ぶざまな感情を曝け出して。何も飾れず、防御するものもなく、嫌悪と怒りを直球でぶつけて、なにどちらにも退こうとしない。

勝ち負けは二の次で、本能と本能で向き合っている。

バランスを崩せばどちらかが切り裂かれ凌駕される力で、鋭い音を立てながら、心と心が衝突する。

気づいた時には、夢中で唇を奪っていた。

阿見香に唇を重ねる衝動に駆られた瞬間の気持ちは、自分でも説明ができない。

キスをするのが嫌いで、誰と関係を持っても拒み続けてきた、その行為に自らが駆られたとき。なぜそうしたいと思ったのか。

俺は、この女をどうしたいのだろうか？

傷つけたい。滅茶苦茶にしたい。平伏させて降参させたい。

それなら、キスじゃなくてもいいはずだ。

取り返しのつかないやり方で、彼女を壊してしまえばいい。

抵抗する唇を、舌を、強引に貪り、俺は直感で察した。

この女は、男を知らない。

必死の抵抗も戸惑いもどこか子供じみていて、嫌がるほど、男と向き合う未熟さを露呈させている。

隙だらけで、もがけばもがくほど、男の仕掛ける罠に嵌っていく。

その未熟さが、勝気な可愛げのなさとは裏腹に驚くほど無垢で清らかな感触が、俺を狂わせかけていた。

相手を陥落させ、力を奪い去る罠に嵌めているつもりが、自分が嵌められていく予感が沸き起こる。

不愉快な予感に気づいて、それを打ち消す勢いで彼女の制服をはだけながら、指で処女かどうかを確かめた。

確かめなくても、キスだけでそうだろうとは推測できたが、気がすまなかった。

許せない女の唇を味わっている、自分への苛立ちで、何も知らな

い体をいたぶることで辛辣な感情を彼女に叩きつけようとしていた。

こんな小娘に、本能が揺さぶられるなんて、馬鹿馬鹿しい。どうかしてる。

心身でショックを受けながらも、それでも阿見香は気丈さを見せた。

震えを抑え涙を堪えながら、離れた俺に問いかけてきた。

「どっつして、こんなこと、するの？ 許婚って、なんなの？」

惨めに砕けて、弱さを見せて泣けば、まだこっちの気も晴れるものを。どこまでも気に入らない。

許婚のことも、当たり障りなく事情を伝えた担任から聞いたのだろ。口の軽い教師だ。

彼女を無視して音楽室に置き去りにし、重い鬱屈に吞まれそうになりながら静かな廊下を歩き、見かけた水道で手を洗う。

こんな所まで来て、何をしている？

許婚。花嫁。そんなことはどうでもいい。

これ以上、関わりたくない。あの女には。

阿見香を残した音楽室のある第三校舎を出たところで、もう一つの渡り廊下から、制服を着た男がその校舎に小走りに駆け込んでいくのが目に入った。

遠目から垣間見ただけだが、檀とかいう同じクラスの男じゃなかったか。

阿見香とハンバーガーショップで会った日の報告書に、「同じクラスの檀聖という男子学生に告白して断られている」との記述があった。

まさか、振った女を今更気にかけてるわけじゃないだろうな？
正義感でクラスメイトの女子を心配しているというなら、それこそ

鼻につく偽善者だ。

気に入らない。何もかもが鬱陶しい。

感情的になつたまま、人のいない場所に阿見香を放置してきた状況に気づいて、何の為に学校に来てるんだと自分に舌打ちをする。

戻つて様子を確かめるべきだと、滅入る気分を叱咤している視線の先に、第三校舎から阿見香と檀が出てくるのを目撃した。

付かず離れずの微妙な距離を取って歩く二人が、また癪に障つて、阿見香を最後まで追い詰めなかったことに後悔を覚えた。

身勝手に、野蛮で、ふしだらな後悔。

花嫁にならなくても手に入れて、滅茶苦茶にして、捨ててやることもできたはずなのに。

捨ててやる　　これまで利用してきた女にも、意図的にそう
考えて接した過去はなかった。

二人を眺めながら、自分で手に負えない激情を抱かせる阿見香に

ついで、金輪際関わりたくないと思う気持ちを改めて痛感させられていた。

キスをするのは嫌いだった。

単純に体を重ねるよりも心を絡め取られそうな、唇と唇で深く探り合い口づけるほど俺を希求しようとする相手の欲望を感じて、それが煩わしくもあり、腕の中のどうでもいい女への嫌悪感を強める行為でしかなかった。

どうでもいい女と思いながら、捌け口を求めずにはいられない自分への嫌気も際限なく膨らんでしまう。

だから、適当に女を相手にし始めて間も無く、誰にもキスをしなくなつた。

求められても拒絶し、恋人として向き合えない意思表示をはつきりしておく為に「できない」と伝え、絶対に唇を重ねあうことはしなかった。

自分なりのルールでも、それが、俺が相手へ示せる最低限の礼儀だとも思っていた。

誰かの体を求めても、性行為そのものが好きだったわけでもない。束の間の快樂を持たなければ自分が爆発するだろうことを分かっている、暴発させないために自分を鋭く傷つけ、破裂させないようガス抜きを促す行為でしかなかった。

どうでもいい誰かに触れるほど、無残に散った恋の大切な思い出を　　シヤラの感触を汚してしまいそうで、おぞましさを感じた。

俺はもう二度と、誰かの肌に触れて感動や歓びを感じることは出来ないのだと、思っていた。

それでもいいと、思った。

男としての幸せも、自分らしくいられる情動もすべて、過去の恋の中に埋めてしまえばいい。

そうすれば、シヤラ以外に、恋をしなくていい。

二度と恋を、したくない。そう思っていた。

過去への未練ではなく、自分を失うことが怖かった。

恋が、自分も、相手も、何もかもを破滅させる壮絶な力を秘めているものだと、シヤラとの関係で突きつけられ、俺は恋をするのを恐れていた。

誰かに溺れる恐怖も、人肌を求めながら同時にそれを忌むおぞましさを寒々と広げさせ、女を抱く毎に心を一層冷やかに、頑なにしていたのだと思う。

なのに……………阿見香は違う。

彼女に触れただけで、胸の底から熱くなる。

自分のどこにこんな情熱があつたのかと戸惑いながら、この熱で余すところなく、未熟な体を包みたくなる。

男の快楽を遂げられなくても、その肌のすべてに触れて、自分のキスで余すところなく彼女を埋め尽くしたくなる。

無垢な体に、自分の快樂の印を刻まなくてもいい。想いが、実らなくてもいい。

彼女の体の奥まで、罪にまみれた自分を、残さなくてもいい。

これまでの、女にしてきたすべての身勝手な行為の懺悔のように、それでもいいと思っていた。

そうはつきり覚悟したのは、グランマから「阿見香を連れて来いと連日の催促を受けて、渡英した時だ。

人を立ち入らせないプライベートな温室で、彼女と肌を合わせた日。

突然に自暴自棄に陥っていた阿見香を訝しみながら、俺に素直になっっている彼女と、最後までいってもいいと思っていた。

けれど、そう望む自分もいる一方で、彼女を必ず苦しめる結果になると分かっただけで、自分のもの出来ないと思う心があった。

自分の思い通りにはできない。

彼女を本気で好きになってしまったと自覚した時から、この恋が、俺の自由にはならないことを分かっていた。

彼女の望む幸せと、俺の生きていく方向は違う。

阿見香が見つめる先に、そうして自分の意思で歩いていこうとする道に俺がいないことは、彼女を好きだと気づいた時には明らかになっっていた。

苦しい恋になるのは、自分でも分かっていた。

恋になる前に、彼女との未来を跡形もなく壊したのは、自分だという反省はある。

音楽室での一件の後、俺の読み通りにヴィクトリアが放った刺客に狙われ、倒れた彼女を運んだ保健室でも、募っていた鬱憤を晴らすように陵辱寸前の行為に及んだ。

阿見香に事情が伝わり、東京のスマクラグドスの別邸へと彼女を迎え入れ、花嫁作法の取り決めの一つ、俺と同じ寝室を使うようになってからも、寸前まで彼女を追い詰めた。

結ばれないのも、苦しみも、自分の贖罪だ。

苦しさがだけが勝るのに、なぜこんなに深く、彼女に惹かれていくのだろうと思う。

純粋な疑問に囚われながら、彼女を見つめて答えを見出そうとする。

そして、そのたびに、答えを見失う。

好きになった。それ以上の答えも、理由を求める分析も、どうでもよくなる。

俺に上履きを投げつけたのをきっかけに、女子たちの反感を買った阿見香は、数々の嫌がらせを受けるようになった。

最初に扇動した主犯が、休み時間になると俺の席にやってきてはキンキンと耳障りな声で騒ぎ出す女子だとすぐに察しがついていたが、口出しはせずにいた。

阿見香がどう対処するかは見ものだと思っていたし、将来もしも一族に嫁げば、一般人として育ってきたことをあげつらわれ、内外に潜む嫌味な連中から心無い仕打ちを受けるのは目に見えている。

この女が、どこまで立ち向かえるかを観察するには、いい機会だと眺めていた。

それでも、エスカレートする嫌がらせには、眉を顰めることは度々あった。

自分の経験では、大学時代に私物を紛失したりする程度のことであっても、日本で表現されるイジメのような、スケープゴートにされたことはない。

それが世の中で問題になっている知識はあっても、目の当たりにするとそのえげつなさ、集団の残酷さに、これまで感じたことのない人間への嫌悪感が込み上げてきた。

力のある立場、地位のある者には見せずに秘して隠す人の醜さをまざまざと見せ付けられ、無性に気分が悪くなったが、それでも俺は阿見香を庇わなかった。

一方だけを庇えば、不満を募らせる連中は必ずいるものだ。それほどこの組織も同じで、下手に庇って水面下で陰湿にやられるよりは、目の届くところで騒がれているほうが、まだ安全ともいえる。

この騒ぎに乗じてくる可能性のある、花嫁候補になった阿見香を狙う刺客をおびき出す為にも、都合が良かった。

本人が持参しているランチボックスの中に、節足動物のムカデや環形動物のミミズが入られ、それらが苦手らしい彼女が絶叫して気絶した時には、さすがにやりすぎだと激昂しそうにはなかったが。

昼休みでばらけていた席を避けて阿見香の傍に駆け寄れば、俺を追うように即座にやって来ていた檀が、俺を怒鳴りつけた。

「誰のせいだと思ってんだ！ おまえは手を出すな」

……………手を出すな？

おまえの女じゃないだろ。

睨み上げると、檀も俺を睨みつけている。

なんだ、こいつ。俺を誰だと思ってるんだ。対等に口を利ける身分でもない、小僧の分際で。

しかも命令口調ときてやがる。

阿見香といいこの男といい、怖いもの知らずの愚か者ほど見苦しいものはない。

正義感が強いところが似ているのだろうが、同じクラスにどうしようもない馬鹿者が二人もいて、狭い空間で同じ空気を吸ってるのかと思うと虫唾が走る。

「誰のせい？ 本人のせいだろ。それとも俺が仕向けているとでも？」

目を眇めて抑えた怒気を向ければ、檀はわざとらしく眼差を瞠目させて受けて立ち、俺に切り返した。

「本人のせい？ 正気で言ってるの？ おまえが女子らに制止すれば済む話だろが」

「俺は、集団のヒマ潰しのきっかけになっただけ過ぎない」

本人のせいとまでは思っていないが、売り言葉に投げつけてやったそれが、いけすかない奴の神経を刺激したらしいのを、やっぱりと勘付きつつ眺めていた。

すぐに駆け寄ってきた様子といい、阿見香を気になり始めてるんだ。この男。

「振った女を庇ってナイト気取りか。偽君子が。あっちにもこっちにもいい顔したいなら、男をやめて愛玩犬にでもなったらどうだ？」

奴にだけ聞き取れる声で毒舌を吐く。

見る間に顔色を変えた男の怒りと、暫く沈黙で対立する。

鼻持ちならない。阿見香に好意を持たれてるからって、いい気になるな。

将来、何とかしてこいつを、うちの財閥の傘下企業におびき入れてやりたい。

ぶちこんで過労死するまで働かせてやる。

「高橋は俺が保健室に連れて行くから」

睨み合いを先に降りた檀が、阿見香を抱き上げようとした。引き際を心得てるのも、小賢しくて気に食わない。

「おまえこそ触るな」

俺の花嫁になる女だと言いつうになり言葉を呑んだ途端、今度はあいつが声を潜めて呟いた。

「自分の気まぐれで高橋まで振り回すなよ。傷だらけになるのはあんたじゃない」

傷だらけになるのはあんたじゃない。その通りではあったから、その場は自重するしかないと言った。

俺を引き下がらせた落とし前は、近いうちに必ずつけさせてやる
と思いつめながら、阿見香を抱える檀を見やる。

当の阿見香本人は、その後も自分の席の両隣りの男同士の争いなど、まったく意に介していないようだった。自分のことで手一杯で、それどころじゃないという顔をして。

バケツの水を浴びせられても、カバンに小動物の死骸を放り込まれても、阿見香はめげなかった。

五寸釘の打たれたコウモリから釘を抜いてやり、顔は青ざめながら、「これ、埋めてあげたほうがいいよね。どこがいいと思う？」

こんなことされたら成仏できくない？」などと親友に呟いている。

相手は、「その前に自分の心配をしなよ」と呆れ返り、そればかりはそばで聞こえていた俺も同感させられた。

隣りで見ていた檀も、俺と興田文月と同じことを思っていたことだろう。

毎日げっそりしながら、彼女は視点がどこかズレている。

「マジで限界！」とやつれた顔で親友に泣き言を愚痴りながらも、ネズミやコウモリを丁寧印刷紙に包み体育館裏に埋めて、「成仏してー」と柏手を打っている、一風変わった女。

……成仏系の宗教は、仏教で、柏手じゃないだろ。

確か、日本特有の神道の作法はずだ。外国人の俺でさえ知っていることを、なぜ知らない？

「自分が告って玉碎した場所にそれを埋めるのは、檀への嫌味なわけ？」立ち会った親友が文句を言えば、阿見香は「そういえばそうだった！ 檀君にも動物にも悪いよね」と再びそれを掘り返し、違う場所に移動する。

……………埋め終わる前に言ってやれよ、興田文月。

せつせと穴を掘る阿見香の後ろで、声に出さずに楽しげに笑っていただろぅ様子が目に浮かぶ。そういう性格だ、あれは。

ひっそり後を付けてきた俺も、呆れるのを通り越して、不可解極まりない阿見香を宇宙人のように眺めるしかなかった。

死骸には手厚い配慮をするくせに、人の頭にはバイ菌まみれの靴を投げる、ちよつとやそつとじゃ匂いの落ちない液体をぶっかけてくる。何なんだ、いつたい。

「ふざけるな。おまえから見て、俺は小動物の死体以下か!？」と、出て行って詰問したくなる。

屍をいたわる、そういう妙な繊細さを見せるかと思えば、悪戯されたらしい制服の代わりに体操着姿で堂々と授業を受け、嘲笑して振り返るクラスメイトを徹底無視する度胸も見せ付ける。

ツンと顎を上げて不愉快さを示しながら、卑怯者には凜然とした態度を崩さない彼女は、弱者の立場に置かれても、心までを弱さで染めたりはしなかった。

ミカエルの憂鬱 4 (後書き)

小説の内容とは関係のないあとがきです。

仕事を立て込み中でレスが遅れるので、感想欄をしばらく閉じます。

えっと、それからですね。。

ほとんどの読者さまへは、無関係のことなのですが……

(気分を害されたらすみません) (――)

今後、第三部や四部、再掲載の番外編について、

また無断転載など嫌がらせの行為があれば、次からは法的に相応の措置を検討します。

1巻の書籍化の時から、削除した小説の全文が無断転載されたりなど色々ありまして、内々に処理しました。

嫌がらせが目的でしている人を説得したところで、こちらの徒労になるだけですから、

本人に連絡をせず、サイト上で警告をするのも控えていました。

無断転載については、掲載されていたサイトの管理会社に直接交渉して対処後、

後々のことを考えて証拠を保存してあります。

アマチュア作家だろうとやれることはやりますし、かかる費用より時間が大切です。

自力処理も手間がかかり、時間を無意味に潰すだけなので、また何かあれば今後は専門家に依頼します。

家に帰って、阿見香の制服を至急新調しておくよう指示すると、ダンジズが顔を曇らせた。俺の様子がピリピリしていたせいもあったのだろう。

「何があったんんです？」

問われて、事情を掻い摘んで話せば、ダンジズは訳知り顔で頷いた。

「以前から、かなり大変な思いをされていたようですから、腹は据わっているお方だと思いますよ」

「以前から？」

「報告書を読んで、いくつかの点が気になって問い合わせさせていただきました。」

阿見香様のご出身の、今は退任されてた小学校の校長が、“立場上、生徒と接することは多くなかったが、あの子のことは忘れられない”と話されていました。小学三年生の時に、教科書や上履き等の持ち物が全部、緑の絵の具を溶かしたいくつものバケツの水に捨てられていたことがあったそうなんです。机も椅 子も、ベッタリ緑で塗られて

「緑の水？ 絵の具？」

「瞳の色のことで、相当なイジメがあったらしいですね。けれど、そんなことをされても、うろたえる教師たちの前で、彼女は涙も見せずに歯を食いしばって毅然としていたとか。

それよりも母親を氣遣って、絵の具のことは黙っていてくれと、教師たちに言ったそうです。目のことでいろいろ言われるのは、お母さんが一番悲しむから、と」

「……………」

「勝手に調べた上、差し出がましいかと思ひまして、ミハイル様にはご報告しませんでした」

「……………気の強さは、一族譲りか」

言葉が見つからず、小さく呟いた俺に、ダンジズがここにいない阿見香を思いやるように首を振った。

「血筋はあるかもしれませんが、それだけで乗り越えられる困難ではなかっただろうと、私は思います」

学校行事で開かれた球技大会で、俺は彼女の強さを見せつけられた。

勝気さの中に、折れそうな弱さを滲ませながらも、それをしなやかなばねにして強さに変える力が彼女にはあった。

バスケットボールの試合で檀聖の鼻を明かした後に、阿見香のバレーボールの試合が行われ、最初は無関心で見ていた俺も、九人対一人の状況に呆れ半分苛立ち半分の心境になっていた。

集中攻撃を受けても、阿見香は逃げなかった。試合を放棄せず、最後までほとんど一人で戦っている。

試合を止めさせようとした教師もいたが、屈しない阿見香を眺めて、それが本気のイジメ、集団のイジメと捉えていない教師のほうが多かった。

周囲の野次を聞きながらも、当の生徒が鮮やかな身動きで戦っているので、レクリエーションの一つのように黙認していたらしい。

阿見香の運動神経が人一倍良かったのも、イジメと思わせない雰囲気を見せていた。

ボロボロになりながらも、不思議な眩しさを放っている女だった。

普段は目立ずに振る舞うのに、怒りに触発されると圧倒する精神力で覇気を見せ、人を惹きつける。

どうしてこの女は、一人で戦えるんだろう。

どうしてここまで、強くなれるのか。

俺やシャラやダンジズ、一族の中枢の人間がこなせることを、何も満足にできない奴で、「世の中で戦う為のまともな武器」を何も持っていないのに、何も恐れていない。

無知だからなのか。武器を持たずとも生きていけるしたたかさを、生来の性格と環境の中で身につけてきたのか。 両方なのだろう。

……………もういい。充分だ。

一人でそれ以上、頑張らなくていい。

そう言ってやりたかった。

もう、踏ん張らなくていい。これからは、俺がそばにいる。

そう言いたくなった。

無心で守りたくなって、キスをしていた。

彼女の身を守護するよう祈りを込めて、防御の力のある自分の血を注ぎながら。

同時に、彼女のまっさらな力を、挫けない強さを求めている心があった。

バラバラに碎けた過去の恋で、頑なにあり続ける俺の弱さが、阿見香のひたむきな強さに無条件に惹かれて、救いを得ようとしている。

全校生徒が揃った目前でのキスに、阿見香に手加減なく引っぱたかれ、ムカつきはしたものの、彼女の手を離せなくなっている自分がいた。

「見ての通り、俺が一方的に好きだけなんだ。断られたんだけどね」

静まった館内をゆっくり見回す。

このときは、好きだという気持ちはまだなかったが、うるさい連中に釘を刺すためにそう言った。

「彼女に、変な真似は、しないでくれないか。絶対に、守ってもらいたい。」

もし、またおかしな動き、高橋阿見香へ誹謗中傷を繰り返すなら、私、ミカエル・アレキサンダー・クレイラ・スマクラグドスへの攻撃とみなして、私がそれ相応の制裁を行わせてもらう。陰でやる者も許さない。覚えておいてくれ」

声を張り上げ、聴衆の関心を掴み寄せ掌中にする気迫を込めて宣

言する。

組織を束ねる立場に生まれた身として、影響力を持つよう鍛えられてきた俺だ。

仮にこの力が及ばず、彼女に嫌がらせを続ける者がいても。その時は、俺が受けて立ってやる。

心のどこかでは「ガキの集まり相手に馬鹿馬鹿しい」と、うんざりしているのに。そうしなければ、気が治まらなくなっていた。

球技大会での阿見香の負けん気を目の当たりにして、鋼のような精神力、へこたれない気強さに惹かれながらも、コートの中で孤軍奮闘する彼女を見つめていたたまれなくなった。

これまでもそうして、親友や母親がいても依存はせずに、健気に一人で踏ん張ってきたのだろうと思いついて、守りたい気持ちに駆られ始めた。

けれど、守りたいと無心にそう思ったことを、数日後には撤回したくなる出来事が起こった。

「あたしにもお母さんにも二度と関わらないで。約束してくれないならここから飛び降りる！」

キレた彼女に、学校の屋上の際に立たれ時には、肝を冷やされた。俺ともあるうものが。

助走をつけて突進しながら軽々と柵を飛び越えていく度胸にも度肝を抜かれ、彼女の名を叫んで呼び止める先で制服のスカートがひらりと空に広がった瞬間、全身を戦慄が突き抜け、目を閉じずにはいられなかった。

過去の光景が、よみがえる。

俺との恋で未来を見失ったシヤラが、養母の母国のアイルランドを旅して、大西洋を臨む断崖絶壁から飛び降りた時のことを。

自分はそれを目の当たりにはしていないが、瀕死の状態で英国のクイーンパレスまで 彼女が始めて訪れた実親の家まで、意識不明で運ばれてきた日のことが、ありありと脳裏に浮かんでくる。

動悸を抑えすぐに目を見開き、阿見香の姿がまだそこにあるのを確かめたときには、戦慄は安堵の吐息に変わり、その安堵も即座に憤りになって燃え上がっていた。

何を考えてるんだと怒鳴りつけたいのを我慢して、まだ柵の外にいるあいつに慎重に歩み寄る。

四階の高さからでは、人は充分に死ぬる。分かっている俺を脅してるのかと正気を疑い、彼女を見つめても、力強い眼差しに狂言やからかいは見当たらなかった。

死を決意している人間の目ではない。

心の底から、「あんたと関わるくらいなら飛び降りたほうがまし」真剣にそれだけを訴えている女の目だった。

随分と嫌われたものだ。彼女にどう接してきたかは承知しているつもりだったが、ここまで、命がけで嫌悪されるとは思わなかった。

つまらないことで、命を粗末にするような賭けをするな。そう引っぱたいてやりたくても、愚かに見えても、阿見香は阿見香なりに必死なのだ。それは伝わってくる。

悲壮感に吞まれて、死を選ぼうとした、シヤラのような弱さではない。

どんな絶望に直面しても、阿見香は自ら死を選ぶ女じゃない。この状況に立たされて、それを確信する。

「要求をのまないなら飛び降りるだけよ」その程度でしか考えてないのだ。

生きる活力を、毅然とした生命力を溢れさせながら、自分を切り

札に出来る人間は只者じゃない。究極の変人と紙一重だろう。

この女は、手に負えない。普段は大人しく振舞っていても、本質は炎そのものだ。

許婚という鼻屑目を差し引いても、平均より容姿は悪くない、すつきりした透明感のある見た目なのに、男経験がない理由も納得できる。

本人に悪気はなくても、同年代の並の男を敬遠させる気性を時折垣間見せて、恐れを抱かせるのだ。

周りの男たちに勇気がなかったのを感謝すべきか、意気地なしと見るべきか、今の今、どう判断していいか答えに窮している。

さつさと誰かに奪われていれば自分は惑わされずに済んだし、こんな所まで来る必要もなかったのだから。

こつちこそ君には二度と関わりたくない。

そう断言したいのに、憤りながら渴望している本能がある
この女が、欲しい。組み伏せて、腕の中で限界まで泣かせたくなる。

俺を凝視する阿見香の瞳は、決死の覚悟で煌きながら、冴えた鋭

さと炎の熱が混ざり合った魅惑を放ち、男をゾクゾクさせる気迫を見せていた。

なんでこんな小娘に、振り回されなきゃならないんだ。

こめかみを押さえて溜息をつく俺を、阿見香が微笑を浮かべて見つめてくる。男を弄ぶような、小悪魔じみた色香を薄っすらと漂わせて。

男を困らせて楽しむのが趣味の女なら、ここで放置していくところだが、こいつはそういうタイプじゃないのはもう分かっている。

困惑している俺の反応を面白がっているのは確かでも、「勝手に飛び降りろ」と暴言を吐くわけにはいかない。

この仕返しは、後で必ずさせてもらう。許してくれと懇願されても、ただじゃおかない。

烈しく疼いてくる欲望を紛らわし、阿見香の気をそらす話を並べながら、油断した彼女の腕を捕まえて引き寄せた。

「離してっ」

柵越しに暴れる彼女に、観念しろと微笑を向けて言い放つ。

「離せない」

束の間、状況を忘れた顔で俺を見つめる阿見香に、心の中で呟いた。

花嫁だとか、許婚だとかは、どうでもいい。

絶対にこの女を、凝らしめて、泣かせてやる。

それも出来る限り、屈辱的に打ちのめす方法で。

阿見香と一緒に住み始めてから、グランマからの催促で、十日ほどイギリスに行く予定が本決まりになった。「行かない」と言い張るだろうから、間際まで彼女に話は伏せていた。

阿見香の侍女のカレンにこっそり荷造りをさせていても、興味が向かないことに関心がない阿見香は、クローゼットに用意されている服が減っていようといつもある位置に私物がなかりと、一向に気にならない鈍さと拘りのなさをここでも発揮していた。

一緒に住み、部屋まで俺と同じ生活。

「いそろろの心得」と独り言をぼやきながら、阿見香もそれなりに気を遣ってはいるようだが、「気の遣い方が違うだろ」と、何度説教したくなっただか考えたくもない。

渡英の前日も、無防備で寛いでいる姿を目撃し、深い溜息をつかされた。

短パンを履いて、ベッドの上であぐらをかくのはやめろ。

しかも上は、風呂上りのキャミソール一枚で。下着もつけず、加えて色は白ときている。

.....。

物によっては照明の加減で、先端の色が陰になることくらい、なぜ分からない？

「胸の形がいいのは、アピールされなくてももうよく知っている。実物を見たし、触りもしたんだから」と、直接的に言ってやったほうがいいのか？

言わなくても、すでに全裸を見られている経緯がある男に、何か意識するものはないのか？

..... 自覚しろよ。嫌がらせか、仕返しなのか、これは。

来る日も来る日も、一晚中拷問を受けてるとしか思えない。

男のいない家庭で育った弊害だとしても、十七になれば恥じらいくらい身に付くだろ。常識として。

それともこいつは、常識を重んじる日本社会の中に自分を溶け込ませるふりをしているだけで、非常識のカタマリなのか？

自分が女だという自覚が薄いから、男の気持ちにも無頓着なのだろう。

その無頓着さが、彼女の魅力を際立たせているのはそうなのだが、毎日寝室もベッドも一緒に使うほうの身にもなってくれ。

湯上りの上気した肌をさらして、何の警戒も駆け引きもまとわずに、ありのままにそこにいる姿を見せられると、気が狂いそうになる。

泣き喚いて激しく抵抗されても、自分のものにしたくなる。

「短パンでいるのはやめてくれないか。目のやり場がない」

足を広げるのもやめると言いたいのを、口を嚙んで睨み下ろす。

「だって暑いし、鬱陶しいし。これが一番楽だから」

携帯片手のままにべもなく返し、悪びれる様子もなくこっちを見もしない。

なんで俺がこんなことを言わなきゃならないんだとムカつきながら、目のやり場がないとはつきり告げているにも関わらず、意味も通じていないようだ。

「少しは男の生理を理解しろよ」

怒り混じりに吐き出す。

「せいり？ 男の人にも生理ってあるの？ 知らなかった！」

言いながら、阿見香がようやく携帯から顔を上げる。

「初耳！ 女だけだと思ってた。保健体育で習わなかったよ？」

「………………。とぼけてるのか？ 骨の髄からバカなのか？ ど
つちなんだ？」

「話の意味分かんないし。ね、今の骨のズイって、あんた漢字で書ける？」

「書ける」

「うわ、やっぱバケモノ。ほんとに外人なの？ 日本人のあたしでさえ書けないのに。そりゃあんたから見たら、あたしは大バカでしょ
ようよ」

早口で言い携帯をサイドテーブルに置くと、さつさとベッドに潜り込む。夏用の薄い上掛けをかぶり、俺を適当にあしらって横たわった彼女に呆れ返り、痛烈な皮肉の一言でも突き刺してやるうかと

じっと眺めた。

「バカはバカでも、自分に都合の悪い話を巻いてあしらう天才だな、君は」

辛辣さを抑えて言って、返事を待ったのに、応答がない。

「阿見香？」

……………寝てる。あつという間に。

ベッドに座り顔を覗き込んでみれば、横たわって目を閉じて数秒、恐らく十秒かからず、彼女は熟睡モードに入っていた。

「……………」

どういつ神経の持ち主なんだよ、コレは。

人の気も知らないで、のうのうと寝こげやがって。

溜息しか出て来ない。ムカついているのに、思いつきキスをしたくなる。

とことん、いじめたくなる。思いつく限りの嫌がらせを試したくなる。

徹底的にいたぶって、降参させたくなる。

野蛮な自我が溢れ出して、支配したくなる。

体だけでも自分のものにして、永遠に腕の中に閉じ込めたくなる。

絶対に泣かせてやる。それも出来る限り屈辱的な方法で、と狙い定めたこと。

阿見香に「飛び降りる」と脅された屋上で固めた決意を、俺は実行に移す機会を逃さなかった。

けれど、生意気で勝気な彼女を懲らしめてやるうとして、好きな男のそばで強引に抱こうとした夜も、触れながら自己嫌悪が増すば

かりだった。

最後まではずせずに、彼女だけを羞恥に追い込んで傷つけていたはずが、触れるたびに、自分の手で自分の心を引き裂いていた。

それでも、泣いて眠りについた阿見香を抱きしめ、取り返しがつかないほど彼女を追い詰めたことを自覚しながら 安心もしていた。

誰にも渡さない。

好きな男が眠る隣で、これだけ傷つければ、そいつの元に行くこととはないだろう。

彼女を疎ましく思い腹も立てながら、彼女が他の男と繋がるのは許せない。

断ち切らせないと気がすまなかった。

これでいい。渡すもんか。

そう確信していたのに、阿見香は俺の予想の範疇を軽々と飛び越える女だった。

屈辱を与えた次の日、病院に押し込んだあの男の元に行くようだと執事から聞き、別れ話には行くかもしれないと思ってはいたが、いや、別れ話も何も、まだその時は付き合っただけはなかったのだが、脇目も振らず家を出ていった阿見香を見て、嫌な予感がした。

父の代理として急な仕事で海外に出ることになり、空港に向かう途中、報告のついでを装って後を追って病院へ赴いた俺は、病院の外に現れた彼女の顔を見るなりその予感が的中したのを悟った。

「で、図々しくも、君はあいつに顔を見せに来られたようだ。体育館裏での安っぽいラブシーンの延長のまま、あいつの彼女になるのか」

「……………図々しくても、そういうことだから。もう、あたしに、二度と触らないで。あれっきりにして」

そういうことだから？

どういふことなのか、首を締め上げて説明させたい。

あの男の隣であれだけのことをされても、あの男の恋人になる？

プライドはないのか？　そこまであんなくだらない奴が好きなのか？　呆れてものも言えない。

純情ぶった顔をして、どういふ思考回路を持ってすればそこまで凶々しい結論が出せるのか、理解できない。頭のすみずみまで覗いても、俺には解読不可能だろう。

「頼まれても触らない」

この女はやばい。これ以上は踏み込みたくない。

女は怖い。怖いというか、生き物として深く関わりたくないと過去に遊んだ経験で痛感してきたはずなのに、そのすべてをガラクタにする存在感で阿見香は君臨してきた。

どこにでもいる、つまらない女に見えるのに。男を本気にさせる眩しい情熱を秘めた女。

かと思えば、純情な少女の顔を見せて、無意識のしたたかさで男を振り回す。

なのに、当の本人は一点の曇りもなくあっけらかんとして、気取りも計算もなく脳天気には振舞う魅力で男をとことん狂わせ、平然としている。

その後、数日、阿見香から離れてアジア各国を飛び回っていた間も、油断すると彼女のことでも頭を悩ませていた。

やばい女だと分かっているのに、頭から出ていかない。

踏み込みたくないと思いつつ、思うほど、踏み込んでいく。

馬鹿なくせに勝気だし、生意気で可愛げがないし、流されるくせに芯は頑固だし。気性は過激なくせに鈍感で、他の人間その他には愛情を示すくせに俺には意地が悪い。

男と女の醜いことなどこれっぽっちも知りませんって顔をしながらしたたかさは最強で、総じて普通じゃない。あの女はやめろ。

そうズラズラと並べて説得しても、留飲が下りるのは束の間。すぐに納得しきれない自分がイライラしていた。

二度と顔を見なければ、それに越したことはない。一ヶ月もすればきれいさっぱり忘れられるはずだ。今ならまだ間に合う。

仕事にかこつけて日本を離れていれば、あの女もあの男とよろしくやって処女も捨てて、早々にあの家を出て行ってくれるだろう。

そう思っていたのに、どうして日本に戻ってきてしまったのか、自分の行動をなじりたかった。

会いたくない気持ちと。無性に会いたい気持ちがあった。

会わなければ後悔し続ける気がして、戻っていた。

もう一度会って、確かめたい。それだけが、理由だったと思う。

エントランスで、吹き抜けの階上に彼女の姿を数日ぶりで見たと
き、もう駄目だと自覚した。

駄目だと分かって、目をそらすしかなかった。

たった、四日か五日、離れていただけなのに。彼女を見た瞬間、
胸が熱くなっていた。

本気で、好きになってしまった。

愛しくて、たまらない。

あの男と付き合おうと決めた阿見香に心底憤り、軽蔑と嫌悪に揉まれながら、その不器用な狡さにさえ惹かれてしまう。

情に脆く、俺を翻弄し、その気なく男を手玉に取れる芸当の持ち主に、心は降参している。みつともないくらいに。

媚びをうらない。ご機嫌取りもしない。飾らない心で俺を見る者。

お互いに最低な自分を叩きつけあいながら、目をそらさずにあるのままを見つめあえる存在。

そんな出会いはきつと、一生に一度きりだろう。

眠る彼女の髪を、そっと指先ですくう。額に口づけてから、唇に唇を重ねる。

これくらいじゃ、阿見香は絶対に起きない。アジアでの仕事から日本に戻り、毎日同じベッドで眠るようになってからこの数週間で、それは実証済みだ。

哀しいのか、嬉しいのか、分からない。

こうして傍にいたことが、嬉しいのに。

好きになっても、届かない哀しさと拮抗して、ぶつかりながら、擦り切れそうになる。

阿見香が、俺の気持ちを受け入れることは、ないだろう。

酷いことを彼女にしてきたのは分かっている。報われなくても、自業自得というものだ。

それに彼女には、好きな男がいるのだから。

ミカエルの憂鬱 5 (後書き)

今日が更新予定なのをすっかり忘れていて、滑り込み更新。

一週間があっという間です。(^^;;

しかし。「男の人にも生理があるの？」って。どこまで非常識なんだよ、あいつは。

学力以前の問題だろう。

なんでよりによって、こんな頭がおかしい女を好きになったのかと思うが、「著しく頭がおかしい」「まともに見えてまともじゃない」「思考回路が時折不可解すぎて話をしてると頭痛がする」という共通点で、俺の母親と阿見香は似ているかもしれない。

母親については、知能は悪くないのだが、宝石箱育ちの世間知らずであり、頭の中身が常時ふわふわと空中散歩に出かけているタイプの人だった。

俺が母親と過ごした時間はあまりない。

久しぶりに 大抵は二ヶ月毎にクイーンパレスに戻る母と顔を会わせても、交わせる会話も少なかった。

母と二人だけでゆっくりお茶をしたのは、九歳のあの時以降はなかったかもしれない。

大学に行くようになった俺と、両親は、それまでよりもすれ違う

生活に慣れてしまった。

十歳に満たない年で大学に放り込まれるとは想像もしてなかったあの日も、しばらくぶりに顔を見る母と、会話の殆どない二人きりのお茶会をしていた。

にこにここと笑みを絶やさないう彼女に、「何がそんなに楽しいんですか？」とも毒舌を吐けず、俺はむっつりと不機嫌でいた。

父も母も、親子として距離がありすぎて、数ヶ月ぶりに会えても嬉しいという感情が湧きにくかった。

どう向き合っているのか当惑して、俺はそれを不機嫌さでしか表せないでいた。

父と同じに腰よりも長い母の髪は、濃いブロンドで、細かな泡が広がるようにふわりとした癖毛をしている。スプリング・グリーンの瞳は、夢見る少女の眼差そのもので、シャボン玉が光を反射するのに似た華やきをきらきらと放っていた。

夫婦揃って、類稀な美貌の持ち主と世界中から称賛されていたが、俺にとっては関心のないことだった。

紅茶を飲みながらふと、以前から気になっていたことを母親に尋

ねてみた。

「なぜ、俺の名前はミカエルなんですか？」

息子の質問に、はにかむ微笑を向けてくる。

「あなたが生まれる日の朝、大天使ミカエル様が私の夢に現れたのよ。神々しくてとても素敵な方だったわ。まるでローデリオンのように」

「……………」

やっぱり、それが由来なのか。大天使が夢枕に立ったなどという噂を信じるのも愚かだと鼻で笑っていたのに、嫡男の名付けが、そんなことでいいのか？ 反対しろよ、父親も。

恥ずかしげもなく天使と夫を並べて公言できる思考も、花盛りでめでたいが、大天使がどのと言い出す価値観からしてどうかしている。自分の親ながら、「頭は大丈夫か」と言いたくなる。

冷たい目を向ける九歳の息子を意に介さず、母親は幸せそうに笑っている。「この世のすべては春ですわ」とでも言いたげに、いつ見ても笑っている人だった。

「母上は、いつからキリスト教徒になられたんですか？」

ユダヤ教やイスラム教にも大天使ミカエルは登場するが、この質問に団体はどうでもいい。

息子の皮肉に気づかず、グレースは笑顔で答える。

「私もローデリオンも無宗教よ。もちろん、神様はおられますし、私も全幅の信頼を寄せております」

「神様にお会いになったことがあるんですか？」

「何度かお目にかかりましたわ。夢の中で」

「……………」

また、夢の中で。

俺が生まれる日の朝に、夢に現れたのが、神様でなくてよかったと思う。それが現れていたら、俺の名前は絶対に「ゴット」になっていたはずだ。

だいたい、会ったこともない存在に「全幅の信頼を寄せている」とか、なんでそんなことが言えるんだよ。我が親ながら、どこまで頭のネジが狂ってるのかと嘆息しかでない。

そこへ父親がやってきて、部屋に入るなり妻の両頬へキスをすると、自分もソファに座り彼女を膝へ抱きかかえた。二ヶ月ぶりに会う息子には、微笑を向けただけで。

この父親が、妻を溺愛しているのは有名だ。

幼少から未来の花嫁候補と目され蝶よ花よと育てられたグレースは、体が弱かったものだから温室育ちに拍車がかかり、無事に総帥に嫁いではローデリオンが片時も彼女を離さずにいる。

三度の流産の後で俺を産んだ時も命を落としかけ、弟を産んだ時も危篤状態に陥った。ローデリオンからすれば、二度も失いかけた愛しい妻が、大切に大切に仕方がないのだろう。

おかげで、息子の俺は常に眼中にない。彼の右目は常に仕事と一族を見、左目は妻しか目に入っていないらしい。

一年の半分以上をスイスで療養している虚弱な弟については、親なりに関心はあるようだが、健康体の俺のことは放置同然、教育指導もすべて人任せだ。

放置状態だろうと、360度回転しても目に映らない人間でもかまわないが、子供の前でまでベタベタするのはやめてくれ。世界にいるのは二人だけって顔で見つめあい、べったりキスシーンまで息子に見せ付けて、何がしたいんだよ。

母親も大概がおかしいのに、父親も仕事以外ではイカレてる。

ガチャンツと音を立てて、ティーカップを叩き置いて立ち上がり、俺が部屋を出ようと使用人にドアを開けさせたところで、父親が声をかけてきた。

「ミカエル、話があるのだが」

だったら、ラブシーンをやってる前にさっさと見えよ。

「後にして下さい。忙しいんで」

その二日後、薔薇園まで父親の侍従に呼び出された時も、父親と母親は東屋でイチヤイチャしていた。

薔薇園と聞いたときから、そうだろうと疑いはしなかったが、予想通りでも気分が悪すぎる。

息子の前で服を脱ぎ始めるまではしないとしても、どうしてここまでおめでたい夫婦なのか。叶うものなら絶縁したいと願ったことは、数知れない。

生活やカリキュラムには黙々と従い、多大な期待と重圧感に追われ朝から晩まで勉強漬け、学習では教授たちが絶賛する結果を出しても、嬉しいと感じたことは一度もなかった。

一流と言われる大人たちから一対一で学んでいる以上、結果を出すのは当然だと、自分に課してもいた。

そんな鬱屈した精神状態で始終悶々とイラついている息子のことなど、彼らは興味がないのだと、割り切って思うようにしていた。

「お話はなんですか」

出来る限り冷たく、ぶっきらぼうに声を上げると、二人は同時に俺を見やった。「あら、いたの?」そんな感じで。

呼び出すなら呼び出すで、親らしい態度で迎えるよ。

憤懣やるかたなく、むっつりと二人を見据える俺へ父親が言った言葉に、最初、耳を疑った。

「十月からケンブリッジ大学に行くように」

「……どういことですか？」

「申請許可が降りたんだ。おまえの成績なら大歓迎だそうだが、ミカエル。よかったな」

……よかったな？

それは誰にとってよかった話なのか、説明してくれ。

「中枢の者が、大学に早期入学するのはよくありますが、俺の年齢では聞いたことはありません」

「おまえの片腕としてここで教育を受けているダンジズも、同じカレッジに入学する」

「ダンジズは十一歳でしょう」

「変わらないだろう」

「変わらないなら俺も十一になってからでお願いします」

なんで十歳近く年齢の離れた集団の中で、勉強しなきゃならない

んだよ。

「早ければ早いほど箔が付く。それにおまえは早めに外に出たほうがいい」

グレースを膝に抱きながら、父親はいつになく真剣な眼差を向けてきた。父親らしい顔というべきか。

「箔を付ける目的でこれまで学んできたわけじゃありません。俺を早々に追い出したいということですか」

「爆発されては困る」

眉を顰めて父親を睨んだ。

端的にでも、そう言い切り指摘をしてくるのは、知らぬ存ぜぬのめでたいふりを装いながら、息子のことを充分把握しているという意味だ。

グレースが咎める視線を夫に向け、そこ降りて俺のそばまで近づいてくると、膝を折って屈みこんだ。

「外で学ばせたほうがいいと言うローデリオンの考えには、私も賛

成しています」

春を謳うようないつもの美しい微笑はそこにはなく、苦しげに顔を曇らせる母の様子は、少なからず俺をつらたえさせた。

「母上も、俺を爆弾扱いですか」

「けれど、あなたが行きたくないなら、行かなくてもいいのです。ミカエル」

「前から聞きたかったんですが、あなた方にとって、俺は何なんですか」

「……………息子でありながら、息子でないもの」

答えて、グレースは寂しげな微笑をした。

こんな哀しい顔をする人だとは、知らなかった。

この人は、物憂げに悩む顔を、子供には決して見せずに努めてきただけなのかと思わせられ、後ずさりしたくなる自分がいた。

親の心情を思いやれる余裕などなかったし、人間の複雑さを見せ付けられた気がして、親である相手のどの顔を信頼すればいいのか、その時の俺は混乱の中にのまれていくだけだった。

「先年、身罷られた火司長も、あなたが三つの誕生日を迎える頃には、胸を痛めておいででした。あなたは、火のような子供だと。聖なる火にもなれば、その真逆にもなりえるだろうと……………」

火司長が、俺について……………そんなことを。

聖なる火にもなれば、真逆にも、なりえる……………

「聡明すぎる魂を持って生まれた子供は、大人を苦しめ、その苦しみはいずれ子に向けられ、その子に取り返しのない深い傷を負わせることになる。親や 大人の身勝手な判断で、あの子の火に誤った薪をくべてはならない。浅慮な干渉をすれば、彼は内なる激しい本性を、破滅に向かわせるだろう。」

必要なのは、ただ静かに見守ることだ。知識以外に大人が教えることが何もなく生まれついた気の毒な子供だが、彼はいずれ、先導者として、自分で自分の心の道を見つめる。これから来る動乱の世を統治する者として、それが彼の課題となる。そういう運命にある子だと知りなさい”

……………そうローデリオンも私も、諭 されてきました」

火司長が何を考えてそう言ったのか、俺の何を見ていたのかは、知る術はない。

けれど、あの全てを見通しているような眼差で、何か知っていたのなら、教えて欲しかった。

重圧を背負って生きていかなければならない俺を、支える助言を遺して欲しかったと、切に思った。

「俺は……あなた方を、苦しめる存在でしかないのですか」

「あなたに嘘はつけないので正直に言いますが、どう接していいの
か困惑はあります」

躊躇いながら伸ばされた母親の指先が、俺に触れる前に、そっと握り締められた。

「私が母親だとは信じられないほど、あなたは優れた子供です。ミカエル。母親なのに何もできないことが、歯がゆく、申し訳なく思います」

何もできない？

正気である人は、そう思ってるのだろうか。父親も。

なぜ誰も、俺をただの子供として見てくれないのか。火司長でさえそうだったなんて。

二人の世界に陥りやすい夫婦であるだけで、父や母に疎まれてい
ると思ったことはないが、二人とも俺を大人扱いして一切踏み込ん
でこない。

一族を背負う前に、二人の子供なのに。父は俺を男として扱い、
母は優しさの奥で俺を畏怖している。

跡継ぎも、統治者も、世界も、一族も。俺にはどうでもいい。

どうでもいいと思っても、言葉にすることすら許されていないのは、分かってるけれど。

薔薇園から戻る途中、回廊でブレイズとアティアナに行き会った。俺とはハトコ関係の血筋で、将来の花嫁候補と見なされている二人だ。

ブレイズは七歳、アティはまだ四歳だというのに。何が花嫁候補だと、それすらも怒りが沸いて来る。

自分の顔よりでかいキャンディを、嬉しそうに舐めているアティの、幸せいっぱいの子供らしい表情が目障りだった。

ブレイズも揃って色違いの棒付きキャンディを舐めていて、二人で交換しながら食べている様子は、大人から見れば微笑ましいものだろう。

アティは生まれてすぐに母親を亡くしているが、兄のジュードと父親が、眼に入れても痛くないと言わんばかりに彼女を可愛がっていた。

愛されて、家族に大事にされている子供そのものに見えて、彼女

に非はないのだが、あの頃の俺はアティを見かけると、大抵は意地悪できつい態度を取っていた気がする。

「ミカエルさま、遊びましょ。お馬さんの赤ちゃんが生まれるかもしれないって聞いたの！これからブレイズと見に行くのよ。一緒に行きましょ？」

俺が冷たい態度を示し続けても、アティは屈託がなかった。

素直で元気で拗ねたところがなく、だから大人たちにも好かれ、誰とでも打ち解けられるのだろうと分かってはいても、気に入らないものは気に入らない。

馬には興味があつたが、アティやブレイズと一緒に行きたくはなかった。

「俺は後にする」

「一緒に行きましょ？」

背を向けた俺の、腰の上まで伸びた髪が、断つても大半は一度じや引き下がらないアティに引っ張られた。

じゃれてそうした彼女にカチンときて、しかも飴の糖分でベタベ

夕になった手で触れられたのが許せなくて、思いつ切り手を叩いて振り払った。

「汚い手で触るなよっ！」

なんで同じ一族の人間で、同じ子供なのに、こいつらは気楽そうなんだよ。

怒鳴りつけられたアティが、火がついたように泣き始める。ギャンギャンうるさいのも耳障りで、俺は頬を歪めてアティを睨みつけた。

「アティアナも、わざとしたわけじゃないんです」

ブレイズに言われ、

「誰に向かって言ってるんだ」

居丈高に切り返す。

年下のくせに、ブレイズはいつ見てもこまっしゃくれたガキだった。

「……申し訳ございません」

「馬鹿はこれだから嫌いだ。口を利く価値もない」

当り散らして、部屋に戻った。

後から思えば、ブレイズが中枢の子供の中でも、学力で抜きん出て頭角を現すようになったのは、それからだったと思う。

無口で冷静な彼女なりに感情があり、態度には出さずとも腹立たしかったのだろう。

そのまま自分の部屋に戻ってからも、気持ちはささくれ立ち、むしろしゃくしゃくしていた。

ベタベタベタベタベタベタ、鬱陶しいんだよ。

飴でべた付くこの髪も。あの親たちも。

抑えの利かない憤りは増して行き、ライティングチェストの引き出しからハサミを掴み出した。

苛立つまま、長い金の髪に刃を通す。

「ミカエル様！」

お茶を用意して部屋に入ってきた侍従に騒ぎ立てられ、切り落とした髪ごと、ハサミを床に叩きつけた。ゴミ同然になった金色のそれを、足で踏みつける。

「髪ぐらい好きにさせるよ！」

たったこれだけの、抵抗しかできない。

俺が我儘を言えば、周りに迷惑がかかる。

体が弱い母親にも心配をかけて、煩わせたくない。

喘息持ちの弟の分も、俺が頑張らなきゃいけない。弟に負担はかけられない。

何をどう頑張ればいいのか、何の為に頑張らなければならないのか、自分じゃ何一つ納得できていないのに。

「一人にしてくれないか」

……………なんでこんなに、苦しいんだ。

何がこんなに、俺を苦しめてるんだ。

なんで誰も、助けてくれないんだよ。

頭を何度もかきむしると、片側だけ短くなった髪が、心もとなく指を滑っていた。

髪を短くしたことがなかったので、その軽さは新鮮でもあり、不安を強める感触にもなっていた。

髪の手入れを任せている使用人がやってきて、息をのんだ声を詰まらせ、「失礼します」と断りを入れてから、髪を切り揃えていく。身軽になった頭は、当分の間、クイーンパレス内でも話題にされ続けるだろう。

……………こんなことで、くだらない。

なんでこんなくくだらない場所で、生きてるんだ。俺は。

その日、夕食の前にグランマの私室に呼ばれた。侍従から何かを聞いたのだと思う。

部屋に赴いても、グランマは、俺の髪について触れなかった。

「チェスをしましょう。相手をしてちょうだい」

にこりもしない祖母でも、愛情がないと感じたことはない。

甘えられる人ではなく、優しさが見えにくい態度が身に付いた人だが、嫡男として厳しく接しながらもさり気なく俺を気遣ってくれる。

「またわざと負けてくれるんでしょう?」

むくれて言うと、

「わざとそうしたことはありませんよ。勝ち負けに拘らず、ゲームを楽しむのです。どんな勝負になろうとそれはゲームの自由ですからね」

ボードに駒を並べながら、グランマに返される。

「ゲームの自由?」

「ゲームの神様にお任せするのです」

テーブルには、チェスボードの他にバカラの器に盛られたマシユマロがあつた。直火で焼かずに食べるフルーツゼリー入りのそれは、俺のお気に入りのお菓子で、祖母の部屋を訪ねると決まって用意されていた。

子供扱いされたいのに、いざそうされると「お菓子で騙されるよ
うな子供じゃない」と反発したくなる我儘を、甘いマシユマロと一緒に口の中で転がせる祖母と過ごす時間が、俺は好きだった。

両親や祖父と同様に、忙しく諸外国を飛び回っている人だから頻繁には会えなくても、ほんの僅かな時間でも俺を子供でいさせてくれるのは、昔から祖母だけだ。

それでも、こんなささやかなひとときさえ、もう過ごせなくなるのかもしれない。

ケンブリッジ大学に行くには、ここからでは通えない。向こうに住んで休暇で戻っても、祖母とタイミング良く会えるかは分からない。

「父上が、大学に行けって言っただ」

呟いた俺に、グランマが次の一手を思案しながら静かに答える。

「ローデリオンにはローデリオンの考えがあつてのことでしょう。私は親ではなく、あなたの教育に責任はありませんから、ローデリオンやグレースが決めることに口は挟めません。ですが」

「……ですか？」

「私のチェスの相手がいなくなるのは、困りますね」

「冗談とも本気ともつかない真顔で言うので、こっちが苦笑してしまふ。」

祖母はそれを優しい目で受け止めてから、「さて」と呟いた。

「どう攻めてきますか、ミカエル。お菓子ばかり食べてないで、そろそろやる気を出してちょうだい」

最後は負けてくれることが多くても、グランマのゲームの仕方は容赦がない。

「チェスはビジネスと同じです。ビジネスはゲームでもあります。真剣に楽しめばいいのですよ。より真剣に楽しんだほうに、神様も楽しんで笑顔を向けてくださるのです」

「ビジネスは責任がかかっているんだから、楽しむなんて絶対無理だよ。失敗したら沢山の人が路頭に迷うんだよ」

言い返すと、

「あなたのその根の真面目さが、私は気がかりです。ミカエル」
グランマが溜息混じりに応えながら、ポーンを弾いた。

「気がかりですって言いながら、俺の駒を持ってかないですよ」

「このゲームは、私のほうが楽しんでますからね。そういうことです」

子供相手に手加減がなく、身も蓋もないことまで言う祖母に、俺は向かって腹を立てながらゲームを進めた。結局その日のチェスは、祖母に勝ちを譲るしかなかった。

ミカエルの憂鬱 6 (後書き)

すみませんが、次回の月曜更新はお休みするかもしれません。 (

)

また、感想欄を閉じているときは、更新時以外はネット落ちしている日が多く、

メールの返信ができないこともあります。

現在、返信は一ヶ月以上お待ちして頂いてるので、
申し訳ございませんがご了承下さい。

大学に通ってから、生活は一変したわけではない。
場所が変わり、学習が個人から集団になっただけだった。

ケンブリッジ市内にあるスマクラグドスの別邸でも、満月と新月の日、日曜日の午前中は、務めとして祭祀を行う。学業よりも何よりも優先されるのが祭祀で、体調が悪い時もよほどじゃない限り休むことは出来ない決まりだった。

ロンドンから北へ約八十kmに位置するケンブリッジシャーの州都ケンブリッジ市は、十三世紀に創立されたケンブリッジ大学が所在する学園都市として知られ、イギリスで最も美しい街と言われている。

古くから国の重鎮地としてあり、街全体が文化遺産のような落ち着いた着きを醸しながら、近年はハイテク産業の中心地にもなっていた。

ケンブリッジ大学のシステムは非常に複雑で、それはオックスフォードも同様らしいが、複数のカレッジ制であり、学部での講義の他にそれぞれのカレッジ特有の教育指導が行われている。

街中にカレッジが点在し、それらを総称でケンブリッジ大学と呼ぶ。

人気や成績、経済力もカレッジによって異なり、歴史の古い所ほど入試の競争率も高い。

三十一あるカレッジの一つ、トリニティ・カレッジに所属しても、寮生活はしなかった。

殆どの学生がカレッジ内の寮に住む中で、特例措置が多く年齢も低い俺が明らかに浮いていたのは仕方がない。

だが、十一歳のダンジズも同じカレッジにいたので、俺だけが場違いではないことに幾分安堵もあった。

カレッジからは学生一人一人に付けられるスーパーバイザーがいて、俺にはスマクラグドス一族の者が選任されていた。

大学院博士課程一年、二十歳のトニ・スマクラグドスは気さくで面倒見が良く、「勉強は僕が指導して欲しいくらいです」と笑って言い、俺に変に気兼ねして接することがない、付き合いやすい人間だった。

卒業するまでの二年間、指導教員というより、他のとの橋渡しや学生生活が円滑になるような世話係を、誠実に引き受けてくれた。

カレッジを主席で卒業できたのも、周囲と軋轢が生じて煩わしい問題が起こらないよう、彼が細やかな気遣いを絶やさず配慮してくれていたからだろうと思っている。

中枢の者ではなかったが、数年後、俺は彼を自分の秘書の一人に抜擢した。

最初は辞退したトニも、今ではダンジズに劣らず側近としてよく働いてくれている。

入学したばかりの頃、トニは「少しは観光もしましょう」と、他のカレッジや市内をあちこち案内してくれた。

ケンブリッジ最古の建築物のセント・ベネット教会や、二番目に古く珍しい円形の教会としても有名なラウンド教会など名所を見て周り、市内に流れるケム川をパント（平底舟）でパンティングまでさせられた。

春夏は川の両岸に花が咲き乱れ、しな垂れる柳の枝の緑も美しく、長い棹を使って小船を漕ぐ川下りに興じるのがここでは風物詩になっていた。

冬以外の風光明媚な景色は、素晴らしいと思う。

けれど、とにかく食事が不味い。街でも大学の敷地内でも食べれなもんじゃない。

無難に味わえるのは、紅茶とスコーンくらいだ。

格式にうるさいカレッジの食堂でさえそうだった。日々のランチやディナーはもとより、毎週火曜日と金曜日は黒いガウンで正装する公式晩餐会があるのだが、肝心のフルコースメニューは貧相なところの上ない。

肉はガチガチでパサパサ、サラダ扱いのライスは水分でベシヤベシヤ。海に囲まれた島国で新鮮な魚介類が手に入るお国柄なのに、出される魚は決まって燻製にされている。

いじらないで普通に調理すればいいのに、英国人という人種は、なぜここまで食材を台無しに出来る才能があるのか、食事の度に首を傾げたのは俺だけではなかった。

閉口したダンジズと、「家で以外まともな食べ物にありつけない」とランチになると愚痴りあい、こんなところで寮生活なんかしたら、三カ月後にはミイラになると囁きあう。

ト二は、「すぐに慣れますよ」などと笑っていたが、これに慣れたら人として終わるのではないかとまで思わされた。

「イギリス人が七つの海を制覇できたのは味盲だったから」とは真実だろう。食に拘りがないのだ。

それまで、イギリスに暮らしながら、食事は殆どがクイーンパレスか専属シェフの料理で、外の食事のひどさを身に染みて知ることにはなかった。

経験は大切だと、食を通して洗礼を受けたとも言える。

常にSPを連れて歩く子供の俺に、話しかける人間は余りいない。大学生活は、楽しくもなければ辛くもなかった。スマクラグドスの別邸と大学を往復し、勉強をする、それだけの日々。

専攻は自由にしていいと父に言われ、化学を選んだ。

経済を含めて、紙と鉛筆で事足りる学問は家でのカリキュラムで一通り修めてきたし、これからも自分で続けられるので、違うことに取り組んでみたかった。

後に医学を学ぶことは決められていたから、医学に活用できるフィールドのもの、生命倫理に囚われない、人間を物質的観点から追究できる学問をライフワークにしようと考えていた。肉体を知ることとも医療の研究も、生命の尊厳を損なわないレベルから携わったほうが限界がない。

入学当初から、俺がスマクラグドス一族、財閥総帥の息子だとは知れ渡っていたから、誰もが関わるのを恐れて遠巻きにしていた。

関心を強く持たれているのは伝わってきたが、人脈にしようにも俺の年齢が幼なすぎて、近づく方法も見出せなかったのだろう。

会話をするのは、ダンジズとトニと教授だけで不足はなかった。他人の寄り集まった中で知る孤独は、一族に守られて気を遣われていた状況よりも気楽な分、悪くないとも感じた。強がりはあるも、病気をして寝込む時以外、寂しいと感じる時間もなかった。

普段見ないふりで過ごしているから余計だろうか、寝込んでベッドで過ごす、必ずといっていいほど、寂しさや恐怖でうなされていたけれど。

どこまでも続くパレスの中を、誰かを探して歩く。

夢の世界で昼を過ごし夜を迎えても、その世界での登場人物は自分だけ。

誰かを探しても見つからない。いるはずなのに、見つけたいのに、誰もいない。

皆が俺を、必要だと言う。あなたは大切な人だと言う。

では、なぜ、誰も俺を見つけてくれないのか。誰もつかまえてくれないのか。

抱きしめて、愛してると言ってくれないのか。

床から、沢山の手が伸びてくる。何千、何万の無数の手。助けてくれと求める手。

自分の足音と助けを呼ぶ声だけが響いていた世界に、四方からの悲鳴が津波になって襲い来る。

逃げようとする俺の足元を掴んで、離さなくなる。

違う。 こんなんじゃない。こんなふうに求めないでくれ。

目を開くと……涙が零れていた。この夢を見ると、必ず自分の悲鳴で目を覚ます。

俺は、一人じゃないはずだ。父も母も弟も、祖父母もいる。ダンジズもいるし、大学で出会ったトニだっている。

……俺は、何を望んでいるのだろう。

誰もが称賛する尊い地位。誰もが羨む贅沢な暮らし、有り余る富。

これ以上を望むのは、我儘でしかないと……分かっているのに。

十三を迎えた年は、最悪から始まった。

誕生日を迎えて間も無く、「精神修業と緊急に備えて自力で生き抜く力」を鍛える為に、GPSと生命確認チップのみを付けられて、ひと月の間アマゾンの奥地へ放られたのだ。

食料も一人で探さなければならず、ヘビやカエルを焼いて食べて生き延びたあの経験は、自分で衣服のボタンを留めることすらさせてもらえない境遇で育った人間には、それまでの環境さえ全否定したくなるサバイバルだった。

突きつける決まり事が極端すぎ、半端じゃなさすぎて、「どこまで人を振り回せば気が済むんだ！」と何万回罵倒したかしれやしない。

これはラマイエ聖族と呼ばれる中枢の、スマクラグドスの高位の男なら誰でも経験させられる通過儀礼で、人によっては山奥や無人島に送られることもあり、大不評極まりない悪習である。

神殿の真つ暗な石室に九日間置かれる総帥の息子限定の儀式とい、この一族の先祖たちは本当にロクな事を考えない。

脈々と受け継がれている血にはドロドロとしたサディスティックな精神が息づき、それによって子孫を支配し続けているのだろう。

シヤラと出会ったのは、その年のことだった。

後々、俺とシヤラはお互いに一目惚れで付き合い始めたとか、そんな話の類も耳にしたが、それは違う。

ゲームをするための男女一組になるクジ引きで、男性陣の一番人気のシヤラを俺が引き当てたのがきっかけだった。

それは三月の終わり、復活祭を間近にして開かれたパーティの場でのこと。この時期のヨーロッパの各都市はどこも混雑しているのが普通で、パリも観光客で溢れ返っていた。

乗っているベンツが渋滞に巻き込まれ、予定時刻を大幅に過ぎて会場のドルバック邸に着いた時にはすでにうんざりしていて、顔を出さないで帰ろうかとすら思っていた。

お茶だけ飲んでさっさと退散しようと思っていたところに、今度は「復活祭のゲームをするから帰らないで！ 男女十五人づつで頭数がピッタリなのよ！」などと足止めを食らった俺は、不機嫌なまま集団の輪を観察した。

十代から二十代前半の、若い男女のグループだけで三十人ほど集まったそこに、一際注目を浴びてちやほやされている女性がいて、それがシヤラだった。

顔立ちの華やかさを、淡い緑の瞳と向日葵色のくるくるとした長い癖毛が引き立てている。

フリージア色の、人によってはけばけばしくなる派手な黄色のカクテルドレスを品良く爽やかに着こなして、彼女自身が香り立つフ

リージアの花に見えるような存在感を放っていた。

大人びて見えるがまだ少女らしさもある彼女を狙って、我先にと話しかける男共一人一人に、彼女は彼らを勘違いさせるだろう垣根のない笑顔を振りまいていた。

シヤラ・オブライエン。

シヤラの名にもオブライエンの姓にも憶えはあったが、フルネームでの心当たりはなく、まさか彼女が双子の妹だとは思いつかなかった。

俺にとって、二度三度耳にした程度の双子の片割れの存在は他人よりも遠く、その名と妹がすぐに結びつくことはなかったし、ダンジズの母の家系にオブライエンの姓があったことも思い出しもなかった。珍しくない名字だったのもあると思う。

その頃、ヨーロッパの方々に開かれる表向きにならない社交パーティや茶話会に俺は度々顔を出していた。父親からの指示で隠密に調べている事があり、身を隠して、表沙汰になりにくい情報の収集をするのが目的だった。

十三になれば、方々の名家や資産家の子息令嬢も社交界デビューを果たし、大人のパーティに参加するのも容認される。アルコールや煙草、葉巻の類に手を出さない規則を守り、深夜まで続く集まりでなければ、未成年でもある程度は出入りが自由だった。

正式な場以外では、俺はアレックス・ティンと名乗っていた。

長い金髪も瞳の色も目立つので、黒いウィッグと同様に黒のカラ
ーコンタクトで変装して出歩くのは気晴らしにもなり、パーティは
好きじゃなくても自分じゃないふりをして人と接するのはスリルも
あり面白い。

アレックスは本名のミドルネームのアレキサンダーから、姓はイ
ギリスの名門ティン公爵家から許可を得て使用していた。

身元が不明では胡散臭がられるため、「ティン家の親戚」で通せ
ば都合がよかったのだ。

一族の外でもミカエルと連呼されるのは嫌気がさしていて、大学
生活ではアレックスを通り名で使い、そう呼ばれるのにも慣れてい
た。

自分の名であるのに変わりはないとの思いから、シヤラと付き合
い始めても訂正はしなかった。姓はいつかは明かそうと考えていた
が、社交界デビューをしていればスマクラグドスの名を知らない人
間はいないだろうと思うと気が重く、話しそびれるまま過ごしてい
た。

家のことなどどうでもいい気持ちもあったし、恋が暗くなる隔て
を二人の間に置くことを避けたくもあった。

「アレックス。あの彼女見たかい？」

舞い上がった足取りと口調でやってきた男共の一人に、「どの彼女のことですか？」と切り返してやるうかと冷やかな目を送りながら、「あの彼女ですね。見ましたよ」と適当に頷く。

「おいおい、随分と冷静だな。あんな美少女見たことないって、皆大騒ぎしているのに。十三とは思えない容姿と落ち着き方をした美少年だって、君も評判にはなっってはいるけどね。ああ、彼女も君と同じ年らしいよ」

同じ年ね。そんな小娘に、十八やら二十五やらの男が群がるのも、どうかと思うが。

「綺麗だとは思いますが、他人の美醜にあまり興味がないんです」

それは多分、両親が容姿で騒がれすぎて辟易しているせいもある。

淡々と答えると、三十分前に、フィリップと自己紹介していた五歳年上の彼は、興奮めした顔で俺を上から下まで眺め回した。

「そりゃ、君ならね。毎日鏡で自分のその姿を見ていれば、女性の美に関心は持てなくなるかもしれないね。その髪も瞳も魅力的だし」

髪も瞳もフェイクだと内心で嘲笑い、俺と背の変わらないフィリップを見やった。

「先日も人に言われました。そんなにナルシストに見えますか？」

「いや。なんていうか、つかみ所がないっていうかね」

如才なく笑いながら視線は再び「あの彼女」を追い始めた彼が、自分とは違う生き物に思えてくる。

どこのパーティーでもそうだが、なぜ男は、女の容姿に異常な好奇心を寄せるのだろうか。

女から離れて男のグループになるとすぐに、あれが綺麗だのこっちが色っぽいだの、胸が大きいだの足が細いだの、果てには処女か非処女か、経験は何人くらいありそうだと推測し始める。

大抵の場では俺が最年少だからなのか、結婚相手が血族婚で定められている環境で女を自分から切り離して見ているからなのかは分からないが、周りの男が騒ぐような興味を持ってない俺は、この手の話題には白けてしまう。

「声をかけてきたら如何ですか。こっちはお気遣いなく。のんびりコーヒーを頂いています」

輪から離れて一人でいた俺を、彼は気に止めて話しかけてきたのだろう。彼女のほうへ行くよう水を向けたとき、彼が俺の腕を掴んだ。

「辛気臭いこと言うなよ。ゲームが始まる。一緒に楽しもう！ 卵探しならぬチョコレート探しゲームだ」

お節介はやめてくれ、と口から漏れかけたのを噛み殺す。

チョコ探しゲームだって？ 子供がやるお遊びだろ。

勧められるまま嫌々クジを引いて、カードを見れば、優雅な筆記体で名前が書かれていた シャラ・オブライエン。

「何のクジです？」

引いてからフィリップにカードを差し出せば、彼の顔が引き攣っている。

「男女ペアになって、イースターチョコを探すんだよ」

……………なるほどね。

「譲りましょうか？」

尋ねると、フィリップは哀しそうに首を振った。その顔には、今しがた俺を強引に誘った後悔がありありと滲んでいる。

「ルール違反だからね」

復活祭では、英語ではイースターエッグ、仏語ではブリコラージュと呼ばれるものを隠し合って、探して集めるイベントがあるのが一般的だ。

キリストの復活に準えて、生命の象徴として用いられる卵を、めんどり、ウサギ、魚の形などのチョコレートに変えて探すのも、フランスでは流行っているらしい。

そして俺は、悪趣味な遊びに参加する羽目になり、うんざりしていた。

このゲームは、卵だのチョコだのを探すのが本来の目的ではない。

ペアになった二人が探し物をする名目で物陰に消えていける合法的手段、出会ったばかりの男女に刺激的な時間を提供する、というものだ。

……………面倒くさい。

何人かの女性から、

「アレックス様がよかったわ」

と小声で囁かれるのを聞き流して、俺はシャラ・オブライエンへと視線を向けた。

ゲームのパートナーへと近づいてくる彼女と、無表情でそれを迎える俺を、男性陣が恨めしそうに眺めている。

「あなたが、私のカードを引いてくれた方？」

「アレックス・ティンです」

「はじめまして。シャラ・オブライエンです。どうぞ宜しく」

差し出された手に、軽く握手を返す。

令嬢らしい、白く細い指にも興味は湧かなかったが、誰かの声に似ていると気を引かれた。

その時、その直感をもっと追究すればよかったのかもれない。双子だと分かってから、母の声に似ていたのだと気づかされた。

夢見るような淡い緑の瞳も、小首を傾げて人を見る癖も、黙っていれば人形そのものなのに笑うと臆面もなく白い歯を覗かせる気取りのない笑顔も、母と似ているのに。どことなく懐かしい、そう思っただけで、直感を置き去りにしてしまっていた。

「では、どこから探しましょうか」

事務的に言い、さっさと部屋を出ようとする俺に、彼女が目をしばたかせる。

執拗に絡んでくる男たちに慣れているから、自分に無関心な態度を取られたのが意外だとも言いたげに。

「どの辺りに隠してあるのか、見当もつきませんの」

「庭を含めて屋敷全体にありますが」

「庭を含めて屋敷全体？ けっこうな部屋数がありますよね？」

驚きの声を上げるシャラに、七十位ではと答えると、彼女は瞳をぐるりと回して息を吐く。

「十五ペアだから、そんなに大変でもないのかしら。制限時間は言っていました?」

「制限時間はありませんよ」

「え?」

どうやら彼女は、このゲームの趣旨を理解していないらしい。

玄関近くのゲストが待機する応接間、暖炉やソファやクッションの下、花瓶の中、カーテンのドレープの内側から、ラッピングされたチヨコレートを見つけて、前もって渡されていた籠にそれを入れる。

「けっこう簡単に見つかるのね」

いたずらじみたお遊びに瞳を輝かせている彼女へ、誰もクソ真面目に探してなんかいるもんかとは言わずに、俺は無言のままイースターチヨコを探す。

一刻も早く帰りたい、後三十分探して籠いっぱいに見つけたら、それを彼女に渡して退散するつもりでいた。

次に入った部屋は図書室らしき所で、ドアを開けてすぐに俺は立ち止まる。

見覚えのある男女、さつきグループ内に見かけた二人が、濃厚なキスシーンの真っ最中だった。

失礼、と呟きドアを閉める。

「ここはやめたほうがいい」

まだ廊下において目撃していなかったシャラにそう告げて、隣りの部屋へ向かう。

そこは？製を展示する間になっていた。

慎重に様子を窺ってから中に入ろうとした俺は、シャラのほうへ腕を伸ばし、進もうとした彼女を制止する。

熊や虎の物陰に紛れて、やはり見たことがある男女が忙しく服を脱ぎながら抱き合っていた。

………よくやるよ。しかもこんな、趣味の悪い剥製に囲まれた所で、なぜそこまで盛り上げられるんだか。

できるだけ静かにドアを閉めた俺に、鈍くはないらしい頭で事情を察していたシャラが囁いた。

「みんなちゃんと、チョコレートを探しているのかしら？」

「目的は最初からチョコじゃない。俺たちだけが最年少のペアみたいだし、真面目に探そうとしているのも多分俺たちだけでしょ」

「私、こういうパーティってまだ馴染みがないのだけど、こういう

ものなの？」

「「じついう場合もある」

「……組んだのがあなたで、よかったわ」

全身で溜息をつく彼女を横目に、一応は訂正を試みておく。

「ゲームのルールとして、同意を得て進んでいるはずですよ。誰と組んでも、君にその気がないなら同意をしなければいいだけの話では」

「そうは言っても、二人きりになって迫られるのは怖いわ。本当にあなたが相手で一安心よ。私にまったく関心がないみたいだから」

「他の男はみな、飢えた目であなたを見ていたと？」

「飢えているかどうかは分からないけれど、どなたも熱心に話しかけてくださって、困っていたの」

困っていたわりには、四方八方にそつのない愛想笑いを振りまいていたようだ。男に誤解を招かせる態度を自分で取っておきながら、何を言ってるんだか。

「自意識過剰」

呆れて毒舌を吐いた俺に、シヤラは目を見開いて押し黙ってから、おもむろに、そして実に可憐に微笑した。

「そうかもしれないわね」

粘ってゲームをしたがったシャラに「あなた、私のパートナーでしよう」と引きずられ、結局二時間もチョコ探しをさせられた。

その頃には、男女のお遊びに満足したらしいペアもぞろぞろとメインルームに戻ってきていて、俺たちの籠から溢れたラッピングの山に「いったい何をやってたのか」と大笑いしていた。

何をやってたのかって、ゲームはゲームだろうと無然として、もうこれでいいだろうと帰宅しかけた時、シャラに呼び止められる。

「今日はありがとう。とっっても楽しかったわ」

「こちらこそ」

こっちは時間を無駄にただけだとうんざりしながら応える俺に、彼女が囁く。

「私ね、アレックス。言われっぱなしって、好きじゃないの」

その直後よろめいたふりをして、皆の前でシャラが突然、俺へと

抱きついてきた。

周囲から歓声が沸き起こる中、いらすらっばく微笑んでこちらを見上げている。

「女の子に自意識過剰なんて、言わないほうがいいわ。失礼よ」

「根に持ってたんだ？」

「だから、さっさと帰りたいそうあなたを、嫌がらせで引き止めたのよ」

おくびにも出さずに腹を立てていた彼女に、面白い性格の女だと一瞥をくれて、ドルバック邸を後にした。

いつもにも増してつまらないパーティだったが、一風変わった少女とのやり取りが、それまでの俺の不機嫌を宥めて、「こんな日も悪くない」くらいに思わせた。

パリ郊外にあるスマクラグドスの別邸に、そろそろ着こうという頃になって、自分から甘い匂いが漂ってくるのが気になった。

何かを付けたのだろうかと思回しながら、上着のポケットに手を入れてみる。

「!?!」

ぬるりとしたものに触れて、ギョツとした。

そこには、むき出しにされたチョコレートが入っていた。元は手のひら大の魚の形をしていた物が、丁寧に割られていくつか突っ込まれていたのだ。

体温と衣服で溶けて、右手にベツトリとついた茶色の粘着物を、まじまじと見やる。

抱きついてきたのは……これだったのか。

……………マジかよ。あの女。

思わぬ状況に、怒りよりも笑いが込み上げてくる。

“言われっぱなしって、好きじゃないの”

よくやるよ。ったく。

また会うかもしれないし、二度と会わないかもしれない彼女の、茶目つ気たつぷりな瞳を思い浮かべて、一人首を振りながら苦笑いが止まらなくなっていた。

ミカエルの憂鬱 7 (後書き)

来週は更新を予定しています。

関係ないですけど、先週、「光より速い素粒子ニュートリノ」の二
ユースを読んで、

ということは、過去に行けるってことになるのかな？とぼんやり考
えました。

近年は、タイムスリップができて過去には行けない、が定説にな
っていたので、

これがホントに計算ミスでなければ、いろいろ定説が覆りますよね。
ロマンだけど、大変な学者さんもおられるだろうなあ。。 (苦笑)

数日後、春らしい陽気に誘われ、時間を作って気晴らしに街へ出かけた。

モンマルトルの丘まで出向いて、パリ市街を見渡す。

長い坂道と階段を登って、パリの街を展望できるこの丘は、有数の観光地でありながら治安がいいと言いが、有名無名の芸術家の集う場所でもあり、前衛的な刺激と古典を踏襲する精神の母性が抱き合い、パリらしい洗練された倦怠と猥雑な退廃の匂いが漂う。嗅覚ではなく、肌が感じる匂いだ。

もっとも人間らしい混沌と感動の生を産み出す先端でありながら、輝きを混沌の中に呑みこみ墮落させ生を奪う矛盾した力が、街のそこかしこでカフェテラスでカフェオレをすする顔でまどろんでいる。

生活臭の濃い雑多な所は苦手なのに、なぜかこの雑感と丘の上からの展望が好きで、パリに來るとよく散歩をしに來ていた。勿論、私服のSPは付かず離れず傍にいるが、十数年の習慣であればもはや空気といえる存在だ。

一人でいるのと変わらない身軽さで、入り組んだ路地を散策し、街を眺める。

ここに來るといつも思う。

D'ou? venons-nous? Que s
ommes-nous? O? allons-nous?

我々はどこから来たのか 我々は何者が 我々はどこへ行くのか。

フランス生まれの画家、ポール・ゴーギャンが、絵に託して残した言葉。

彼が生まれた街であることと、パリの匂いが、その思いの欲求を深くする。

彼の代表作のタイトルであり、アメリカのボストン美術館に展示されたその絵に惹かれて、渡米するについでに何度か足を運んでいった。

一族の嫡男として生まれ、帝王学を始めあらゆる教育を受け、一族のために努力しなければならぬと自分が出来得る限りでこなしながら、俺の心は絶えず空虚だった。

多くの事を学んでも、魂の内奥までは届かず、自分の中が蕭然として不安に駆られていた。

ゴーギャンのその絵に出会ったのは、九歳の時。大学進学を控えた夏。

行くのか
自分はどこから来たのか 自分は何者か 自分はどこへ

漠然と感じていた疑問が、目の前に言葉と色彩になって晒され、その絵の前で動けなくなった。

彼は、この画家は、答えを知っていたのだろうか。

教えて欲しいと思った。

昔、神殿で、夕陽を見つめながら火司長が話してくれたように。

答えを持っていなくても、俺と話をしたいと思った。

俺の心の空洞を、彼の思惟で、言葉で、埋めたいと思った。

横長のキャンバスに右から左へ人の一生が現わされ、暗い色調で重いテーマを描きながら、見る者を引き込む、壮絶な美しさ。

けれど、その絵を見せられただけでは不安は晴れず、迷いは深くなり、絵の生々しい息遣いが人肌のように温かくて、幼い俺を一層孤独にさせた。

抱きしめて欲しいとまでは、望まない。

誰かに、自分を導いて欲しいと、我儘な子供になって訴えたかった。

どこへ行くかも知らない自分が、どうやって、一族を、数多の人々を導いていけばいいのか。

頑張らなくてはいけないと勉強はしても、何をどう頑張り続けられるのか、常に焦燥感に駆られていた。

こんな自分じゃ駄目なんだと、誰かに分かって欲しかった。

俺は、先頭になんか、立てない。立ちたくない。

俺の迷いが、多くの人々を、迷わせてしまう。

どうしても、生まれた立場から逃げられないのなら。

一刻も早く、答えが欲しかった。

その他大勢の人々のためにじゃない。

空洞の奥で渦巻く不安の間を、自分の心を、安心させたかった。

自分が進むための、確固とした道標を、求めていた。

不安で泣きたくても、泣けない子供が、大勢の人間を幸せに導く大人になれるのか。

自分でもおかしと思うのに、なぜ周りの大人は、俺をおかしいと思わないのだろう。

あのとき、九歳だった自分が、あの絵の前で泣き叫びたいほど知らされた思い。

泣きたくても涙さえ出なかった虚ろな孤独を、十三になったその時も俺は抱えていた。

大人に混じり、大学を卒業し、その間に暗い感情を見ないふりで、跡継ぎの人間として擬態することが得意になったただだった。

街並みを俯瞰するテルトル広場で、ゴーギャンの絵と自分を重ねて佇んでいたとき、思いがけない顔をそこに見つけた。

「あなた……アレックス・ティン？」

目があつてすぐに言い当ててきたシャラ・オブライエンに、今日は変装をしていないはずだと自分の長い髪に目をやってから、驚きを隠せずに訊き返した。

「なぜ分かった？」

「……………そうね……………、言われてみれば、なぜかしら？ 自分でも分からないわ。それカツラ？」

「この前がカツラ」

「へええ。綺麗な金髪をしてるのね。男なのに長いのはなぜ？」

「趣味」

一度短くした髪を伸ばし始めていた大学の時も、訊かれるたびにそう答えてかわしてきた。家がどのといちいち説明するのも面倒だった。

「この間は、チョコをどうも」

「どういたしまして。おいしかった？」

「とてもおいしかった。忘れられないくらいにね」

皮肉で返して、先日とはがらりと雰囲気の違いデニム姿の彼女に目をやる。その辺の人間と変わらない軽装でも、人目を引く少女だ。

あのパーティーから一週間が経ち、彼女の存在も忘れかけていたが、まさか再会するとは夢にも思わなかった。しかもこんな所で。

「深窓のご令嬢が、ここに一人で？」

モンマルトルの丘の麓には風俗街もあり、地区によっては一人歩きには危険な地域もある。

「SPがいるわ」

「そりゃあSPがいなければ、今頃、人身売買の餌食にされてる」

「今日はまったく敬語じゃないのね」

「敬語を使う人間は選ぶことにしているので」

「怒ってるのね？」

にこやかに訊ねる彼女を、突き放して見やる。

「怒る気にもならない。くだらなすぎて」

「あなたって……優しいところもあるのに、口が辛辣なのはもったいないわ」

「優しい？ 言われたたくもないし、興味もない」

「下世話なラブシーンを見せないようにしたり、私の勝手に付き合つて二時間もチョコ探しをしてくれたり」

「それは優しさじゃなくてただの礼儀」

最近知ったことだが、単なる礼儀を自分への優しさや好意だと誤解する女が多すぎる。

誤解した拳句に個人的に干渉して来ようとするのが鬱陶しくて、俺のパーティー嫌いの理由はそれもあつた。

「私、もう少しここにいるつもりなんだけど、あなたは？」

「適当にづるついで帰る。では、これで」

なぜか、嫌な予感がする。

これ以上、この少女に関わらないほうがいい。警告に似た予感。

「怒る気にもならないって言いながら、怒ってるじゃない」

自分のした悪戯が成功した満足からか、楽しそうに笑っている。

その笑い声すら耳について、顔を背けた。

怒りではなく、彼女と再会した時から、胸がざわついて落ち着かない。

「もう少し、話し相手になるつもりはない？」

「他を当たれよ」

「私、今日の午後は暇なの。これからオルセー美術館に行くつもりなんだけど、あなたもお暇ならどうかしら」

「オルセー美術館？」

「ゴーギャンの絵を観にね。好きなんだけどなかなか行けなくて、今日が初めてなのよ。パリの一人歩きも慣れないし、迷惑じゃなければ案内して欲しいの」

迷惑だ。

言おうとして、ゴーギャンの名に気を取られて彼女を見つめた。

「ボストン美術館にある、ゴーギャンの絵を観たことある？」

自分の思考と重なる問いに、まさか、と、心臓が強く跳ね打つ。

「D - o o ? v e n n o n s - n o u s ? Q u e s s o m m e
s - n o u s ? O ? a l l o n s - n o u s ?」

我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ
行くのか。

流暢なイントネーションのフランス語が、体が水を吸うように染

み込んでくる。

「二年前に一度観たことがあるの。パリに来てここに足を伸ばすと、その絵を思い出すのよ」

……俺と同じことを、思っている……

「俺も今、思い出していた。その絵のことを」

「……………そうなの？」

シヤラの顔から、それまでの笑みが消えていく。驚きと、何かを恐れるような感情で、俺を見る眼差を瞠目させながら。

ただの偶然なのか。

近くにいる人間と、心と心がシンクロを引き起こした現象なのか。

それとも、この少女と俺の感性が似ているのか。

どちらにしても。

運命を感じるなというほうが、無理だ。

俺とシヤラは、好きなものがよく似ていた。

絵だけでなく、音楽も本も演劇も映画もそうだった。

似すぎていて気味が悪いとシヤラが笑ったことがあったが、それ以上に運命的な繋がりを強く感じあっていた。

恋人同士になる前に、俺は彼女に伝えていた。

「結婚相手は決められているんだ」

そう告げるのは、苦しかったけれど、未来を信じさせる真似をして付き合うことをしたくなかった。

「アレックス。思い違いしないで。この年で、結婚を考えて誰かと付き合うなんて、私もしたくないから。それに、私の家もうるさいところだし……自由な結婚なんて、できないと思ってる」

物分りがよく、頭のいい少女だった。賢すぎると思っほど。

俺が変装してパーティに出ていたことについても、そうだった。

「いろいろ事情がありそうだけど、訊かないでおくわ。詮索されるの嫌いでしょう?」

干渉してくる女ばかりだったから、それも珍しいと思い、一緒にいてこんなに居心地のいい人間がいるのだろうかと思議な感覚もあった。

彼女はスイスのベルンにある寄宿学校にいて、一時期ロンドンやパリに住んでいた俺とは遠距離なのもあって頻繁には会えず、毎日のメールや電話でのやりとりが主だった。それでも時間をやりくりして、二、三ヶ月に一度は俺がスイスに出向き、学校が休暇に入るとシャラもロンドンを訪れていた。

お互いに忙しく、二人の付き合いだけに夢中になれる恋ではなかったけれど、それまでにない幸せな時間を過ごしていたと思う。

俺自身は個人で飛行機を使うのは制限されていたため、ユーロスターやTGVを乗り継いでイギリスとスイスを行き来した。

滞在先のスイスに側近のダンジズは同行させず、俺は休養と称して小さな別荘で過ごしていた。警備や身の周りの世話をする者も厳選して最小限にし、シャラのことが表立って話に上らないように用心もした。

シャラは目立つスマクラグドスの名を嫌い、母方のオプライエンの姓で行動し、オプライエン家で生まれ育ったことになっていた。学校もその名で在学、パスポートもオプライエンの姓で通していたため、書類を有り体に調べた程度ではスマクラグドスの情報は絶対

に出てこない。

この時ばかりは、公に情報を秘すのが得意な一族のやり方が裏目に出てしまった。

人付き合いをするときは慎重に背後関係も調べていた自分も、表に出ない彼女の出自を、裏を読んで一族の内側から調べることまでしなかったのは迂闊だったと思う。

恋人同士になって二年余り、三度目の夏を迎えようとしていた頃、シヤラは、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジの姉妹カレッジでもある、オックスフォード大学の名門クライスト・チャーチに進学が決まった。

「あなたが通っていたトリニティと姉妹カレッジだと知って、選んだのよ。ほんの少しだけお揃いしてみたの」
ふざけて笑うシヤラが、眩しかった。

いつも明るく笑っていて、誰にでも分け隔てなく優しい。
街を歩けば振り返らない男はいなかったし、愛嬌の良さで同性からの反感も味方にしてしまえる。よくここまで揃った女がいるものだ、他人への評価がシビアな俺でも感嘆させられた。

でも、彼女に一番に惹かれた理由は、表面的なパーソナリティではない。

俺と彼女の結びつきを強めたもの、それは通じ合う孤独感だった。

「養子で育った家庭環境について、」とても恵まれている」と彼女は語った。

「両親も兄も、素晴らしい人たちよ。大切にされて、何不自由なく育ててもらってきたわ。自分が養女だとは、五歳の時には聞かされてたけれど、不満はなかった。なのに、何も不満はなくて、幸福なはずなのに、心がいつも空っぽだったの。どこにも居場所がない気がしていた」

大切にされていると分かっていたから、努力もした。期待に応えるばかりでなく、努力する以外にどう生きてらいいのか分からなかった。

けれど、頑張れば頑張るほど、どこに行くのが見えなくなる。もっと頑張れば見えるようになるかと焦っても、その努力は、空っぽな心の外側の壁を築くばかりで、その建物を皆が褒め称えるほど虚しくなった。

立派な宮殿を創りたかったわけじゃない。満たされない心の奥を埋めたくて、模索して、どうにかしようと思掻きながら手を尽くすたびに、壁は豪華な堅牢になり、心の内側からは遠くなる。

重い扉を開けても、また次に開けても、どうやっても行き着かない。自分の住処のはずなのに、次第に心を満たし埋めるどころか、そこに辿り着くことも出来ない。

逃げずに頑張ってきたはずが、複雑な迷路を創ってしまった。

自分以外に住人のいない絢爛なラビリンスで、俺は途方に暮れていた。

シャラも、同じだった。

女だからか、彼女のほうが支えを必要としていると感じてはいたが、負担には思わなかった。

背負うものは違っても、初めて分かり合える人間に出会えた安心と慰めが、二人の生きる時間に、求めていた安らぎをもたらしていた。

シャラが大学へ行き始め、短い秋から冬へと時が移り変わり、街並みやショーウィンドウにクリスマス気配が漂い始めた季節に、眩しくて愛しかったその時間は、想像すらしなかった形で終わりを告げる。

それぞれの結婚のために、いつかは別れなければならぬ覚悟はしていても、いきなり体をもがれるような衝撃と痛みには、俺たちは茫然とするしかなかった。

隠し撮りされた写真が、シャラの養父母の元に送られてきたのだ。

ロンドンの街角で、俺とシャラが、ふざけてキスを交わした時のもの。

自分たちは秘密にしていた関係でも、隠しきれるものではなかった。

俺の行動を監視して、写真を送りつけてきたのは、ヴィクトリアかハロルドの息がかかった者だろうと今は確信している。

その日、いつものようにプライベートの携帯で電話を受けた俺は、シヤラの様子がおかしいことにすぐに気づいた。聞いたことがないほど緊張で強張っている、彼女の声に耳を傾ける。

「今、どこ？」

「ロンドンにいる」

「私、スイスにいるの。ちょうどよかったわ。21時にヒースローに到着予定のブリティッシュ・エアウェイズ0717便に乗るから、ロビーまで来てくれる？」

スイス？ 大学を休んでいるのだろうか。

腕時計を見ると、時刻は19時。スイスからロンドン間のフライトは一時間かからない。

これから夕食の予定だったので、軽く済ませる程度にしておこうと考えながら、推敲を終えたばかりの論文をパソコンから送信する。来年からハーバードの医学部に編入が決まっていたので、父から頼まれる仕事とは別に、片付けておきたい化学関係の研究が山積していた。

「随分急だな。どうしたんだ？」

気忙しさを出さないよう慎重に声をかけたつもりだが、携帯の通話は突然に切れていた。

ちょっとしたケンカをしても、こんなふうに電話を切られたことはない。しかも空港まで呼び出すなんて、いったい何があったのかと不穏さを感じながら軽食を取り、ヒースローに向かった。

英国航空の到着する第五ターミナルに車を回させ、到着ロビーに入って電光掲示板を確認すると、シャラの乗った飛行機は到着と入国手続中の表示になっていた。

0717便21時着は、スイスのジュネーブ発。

ジュネーブには、彼女の実家があるとは聞いている。実家から急ぎで来るとは、やはり何かあったのだらうと確信するしかなかった。

やがて、ぞろぞろと人の流れが増え始めた中に、どこにいても目立つシャラの姿を見つけた。無造作なままの長い金色の癖毛、ブルーのデニムに白いタートルセーター、ざっくりとした黒のブルゾンを羽織り足元はスニーカーのラフな格好でいても、男という男が必ず振り返る。

ひと月ぶりに会う彼女を愛しく思いながら、固く険しい表情にただ事じゃない事情を読み取って、迎える俺の顔も強張っていた。

「どづしたんだ？」

それだけを言うのが、やっとだったと思う。

俺の前に立ったシヤラは何も言わず、挨拶すらせずに、肩にかけたショルダーバッグのポケットから何かを抜き出して、俺の胸に突き出した。

差し出されたのは、一枚の写真だった。

自分と彼女のキスシーンを見やり、詰めていた息が彷徨い出るような溜息が漏れる。

シヤラとの付き合いは、安らぎになっていたのは事実だが、先がない関係であること、付き合いを隠しておかなければならないことで、俺はどこかで息を詰めていた気がすると、自分の溜息を確かめながら思わされた。

「秘密に交際してたのが、ばれたってことか」

「それもあるけど、それだけじゃない」

それだけじゃない？

「自分で確かめたいんだけど。あなたのフルネームは、ミカエル・アレキサンダー・クレイラ・スマクラグドス？」

唐突に、シャラの唇から放たれた自分の名を聞き、数拍、状況が掴めずにいた。

理解してからも無言でいる俺に、彼女が詰め寄ってくる。

「そうなのね？ 嘘じゃないのね？」

「俺の名前だ。スマクラグドスの跡取りなんだ」

「……………どうして……………」

「……………騙そうとしていたわけじゃない。結果的に、そうなってしまったけれど。申し訳ないと思う」

「あなたのことだけを、責められない。私も偽っていたから。自立つ名が嫌で、母の親戚の姓を名乗っていたの」

「……シヤラ？」

「私の名前は、シヤラ・エステル・エグランタイン・スマクラグドスよ。聞き覚えはある？」

堪えた怒りを叩きつけるように一息に吐き出されたそれに、俺は目を見張った。

「スマクラグドス？」

一族の人間だったのかと驚愕して、フルネームを思い巡らす。けれど、誰の名前なのかすぐにはピンと来なかった。

その時まで、俺は妹のフルネームを知らず、急速に広がる暗雲に飲まれるような不安だけを感じていた。

慄きに満ちた目が、反応を示さない俺へと直視する。まばたきもせず。

「私の、実の親の名前は、ローデリオンと、グレースよ」

ローデリオンと、グレース……

視界から景色が消え、周囲の雑音がなくなった。

視覚はまっしろに、聴覚は無音になり、やがて見えるものは漆黒の闇だけになった。

「……………どうして？　ねえ、どうしてっ！！！」

シヤラの訴える悲鳴が意識を揺さぶり、俺は辛うじて、自分の感覚を探り寄せようとすする。

「私、別れない」

「……………シヤラ……………」

「絶対に別れない!!」

自制心を失って取り乱す彼女に、かける言葉はなく。支えられる腕も、なかった。

「こんなこと、耐えられない。なのに、あなたまで失ったら、私、これからどうすればいいの!？」

このときまで、彼女の涙を見たことは、なかった。

錯乱して泣き崩れ床に座り込んだ彼女を、抱き起こすことも、俺はできずにいた。

遠巻きに輪を描いて、人々が足を止め、眺める中で。その中心で俺とシヤラは、世界の全てを失くしていた。

心の中心を埋めようとしていたもの。二人で支え合った、お互いの存在さえ、一瞬にして……………命を失った。

なんだったんだろう。

信じあつことも。幸せも。眩しさも。

そこにあつたのに。

どうして、何もかも、消えてしまったのか。

二人の関係が、罪のものだから？ だから何もかも、幻のように失ってしまったのか。

それとも。

最初から、手には入るはずのない夢を、満たされたいという夢を、もがきながら、苦しみながら、見ていただけで。手に入らない渴望に、欲深さで、喘いでいただけで。

満たせるものなど、この世界のどこにも、存在しないのだろうか。

俺は、何を、信じていたんだろう。

何を、信じたかったんだろう。

ミカエルの憂鬱 8 (後書き)

活動報告にも書きましたが、

10月11日21時までには、3rdの前編・後編をサイトから下ろします。

ご案内に合わせて、今回は早めに更新していますので、

次回の更新は月曜日はお休みして、木曜日に更新できなければ、その次の月曜日になるかと思えます。

(十日間開いたらすみません。私用でパソコンをできる時間が限られているもので。。)

宜しくお願いいたします。

大学を休学し、ロンドンのホテルに滞在するようになったシャラとは、会うたびに、沈黙と言い争いを繰り返していた。

それでも、会わずにはいらなかった。

恋人として触れることが叶わなくなっても、好きだったし、精神的にまいっているシャラが心配で目が離せなかった。

まいっているのは俺も同じだったが、昼間は忙しくしている分、なんとか持ち堪えることが出来ていた。

人口の九割以上がカトリック教徒であるアイルランドに生まれたシャラの養母は、インドの血やスマクラグドスの血を引くアイルランド人で自身もカトリック教徒であり、養子のシャラも義兄のダンジズと共に洗礼を受けていた。

兄妹の姦淫。

知らなかったとはいえ、慣れ親しんだ教理にも背く禁忌の罪を犯したことも、シャラの精神を限界まで追い詰めたのだと思う。

「一緒に逃げて」

心のバランスを崩して、彼女はしきりにそう訴えるようになった。

「二人でどこかへ行きましょう。誰も私たちを知らない所でなら、二人でやっていけるわ」

「高等教育を受けてきてはいても、俺も君もまだ十五だ。二人だけで社会に出て、しかも逃亡者としてやっていけるとは思えない」

「じゃあ、私、どうすればいいの？　あなたは私なんかいなくてもいいってことね？」

「そういうことを言ってるんじゃない」

「じゃあ、どういふこと？」

「君は自分が温室育ちだと分かっているのか？　俺も同じだ。手厚く守られて育ってきた」

「私はそんな冷静な意見が聞きたいんじゃない！　あなたがどう思ってるかを知りたいのよ。私をいるのか、いないのか」

「いるかいらないかで、決められるわけがないだろ。それに、俺は、俺個人で生きられる立場にいない。一族に生まれ育って、教育を受けて、ここまで来て捨てる身勝手は許されない」

「私より、そっちが大事なのね？」

「どつちが大事だとかの問題じゃないし、最初から別れることも決まっていた。君も納得していただろう」

「私は、別れたくなんてなかった」

「シヤラ」

「いつか、どうにかなると思ってた」

泣き叫んで俺を困らせるシヤラを、慰める術はなかった。

普段が聞き分けの良すぎる人間のたがが外れると、どうにもならない。

養父母やダンジズが、俺にはもう会うなと説得しても、シヤラは絶対に耳を貸さないでいた。

特に彼女は、ずっと自分を抑えて生きてきた。

模範的な養女であり、ふざけた悪戯を楽しむ生徒でありながら学校では学生代表を務め、国際交流にも率先して借り出され各国で講演を行い、俺とは違う場所で矢面に立つことを求められてきていた。

頭脳明晰で何でも器用にこなし尊敬を集めても、人には理解されない苦しみを抱えていた。

泣かれても、喚かれても、抱きしめてやることはもうできない。

けれど………シヤラが限界まで来ているのは、俺にも分かっていた。

このまま突き放した距離にいるより、身内となって見守る姿勢でいるより、彼女の望むようにしてやったほうがいいのだろうか。

精神を病んでいく彼女を見つめながら、俺も自分がどうするべきなのか、見失いそうになっていた。

急に一人旅に出ると言い始めたシヤラに、毎日必ず、俺かダンジズに電話をするように言い含めて送り出し、ひと月あまりが過ぎた頃。

約束を守ってダンジズに連絡を入れていた様子のシヤラに安心していたある日、ダンジズから携帯に電話が入った。

ロンドンからクイーンパレスに戻っていた俺は、常に冷静沈着な従兄の動揺した声に、言葉を失う。

まだ春の訪れの遠い、ヨーロッパの最果ての国、最果ての断崖からシヤラが飛び降りて、危篤状態にあるという報せだった。

運命の全てを呪うかのように、彼女は、十六を迎えた三月の自分の誕生日に、自らの命を絶とうとした。

アイルランドのバレン高原の南東に、八キロに渡って海に迫り出したモハーの断崖は、大西洋を望む壮観な絶景で有名な所だ。

大地には木々もなく、石灰岩の隙間を乾いた苔のような芝草が覆う岩盤地面が延々と続き、一年の大半を荒涼とした風が吹き渡るそこは、古アイルランド語のゲール語で「破滅の崖」とも呼ばれている。

夏季には数十万人以上の観光客が訪れるが、冷たい疾風に晒される三月はまだ人影も疎らな一帯だった。

高さ二百メートル以上の崖から飛び降りたシャラが、通りかかった船に救出されたのは、奇跡だったと思う。

助かりはしても酷い状態で、水面に叩きつけられた衝撃で頭蓋骨の一部と肋骨が折れ、内臓も破裂していた。

地元の病院から首都ダブリンの病院にヘリで輸送され手術を受け、でも、「もう手の施しようがない」と医者に宣告され、急遽クイーンパレスに運ばれてきた彼女の変わり果てた姿に直面したとき、俺は、気を失いそうな後悔に陥った。

顔色は死人のように青ざめ、可愛らしかった唇は黒ずんで変色し、豊かで美しかった髪は頭部の治療のために剃髪されている。

……………一緒に、逃げてやればよかった。

妹と、分かってても、抱きしめてやればよかった。

そうすれば、こんな目に遭わせることも、なかったのに。

パレスに運ばれてきたのは、通常の医療では助からないと判断されたからだ。

スマクラグドスの総帥や、その息子で禊みそぎの儀式を行い修業を積んできた者には、現代科学では説明しきれない能力がある。

祈りを捧げて手当てを行うことで、病気や怪我を治癒する力もその一つであり、血族婚で血を守り続けているのもその力を存続させるのが主な理由だった。

パレスに駆けつけてきていた父と母は、養子に出したとはいえ実の娘の危篤に絶句して、母はむせび泣いた。

「おまえが聖なる手当ての儀式を行うように」

父親に言い渡され、

「俺は出来ません」

即答する。

祈りの修練はしてきても、手当てを人に施した経験もなかった。

「彼女の為だけではない。自分の為にも、おまえがしなさい」

「……………助かったほうが、いいんですか。このまま目を覚まさないほうが、もしかしたら、彼女は楽かもしれない」

血の気なく虫の息で眠るシヤラを見つめる自分も、絶望しか感じられない。

生きていく理由なんか、自分にもシヤラにも、ないように思える。

こんな状態で、精神統一をして儀式をするのは、不可能だとも思っていた。

「何が正しいかは、私も断言はできない。しかし、こんな悲惨な死に方をする為に、人は生まれてくるのではない。それは真実だろう」

父親に背中を押され、半日ばかりで手当てを終えた後には、精も魂も尽き果てていた。

集中している間は思い煩うこともなかったが、シヤラが一命を取り留めて体に生気を宿しはじめたとき、頬にそつと触れながら、涙が絶えなく零れるのを止めることはできなかった。

その後三日三晩、昏睡状態で眠った俺が、ようやくシャラを見舞うと、彼女は意識を取り戻してベッドで安静にして過ごしていた。

俺を見て、視線をそらした彼女を、付き添っていたダンジズの前で思いっきり引っぱたく。

それだけしか、できない。してやれない。

助かってよかったとも、言えない。

泣きながら、「ごめんなさい」を、繰り返す彼女を。生きていてよかったと、抱きしめることもできない。

無言で部屋を出た俺を、ダンジズが追ってきていた。

「……妹を、助けて下さって、ありがとうございます」

言葉少なく、誠心誠意の感謝を告げてくる従兄が男の顔をしているのを、黙って見つめる。

こんな時に、知らされる。気づいてしまつ。

こんな時だからこそ、本心は隠せない。

彼にとって、シヤラは、妹なんかじゃない。女なのだ。

「……彼女を頼む」

それ以外に、伝えられる言葉はなかった。

彼女のそばに、自分の居場所はもう、ないのだから。

未練さえも根こそぎ奪い去る、寒風が吹き荒れる殺伐とした断崖に独り置き去りにされたような、どこにも行き場のない恋の終焉だった。

愛した彼女は断崖から飛び降り、命がけで恋の絆を引き千切った。

俺は、飛び降りることも許されない地の果ての崖に佇み、乾いた想いがひび割れて粉々になり、凍える烈風に散っていくのを、見つめるしかなかった。

二度と、恋なんかしたくないと、思っていた。

シャラの十九歳の誕生日に、彼女とダンジズは婚約した。

献身的に自分を支え続けた男に心を開いて、幼い頃から傍にあつた愛に気づいた彼女は、偽りなく幸せな笑顔を俺にも見せるようになっていた。

婚約を発表した後で、クイーンパレスの俺の執務室に顔を出したシャラを迎え入れる。

「……………ミカエル。私……………私だけが、幸せになっていいのかしらって、思つたの」

口重く気がかりを切り出した彼女に、俺は書類に目を通しながらあえて軽口を装った。

「君がさつさと幸せになつてくれなきゃ、こっちは命がいくつあつても足りない。俺に余計な心配をかけたくないなら、明日にでも嫁に行つて思う存分幸福に生きてくれ」

「ミカエル……」

「俺の前で泣くな。君が涙を見せていい男は一人だけだろ」

涙を堪えながら、笑顔になろうとするシャラに、俺も微笑を浮かべて見せる。

あの日から三年を経て、シャラには、幸せを望む気持ちだけがあつた。

「ねえ、お兄様」

「なんだ、いきなり。気持ち悪い」

「結婚式の時は……ヴァージンロードを、一緒に歩いてくれる？」

途中まで、と、眩きが添えられる。

「……嫌じゃなければ」

「妹のワガママくらい、聞いてやるよ」

笑いあって、彼女が部屋を出て行った後で。

ドアの外で、一人で泣いている。そんな気がした。

俺は、二度とシヤラを女として見ることはないし、シヤラも俺を男として見ることはない。

お互いに、辛すぎた恋に未練や悔恨はない。

それは、確かなこと。

けれど、すべてを割り切り、兄と妹になるには、まだ時間が必要だろう。

そう思っていた。

それから数カ月後。俺は日本で、阿見香に巡り会った。

彼女と出会えたことを、心から感謝したい。

シヤラのことを、ただの妹として見ている自分がいる。

心の中でも、すべては終わっていたんだと、阿見香のそばではっきりと確かめている。

ダンジズのそばで、幸せそのもので笑うシヤラの中でも、過去は終わっているのだ。

シヤラが、幸せな恋を見つけて。俺が、二度と恋なんかしたくないと思っていた自分が、新たな恋を始めて。

ようやく、暗闇から解放された。そう実感している。

シヤラが特別弱い人間だったとは思わない。

綺麗な水の中でしか生きられない人間がいる。

シヤラは、そういう女なのだと思う。

死へと引きずられたシヤラを目の当たりにして、自分も崩れかけていた。

怖かった。人の弱さと、自分の弱さが。

人間が、こんなにあっけなく壊れていく脆いものだとは、思いもしなかった。

だからこそ、俺は阿見香に強く惹かれたのだ。

自分の弱さ、人の弱さを、醜さを知りながら、へこたれないしなやかさが。まっすぐな温かさが。限界に突き当たっても、壁に負けずに乗り越えていく強さが。

少しくらい狡くても、したたかに、自分の心に正直に、信じる道を掴もうとする前向きさにも惹かれていく。

どこにでもいるように見えながら、どこにでもいる女じゃない。

泥をかぶっても、どこまでも透明で。自分を失うことなく、澄んでいる。

葛藤にまみれても損なわれることのない瑞々しさも、素直さも、ありのままひた向きに生きる飾らなさも。抱きしめたくなる。

守りたいと思いがら、彼女の大きさにも包まれなくなる。

真っ先に俺の気持ちを察していたシヤラも、「阿見香となら、あなたは絶対に幸せになれるわ」と言い、陰日なたなく阿見香を支えてくれている。

阿見香の存在が、俺とシヤラの間に、優しい絆を結ばせてくれていた。

幸せな恋とは言えないかもしれないけれど、まっすぐに心をぶつけてくれる日本で出会った少女に、過去の深い痛みが癒されていくのを、俺は感じていた。

最近になってふと気づくと、阿見香が、俺とシヤラを不愉快そうに眺めている時がある。俺が視線を向けると、何でもなさそうに目をそらす。

もしかして、何かを知っているのか。俺とシヤラのことを噂で耳にしたのか。緘口令を敷いていても万全とはいえないだろうと、気がかりではいた。

イギリスに居た時の突然の自暴自棄も、まさかと勘ぐってはいたが、阿見香が何も言わないので、俺から訊ねることもしなかった。阿見香の性格ならば、もし知ったら、納得出来ないことはおざなりにしないのではないかと思い、自分から暴露するのは避けていた。

自分の過去を話すべきかと悩みながら、話して嫌悪されるのを、

今以上に距離を置かれるのを、恐れてしまつ。

シヤラと阿見香の噂をして笑っていたとき、ドローイングルームに入ってきていた和服姿の彼女を見て、視界から彼女以外のものが消えた。

駆け寄つて抱きしめたい衝動を覚えながら、彼女の噂をしていた気まずさで視線をそらすしかなかった。

シヤラと恋人だった頃、秘められた関係上、公の場に二人で出ることとはなかつたけれど、たまに街を並んで散策すると連れ立って歩く男を誇らしい気持ちにさせる女だと気づいたのは、行く先々で私たちの視線を浴びるようになってからだった。

阿見香は、そういう女じゃない。自慢になるかと訊かれたら、お世辞にも自慢にならないと思つていた。特に社交界なんかに連れ出して歩けば、育ちのせいもあり鬢髻ひんせきを買つようなタイプだ。シヤラとは正反対の。

自慢できる相手だから惹かれたわけじゃない。むしろ見せびらかすのではなく、自分の腕の中に閉じ込めて、他の誰にも見せたくない。

彼女の眼差から、自分以外に映るすべてを、奪いたくなる。

自慢になる女じゃない。そう思っていたのに、今は、果たしてそ

うだろうかと疑問になっている。

最近の彼女の変わりようは、目を見張るものがある。

この年頃の少女特有なのか、日一日と印象が変化していく。

夏休みが明けてから、阿見香を見る学校の男たちの目の色も明らかに変わった。

当の本人はまったく無頓着でいるが、廊下でも教室でも、男子が彼女を目で追っている。

一学期とは違う意地悪さで嫉妬の眼差を向ける女子もいれば、憧れるように見る女子もいる。

早速告白してきた身の程知らずの男たちもいて、安全とは別な思いで、家から出さないで隔離したい思いに駆られていく。どうにかして自分の腕の中だけにしまつて、大切に慈しみたいと願ってしまふ。

注目を浴びるようになったのは、本人の異議もおかまいなしにシヤラがあれこれ磨かせている影響もあるのだろうが、自分の手入れに興味がなかった人間が磨かれると、こうも女は変わるものかと驚きを隠せない。

シヤラやダンジズたちの特訓で英会話も身に付き、渡英したクインパレスでも、自分の立場を弁え一生懸命に行動していた。今までと違う環境に接して内面にも起こった変化や、忙しくても充実している生活も、彼女を輝かせているのだと思う。

あの、くだらない奴と両想いになって、うきうきしてるのもあるだろうが。

……………背筋に寒気が走る。夕方から自覚している微熱の悪寒だけのせいじゃない。あの目障りな愛玩犬のせいだ。好青年気取りなのが、後ろから蹴り倒したいほどムカつく男。

嫌なことを思い出して、抹殺したい顔を頭の中でぶっ飛ばしながら、三階の部屋へと上がる。どうせあのゆかたも、あの男のために着たのだろう。

そう思うと不愉快極まりないが、シヤラが「写真を」と騒いでも首をふった彼女の、清楚で色っぽい姿を、もう一度見たかった。

阿見香は部屋におらず、バルコニーで外を眺めていた。

帰宅した時から心なしか元気がないと思っていたが、やはり憂鬱そうにしている。

話しかければ、「婚約解消後は、母親と祖父母の住むマンションを賃貸で貸して欲しい。できれば格安で」と持ちかけられ、何をそんな深刻に悩んでいるのかと脱力させられた。

マンションの譲渡を断り続けている母親といい、この娘といい、金銭感覚が慎ましく欲が薄いようだ。

この母娘を見ていると、叔父ジャーメインの、人を見抜く眼に敬

服したくなる。おかげで俺は、阿見香に出会えたのだから。

「マンションはやるし、結婚しなくても経済的なことで協力はする」と一方的に伝えても、阿見香はまだ塞ぎ込んだ顔をしていた。

何かあったのだらうと思ったが、しつこく訊いても答えないだらう。

それよりも　このゆかた姿は、反則だ。

自制心をかなぐり捨てて、押し倒したくなる。

去ろうとする彼女を引き寄せて、背後から抱きしめた。

すんなり長い首筋。細すぎず、すっきりした形のいい顎、そこにかかる艶やかな黒髪が、ゾクゾクするほど色つばい。

うなじに唇を這わせて肌を味わう。

匂やかに交じり合う、彼女の肌の香りと、俺と同じ石鹸の残り香。

髪からも、自分の髪と同じシャンプーの芳香が漂い、胸が熱くなつて彼女の髪に頬をつずめる。

……同じ香り。それだけのことが、愛しくてたまらない。

何の隔てもなく、二人の間を染めて、溶かしあうもの。

このまま、誰の香りにも染まるなど、言いたくなる。

誰にも渡さないと、束縛したくなる。

「あんたって……セフレいっぱいいたんでしょ。あたしに遠慮しないで、そういうお付き合い続ければいいじゃん」

「セフレ？ どういう意味？」

彼女の抵抗をからかって、やわらかな耳たぶを舌でなぞる。ビクリと反応する腕の中の彼女に、背後から忍び笑いを向けながら。

日本語で言う、下半身の交友関係のことか。

誰だ、そんなことをバラしたやつは。

素早く思考を巡らせ、阿見香と俺の共通する人間を消去法で省き、残ったアティアナとブレイズから、ブレイズをはじく。

多分、アティアナだ。俺の悪口を吹聴する命知らずが。ったく、ロクなことを言わない、何がセフレだ。

早いうちに「阿見香に余計な事を吹き込むな」と電話で脅しておくしかない。

俺を毛嫌いしているアティアナは、メールを送っても開かないで処分する可能性が大だ。パソコンごと。

前にもそれをやられたことがある。

なぜ返事がないのか追及したら、「パソコンが故障しちゃったから知りません」と答え、嘘じゃないと言わんばかりにパソコンを買い換えたクレジットカードの明細書まで見せてきたのだ。それを三回もやられたら、こっちも学習する。

考えながら、気持ちをほぐらかしても、募る思いは留まるところを知らなかった。

抱きしめれば辛くなると、求めたくなると分かっているのに。抱きしめずにいられない。

「別な人だっているじゃない」なんて、憎らしいことを言う唇を塞いだ。

何度触れても清らかさを失わない、不思議な唇。

阿見香の感触は、俺をあっけなく欲望の奴隷にする。

嫌いだったキスに俺を夢中にさせるのだから、うぶな顔をした小悪魔って、いい加減に自覚してくれよ。

しかも、別な人だって？ 今の俺のどこを見て、そんなことを言うんだ。

君以外の女は、いらなと思ってているのに。

君だけが欲しくてたまらないのに。

俺の本音を言えば、君が困惑すると分かっているから、我慢しているのに。

なのに、どこまで憎らしい女なんだ。

ずっと触れたかった唇に、彼女を追い詰めすぎないように、キスを重ねる。

二週間前にキスをしてからずっと、毎日触れたいと思っていた。寝ている姿にだけでなく、ちゃんと目を覚まして、俺を見てくれる彼女に。

キスだけじゃなくて、それ以上のことも。

唇と首筋とはだけさせた肩に、繰り返しキスをしながら。

今日はあの男に会って、抗うことなく、甘い時間を過ごしてきたのかと思う。

S Pの代表に口を割らせているところによれば、「とても清い交際をされている」らしいから、それを信じたくはあるけれど。

女性のS Pは同性の阿見香に気を遣って吐かないが、代表の藤枝は立場上、俺が無言で睨めばある程度のご報告するので、把握はしている。本当かどうかはともかく。

「あいつにも、こんな君を見せているのか」

つい、嫌味を言ってしまう。

口が悪いのは自覚しているが、阿見香に対してはより毒舌が止まらなくなる。

顔を見ると、自分の感情のコントロールが難しくなって、イライラしたり。嫉妬したり。いじめて困らせたくなったり。

彼女の怒った顔を見るのも、生意気そうに顎を上げてツンと澄ました態度を見るのも、好きでたまらない。

ムキになって食ってかかってくるのも、面白い。口の利き方が対等な人間があまりいなかったのもあると思うが、相手が阿見香だからこそ許せる部分も多々ある。

「ミカエル……もしかして、熱があるんじゃない？」

俺の嫌味に怒っているくせに、氣遣わしげに眉を寄せってくる。忙しい女だ。

抗いながらも、俺の体温を知る君。怒りながらも、心配してくれる君。

可愛くて、愛しくて。どうにかなりそうだななんて言ったら、君は、どんな顔を見せるだろう？

これからも、知ることはないだろうその顔を、見たいと望みながら。

無言で君を抱きしめて。言葉で伝えるかわりに、キスをする。

ミカエルの憂鬱 9 (後書き)

ミカエルの憂鬱は、あと一話で終わります。

ちよつとごぼれ話など。

モハーの断崖を、リュックを背負い一人うろろろしていたときのこ
と。

(自殺の名所だとは帰ってから知った……)

真夏だったのもあり、火曜サスペンスで有名な日本海の東尋坊のよ
うな侘しい雰囲気はありませんでしたが……

絶壁をこわごわと見下ろして、仰天。

数メートル下にせり出したほんの少しの岩のでっぱりに、カップル
が腰かけていて、熱烈なキスシーンの真っ最中。

地元のティーンエイジャーだろうけど、こっちは衝撃で目玉が飛び
出そうになりました。(苦笑)

どれだけの高さかというと、東京タワーが333メートル(だった
と思う)なので、

タワーの三分の二の高さの地点で命綱も付けずにラブラブしている
のを思い浮かべてもらえれば、

どんだけ酔狂かが伝わるかと思えます。

まさに、お互いしか目に入らないってヤツですね。。

ぜんっぜん、羨ましくなかつたですけど。(爆)

阿見香とミカエルだったら、やれそうかな……

運動神経が化け物レベルだし。(^^)

阿見香がミカエルの悪ノリを拒否らなければ。(笑)

本格的に熱を出して寝込んだその夜、またあの夢をみた。

広々として出口すら分からない、絢爛なパレスの中を、誰かを探して歩いている。

誰かが見つからなくても、せめて辿り着く場所があればいいのに、冷たい大理石の床に自分の足音だけを響かせて必死で歩いて、同じ所をぐるぐる巡っている幻覚で吐きそうになる。

焦りと不安が、次第に恐怖だけで支配されていく。

床から、亡霊のように、沢山の手が伸びてくる。助けってくれと求める手。

逃げようとする足元を掴んで、離さなくなる。

またこの夢だ。夢の中でも、夢だと分かっているのに、気が狂いそうになる自分を慰められない。

そのとき、何かが俺の手に触れた。

そっと、優しく触れてくる、誰かの手。

“ だいじょうぶ。一人じゃないよ。”

言葉のない温もりで、伝えられる。

夢の中で、悲鳴すら出せない恐怖心が、瞬く間に優しさに包まれていく。

息もできずにいた胸から溜息がもれて、恐怖が消えると同時に、無数の魑魅すたまの様な助けを求める手も消えていた。

俺を怖がらせない力で握り締めてくれるその手は、俺に何も求めていなかった。

行くあてのないパレスの中を、その手と共に、歩いている。

「どこに行こうか？」とも訊ねず、「どこかに行こう」とも誘わない手。

ただ、そこにいてくれる。

そこに、大切な存在があることを、教えてくれる。

俺が、ここにいることを、教えてくれる。

それだけでいいと

伝えてくれる。

目を覚ましたら、そこは東京の家だった。

静寂に浸される室内を、小さな寝息が安らかな風のように漂い、
暗い夜の孤独を温めていた。

阿見香がそこにいて、いつもより近くで眠っている。

俺の左手に、手を重ねながら。

熱に浮かされた全身に、安息の震えが解き放たれ、しばらくの時
間、何の言葉も見つからなかった。

胸がつまって、閉じたまぶたが小刻みに痙攣する。

無欲で、透明なぬくもり。透明な優しさ。

……分かってる。

何も求めずに、そうしてくれる手に。自分も、求めすぎではないかないことを。

無心で優しさをくれる君に、これ以上を望みすぎたはいけないことを。

戸惑いながら、優しく髪を乾かしてくれた。

戸惑いながら、優しく俺を抱きしめてくれた。

文句を言いながら、心配してくれて。

何も求めずに、手を握っていてくれる。

何もいらぬ。君がいるなら。

何もいらぬ。君がいて、俺がいて。ただ、存在してて。

それだけでいい。

君のすべてが欲しい本心もあるけれど。

ただ、存在しあっている。

決して翻ることのないその事実があり、そこに、泣きたくなるような安らぎがあることを知る。

彼女の手を、そっと握り返す。

いつか死ぬそのときまで、この温もりを忘れることは、ないだろう。そう噛み締めながら。

風邪で寝込んでいる間は、彼女の優しさにたっぷり付入っていた。お人よしで情の深い阿見香は、頼まれると絶対に嫌とは言えない。

ふざけんな！って顔を見せながらも、甲斐甲斐しく世話をしてくれた。

無理矢理押し倒さないでいるんだから、これぐらいの我儘はさせてもらってもバチは当たらないはずだ。

あとどれくらい、一緒にいられるかも分からないのだから。

でもそう考えると、それを納得したくない俺の葛藤部分が、素直に彼女と向き合うことに駄々をこねてしまう。

彼女のいちいちに文句を並べ立て、切れそうに歯を食いしばっている顔を見て溜飲を下げるといって、面倒くさい人格も俺の中にはいる。

ポールが作るオートミールにうんざりして、「うちでは風邪のときは、梅がゆか卵がゆ」と話した阿見香に、梅干を食べるくらいならオートミールのほうがまだ許せると思いつながら、卵がゆを食べさせるとリクエストした。

彼女が作ってくれた手料理は、食べたことのない味で感想に困ったものの、トリニティ・カレッジのランチよりは遥かにまともだった。あそこの食事は、ディナーも含めて完食したことはなかったが、阿見香の料理は全部食べられただけ数倍ましだろう。

熱でだるい間ずっと付き添ってくれた彼女に、お礼したいと伝え

たら、「ピアノを弾いて欲しい」と頼まれた。

そんなことでいいのかと拍子抜けしつつ、十年近く人にピアノを聴かせていないことを思う。

これからも人前では一切弾くつもりはないが、阿見香にはイギリスでたまたま聴かれたことがあった。忘れていなかった彼女が「ピアノがいい」と子供みたいに目を輝かせて、それがあまりにも可愛かったので、阿見香にならないかと了承していた。

彼女にだけは、なんでもしてやりたくなる。

自分ができる最高の特別だけで、彼女を包みたくなる。

そんな自分にふと我に返り、唸り声を漏らしかけた。

……………父親の血か、これは。

ローデリオンのような、妻にベッタベタに甘く、年がら年中抱きしめてキスをしている男にだけは絶対になりたくない、頭がイカレると蔑視すらしてたのに。

あの恐ろしい性格が自分にも遺伝しているらしいと気づかされ、絶句する。

阿見香が、花嫁にならないほうが、俺の人生はきつと平和で安泰

だ。

彼女がずっとそばにいたら、俺は父親以上のイカレ男になる可能性、百パーセントかもしれない。

阿見香と結婚しないほうがいい、素晴らしい口実が自分の中に出て来たことに、安心する。

結婚なんかしたら、本当に………大変なことになる。目も当てられない。

仕事そっちのけで妻と寝室にこもり続けるような総帥は、総帥どころか、もはやまともな人間とも呼べない。

そうだ。まともな人間、まともな男でいたいなら、阿見香は危険だ。そばにいないほうがいい。

ドロージングルームで、ピアノを前に阿見香に問いかける。

「何がいい？」

「リクエストできるほど知らない。なんでもいいよ」

なんでもいいと答えながら、瞳は期待に満ちて、ピアノと、適当に鍵盤に走らせる俺の指を見つめている。

彼女にとっては、俺が、というより、ピアノと演奏があればそれで満足なのだろうと思いつながら。阿見香でも聴きやすく、強く溢れてくる自分の感情を軽やかな旋律に乗せられる、アップテンポなエチュードを最初に選んだ。

二曲目は、一曲目よりも落ち着いた優しいリズム、明るく甘いアマビレの、初々しいロマンチックさが印象的な曲を奏でてみる。

「なんて曲？」

ポピュラーなものから、意味深なタイトルのその曲で気持ちを表現してみても、彼女はやはり曲名を知らなかった。

陽射しを受けて、黒から緑へ、神秘的に光彩が変化する眼差をじっと見つめて、それを教える。

「エルガーの、愛の挨拶」

「へえ。可愛い曲名だね！ メロディそのものって感じかも」

「……イギリスの音楽家としてだけでなく、愛妻家としても名高いエルガーが婚約していた頃……最愛の、婚約者のために作曲して、婚約記念に、彼女にプレゼントしたものだ」

「最愛の婚約者につて、素敵だね。メロディだけじゃなくて、背景までロマンチックで。あたしね、花畑に蝶が飛んでる光景が真っ先に浮かんできて、のどかで優しい気持ちになれたの。プレゼントされた奥さんも嬉しかっただろうなあ。こんなに素敵に弾けるミカエルも凄い！ エルガーや奥さんがここにいたら絶対に感激するよ」

「……………」

……………誰かこの女を、殺してくれないか。

いつそのこと、そのほうが楽になれる気がする。

俺だって、気持ちを伝えたくないわけじゃない。今だって、好きだと言って抱きしめたい。

曲の由来を説明した俺に、「こんなに素敵に弾けるミカエルも凄い。エルガーやこの曲をプレゼントされた奥さんがここにいたら、絶対に感激するよ！」なんて、無邪気な素直さで褒めてくれる君の唇へ、ありのままの想いを伝えたい。

男が女をじっと見つめて、「愛」の言葉を思わせぶり口にするば、言外に何かを感じ取るだろ。普通の女なら。

日本ではこういう人間を「天然」と呼ぶらしいが、生易しい表現だ。

そして、そうだったと、またしても痛感させられる。

この女は、普通じゃない。

思わず苦笑いを漏らした俺を、阿見香が怪訝そうに見てくる。

「ピアノを弾きながら、いきなり苦笑するのやめてくれない？ 笑わないあんたが突然そうすると、何事かと驚くのよ」

「俺でも思い出し笑いくらいはする」

シヤラが、「彼女は曲解の天才よ」と笑うので、俺も呆れながら笑うしかなかったが、いつペンこの女の頭の中身を見てみたい。

身近にいたブレイズもアティアナもかなりおかしな人間だが、見てみたいと思うほどの関心はなかった。

けれど、この女だけは、心の隅々まで見たい衝動に駆られる。

すべてを知りたくなる。

もし、運命があるなら。俺は、愛していると、誰かに告げること

のない男なのかもしれない。

シヤラにも、そう伝えたことはなかった。未熟だった初めての恋で、それを言葉にするのは重すぎたから。

どちらの恋が重いかなんて、関係ないけれど。

心を慰めあうように、苦悩を癒しあうように愛しあった思いよりも、阿見香には激しい欲望を感じる。

それから、守りたいと思う気持ち。自分の与えられるすべてのものを、彼女に与え、尽くしたい気持ち。

それは、俺が昔より大人になっただけのことなのか。

シヤラにはねだられても弾かなかったピアノを、阿見香には弾いて聴かせているのも、以前よりは精神的に大人になっただけのことなのか。

鏡を見るように、好きなものも心の情景も似ていた相手と、すがり合う思いで結んだ恋も、自分にとって真剣なものだったけれど。

阿見香に対しては、彼女を閉じ込めて、自分以外のものを何も見るなど突きつけたくなるのは、なぜだろう。

そしてまた逆に、地球のどこにいても君を見守っていると、どこまでも深く優しく、慈しみたくなるのは、なぜだろう。

「我々はどこから来たのか。」君はどう思う?」

風呂上りに、ラマイエの書を本を読みながら 本当に読んでいるのか、頭に入っているのかは疑問だが、ベッドに寝そべって寛いでいる阿見香の隣に俺も横になり、問いかけた。

「知らない」

「よく考えてから言えよ」

「同じだよ。考えても知らない」

「じゃあ、我々は、何者だと思っ?」

「……人間?」

「我々はどこへ行くのか」

「さっきから何の尋問？」

「答えるよ」

「お慕」

「……………」

「だって答えようがないじゃん。そりゃ不思議には思っけど、あたしが出せる答えじゃないし。最終的にはみんな死ぬんだし」

「…………君と話していると、考えるのがバカバカしくなる」

苦笑して、首をふる。阿見香らしいというべきか。

そして、笑いたくなる。思いつめていく自分のことを。

墓。死。誰にでも訪れる、今生の終点であるには違いない。平等に辿り着くところ。

阿見香本人はあまり考えてないのだろうが、あっさりとの衝いてくるのも感心させられる。

考えて気取った事を並べたり、物見高い意見をするよりはずっといい。うがった見方をしない率直な真剣さも好感が持てる。

彼女に対して、バカだと思うことは多々あっても、本質は愚かな女じゃない。それが彼女の面白いところで、手ごたえを感じる資質でもある。

地に足の着いた自分なりの意見を持ちながら、答えが出ないことを割り切って、悩みすぎないでいくのも人間の賢い選択だ。

自分を持つこと、割り切ること、悩みすぎないこと。それらも強い精神力を必要とする。

「言うだけ言わせて苦笑いするなんて、失礼じゃないの」

「ゴーギャンの絵の有名なタイトルを知らないのか」

「ゴーギャン？ って、自画像が上手くかけなくて、自分で耳をちぎったとかいう人？」

「それはゴッホ。ゴーギャンとは一時期友人だったらしいが」

「ゴだけ当たってた」

Vサインを振りながら、一人笑いで肌掛けの中に潜り込んでいる。

「得意げに言うなよ。一般教養も念入りに学習させたほうがいいな。週二程度でカリキュラムに……阿見香？」

……。

身動きが止まったかと思えば、即効で寝てやがる。

こいつは、俺を男だと、微塵も認識していないんだ。キスも、それ以上まで俺としておきながら、男として関わることを完全に除外している。

だから同じベッドでも、無防備にぐっすり眠れるのだ。……腹立たしいことに。

信用とかそういう次元の話じゃない。それを言えば、「前科だらけのあんたなんか信用出来ない！」と言い切るに決まってる。

異性として、まったく興味を抱かれない。悔しいが、そういうことなのだ。

「檀くーんっ」

学校に行けば、家では絶対に見せない笑顔を見る。

その眩しさが、憎らしくて、愛しい。

俺の前では絶対に見せない、あの男だけに向けられる笑顔が。憎らしくて、愛しくて。

……守りたい。ずっと、君が、そんなふうに笑えるように。

二度と会えなくなっても。二度と言葉をかわせなくても。

その笑顔をそばで見られる時間が、俺には限られていても。一生、見届けることはできなくても、守り続けたい。

俺が君の夢を見ても。

君が俺の夢を見る夜は、ないのだろう。

隣りにいても、届かない。

抱きしめても、届かない。

君が欲しくても、手に入れることができない。

君をこの腕に閉じ込めてしまえば、その笑顔も、輝きも、消えてしまふのを知っているから。

君が欲しいと願う気持ちよりも、その笑顔を壊したくないと思う気持ちが勝ってしまうから。

好きになつたと、言えない。

愛してしまつたと、言えない。

苦しめると分かっている、この身勝手な想いは、告げられない。

幼いときの、火司長に語られた言葉の真の意味を、君を通して分かり始めている。

どんな形であれ、人は支えあわなければ生きていけない。

支えあい、存在する。それだけのことだと。

肉体が減びても、大気となり土となり、他の生を助ける力となりながら。

今の俺には大きな力があるかもしれない。それは特別なことかは、
どうでもいい。

その力で、君のいる世界を、支えていけたらと思う。

一族と世界を守り導くのだと諭され、背負わされ、漠然と抱えて
きた不安や重圧が、君を見つめながら少しづつ溶かされていく。

見渡せば、沢山の人間がいて。知ることのなかった日常が溢れて
いる。

制服を着て、若々しさを弾けさせながら笑いあう生徒たちがいて。
いろんな笑顔があつて、社会を支えている様々な人間がいる。

君が生きていくこの世界が、幸せなものであるように。君が心か
らずっと笑顔でいられるように。俺ができることは、限りなくある
のだろうと思う。

いつか訪れる、さよならの時がきて。

十年後、二十年後に、もしも再会できたら。

俺は、激しい後悔に打ちのめされ、業火に魂を投じるような苦し

みを味わうのだろう。

どうして、そばにいたときに、手に入れてしまわなかったのかと悶えて、君のそばにいる男を粉々にしたくなる嫉妬に身を焦がすのだろうと、分かっているのに。

君は、そんな女になると、確信しながら。自分のものにしてしまえばよかったと思える女になると、確信しながら。

愛していると告げずに、生きていく。

けれど、俺は後悔していない。

君に出会えたことも、どうしようもなく惹かれていくことも。

眩しいものは、もう見たくないと思っていた俺だった。

希望や理想や笑顔を照らし出す光など、見たくないと思っていた。自分には必要がないと。

けれど、君の笑顔を見るためには、光が必要で。俺はそれを求めている。

君の笑顔を守るためには、希望や理想が必要で。俺はそのために、

どんな努力でもしたいと思っている。

犠牲じゃない。

君を守るために、できることをしたいだけ。

遠く離れていても、この世の中に自分ができるところを、していい
うと思っ。

持て余す重責と義務でしかなかった役割に、君に出会えて、初め
て希望を見出せたんだ。

個人的な動機だけれど、これからもずっと、それが俺の支えにな
っていく。

O? allions-nous? 我々は、どこへ行

くのか。

訊かれたら、俺の答えはもう見つかっている。

生涯、揺らぐことのない大切な想いを、抱きしめていく。

「俺は旅をする。君のいる光の中へ。

辿り着く場所はいらない。君がいる世界が、自分のすべてだから」

俺はどこまでも行こうと思う。愛する人のいる光の世界を。

いつか君の時が終わり、俺の時が終わり。違う時へと姿を変えても。

君が輝いてあり続けだろう、光の中に、俺もあり続ける。

それを永遠と呼ぶのなら。俺はきっと永遠に、君を愛していくだろう。

D r e a m a b o u t y o u くミカエルの憂鬱く

E N D

ミカエルの憂鬱 10 (後書き)

番外編・ミカエルの憂鬱にお付き合い下さり、ありがとうございました。

本編のほうも、また宜しくお願いいたします！

近日中に、読み切り番外編をアップする予定……なんですけど、遅れたらすみません。

本格的に熱を出して寝込んだその夜、またあの夢をみた。

広々として出口すら分からない、絢爛なパレスの中を、誰かを探して歩いている。

誰かが見つからなくても、せめて辿り着く場所があればいいのに、冷たい大理石の床に自分の足音だけを響かせて必死で歩いても、同じ所をぐるぐる巡っている幻覚で吐きそうになる。

焦りと不安が、次第に恐怖だけで支配されていく。

床から、亡霊のように、沢山の手が伸びてくる。助けってくれと求める手。

逃げようとする足元を掴んで、離さなくなる。

またこの夢だ。夢の中でも、夢だと分かっているのに、気が狂いそうになる自分を慰められない。

そのとき、何かが俺の手に触れた。

そっと、優しく触れてくる、誰かの手。

“ だいじょうぶ。一人じゃないよ。”

言葉のない温もりで、伝えられる。

夢の中で、悲鳴すら出せない恐怖心が、瞬く間に優しさに包まれていく。

息もできずにいた胸から溜息がもれて、恐怖が消えると同時に、無数の魑魅すたまの様な助けを求める手も消えていた。

俺を怖がらせない力で握り締めてくれるその手は、俺に何も求めていなかった。

行くあてのないパレスの中を、その手と共に、歩いている。

「どこに行こうか？」とも訊ねず、「どこかに行こう」とも誘わない手。

ただ、そこにいてくれる。

そこに、大切な存在があることを、教えてくれる。

俺が、ここにいることを、教えてくれる。

それだけでいいと

伝えてくれる。

目を覚ましたら、そこは東京の家だった。

静寂に浸される室内を、小さな寝息が安らかな風のように漂い、
暗い夜の孤独を温めていた。

阿見香がそこにいて、いつもより近くで眠っている。

俺の左手に、手を重ねながら。

熱に浮かされた全身に、安息の震えが解き放たれ、しばらくの時
間、何の言葉も見つからなかった。

胸がつまって、閉じたまぶたが小刻みに痙攣する。

無欲で、透明なぬくもり。透明な優しさ。

……………分かってる。

何も求めずに、そうしてくれる手に。自分も、求めすぎではないかないことを。

無心で優しさをくれる君に、これ以上を望みすぎてはいけないことを。

戸惑いながら、優しく髪を乾かしてくれた。

戸惑いながら、優しく俺を抱きしめてくれた。

文句を言いながら、心配してくれて。

何も求めずに、手を握っていてくれる。

何もいらぬ。君がいるなら。

何もいらぬ。君がいて、俺がいて。ただ、存在してて。

それだけでいい。

君のすべてが欲しい本心もあるけれど。

ただ、存在しあっている。

決して翻ることのないその事実があり、そこに、泣きたくなるような安らぎがあることを知る。

彼女の手を、そっと握り返す。

いつか死ぬそのときまで、この温もりを忘れることは、ないだろう。そう噛み締めながら。

風邪で寝込んでいる間は、彼女の優しさにたっぷり付入っていた。お人よしで情の深い阿見香は、頼まれると絶対に嫌とは言えない。

ふざけんな！って顔を見せながらも、甲斐甲斐しく世話をしてくれた。

無理矢理押し倒さないでいるんだから、これぐらいの我儘はさせてもらってもバチは当たらないはずだ。

あとどれくらい、一緒にいられるかも分からないのだから。

でもそう考えると、それを納得したくない俺の葛藤部分が、素直に彼女と向き合うことに駄々をこねてしまう。

彼女のいちいちに文句を並べ立て、切れそうに歯を食いしばっている顔を見て溜飲を下げるといって、面倒くさい人格も俺の中にはいる。

ポールが作るオートミールにうんざりして、「うちでは風邪のときは、梅がゆか卵がゆ」と話した阿見香に、梅干を食べるくらいならオートミールのほうがまだ許せると思いつながら、卵がゆを食べさせるとリクエストした。

彼女が作ってくれた手料理は、食べたことのない味で感想に困ったものの、トリニティ・カレッジのランチよりは遙かにまともだった。あそこの食事は、ディナーも含めて完食したことはなかったが、阿見香の料理は全部食べられただけ数倍ましだろう。

熱でだるい間ずっと付き添ってくれた彼女に、お礼したいと伝え

たら、「ピアノを弾いて欲しい」と頼まれた。

そんなことでいいのかと拍子抜けしつつ、十年近く人にピアノを聴かせていないことを思う。

これからも人前では一切弾くつもりはないが、阿見香にはイギリスでたまたま聴かれたことがあった。忘れていなかった彼女が「ピアノがいい」と子供みたいに目を輝かせて、それがあまりにも可愛かったので、阿見香にならないかと了承していた。

彼女にだけは、なんでもしてやりたくなる。

自分ができる最高の特別だけで、彼女を包みたくなる。

そんな自分にふと我に返り、唸り声を漏らしかけた。

……………父親の血か、これは。

ローデリオンのような、妻にベッタベタに甘く、年がら年中抱きしめてキスをしている男にだけは絶対になりたくない、頭がイカレてると蔑視すらしてたのに。

あの恐ろしい性格が自分にも遺伝しているらしいと気づかされ、絶句する。

阿見香が、花嫁にならないほうが、俺の人生はきつと平和で安泰

だ。

彼女がずっとそばにいたら、俺は父親以上のイカレ男になる可能性、百パーセントかもしれない。

阿見香と結婚しないほうがいい、素晴らしい口実が自分の中に出来たことに、安心する。

結婚なんかしたら、本当に………大変なことになる。目も当てられない。

仕事そっちのけで妻と寝室にこもり続けるような総帥は、総帥どころか、もはやまともな人間とも呼べない。

そつだ。まともな人間、まともな男でいたいなら、阿見香は危険だ。そばにいないほうがいい。

ドロージングルームで、ピアノを前に阿見香に問いかける。

「何がいい？」

「リクエストできるほど知らない。なんでもいいよ」

なんでもいいと答えながら、瞳は期待に満ちて、ピアノと、適当に鍵盤に走らせる俺の指を見つめている。

彼女にとっては、俺が、というより、ピアノと演奏があればそれで満足なのだろうと思いつながら。阿見香でも聴きやすく、強く溢れてくる自分の感情を軽やかな旋律に乗せられる、アップテンポなエチュードを最初に選んだ。

二曲目は、一曲目よりも落ち着いた優しいリズム、明るく甘いアマビレの、初々しいロマンチックさが印象的な曲を奏でてみる。

「なんて曲？」

ポピュラーなものから、意味深なタイトルのその曲で気持ちを表現してみても、彼女はやはり曲名を知らなかった。

陽射しを受けて、黒から緑へ、神秘的に光彩が変化する眼差をじっと見つめて、それを教える。

「エルガーの、愛の挨拶」

「へえ。可愛い曲名だね！ メロディそのものって感じかも」

「……イギリスの音楽家としてだけでなく、愛妻家としても名高いエルガーが婚約していた頃……最愛の、婚約者のために作曲して、婚約記念に、彼女にプレゼントしたものだ」

「最愛の婚約者につて、素敵だね。メロディだけじゃなくて、背景までロマンチックで。あたしね、花畑に蝶が飛んでる光景が真っ先に浮かんできて、のどかで優しい気持ちになれたの。プレゼントされた奥さんも嬉しかっただろうなあ。こんなに素敵に弾けるミカエルも凄い！ エルガーや奥さんがここにいたら絶対に感激するよ」

「……………」

……………誰かこの女を、殺してくれないか。

いつそのこと、そのほうが楽になれる気がする。

俺だって、気持ちを伝えたくないわけじゃない。今だって、好きだと言って抱きしめたい。

曲の由来を説明した俺に、「こんなに素敵に弾けるミカエルも凄い。エルガーやこの曲をプレゼントされた奥さんがここにいたら、絶対に感激するよ！」なんて、無邪気な素直さで褒めてくれる君の唇へ、ありのままの想いを伝えたい。

男が女をじっと見つめて、「愛」の言葉を思わせぶり口にするば、言外に何かを感じ取るだろ。普通の女なら。

日本ではこういう人間を「天然」と呼ぶらしいが、生易しい表現だ。

そして、そうだったと、またしても痛感させられる。

この女は、普通じゃない。

思わず苦笑いを漏らした俺を、阿見香が怪訝そうに見てくる。

「ピアノを弾きながら、いきなり苦笑するのやめてくれない？ 笑わないあんたが突然そうすると、何事かと驚くのよ」

「俺でも思い出し笑いくらいはする」

シヤラが、「彼女は曲解の天才よ」と笑うので、俺も呆れながら笑うしかなかったが、いつぺんこの女の頭の中身を見てみたい。

身近にいたブレイズもアティアナもかなりおかしな人間だが、見てみたいと思うほどの関心はなかった。

けれど、この女だけは、心の隅々まで見たい衝動に駆られる。

すべてを知りたくなる。

もし、運命があるなら。俺は、愛していると、誰かに告げること

のない男なのかもしれない。

シヤラにも、そう伝えたことはなかった。未熟だった初めての恋で、それを言葉にするのは重すぎたから。

どちらの恋が重いかなんて、関係ないけれど。

心を慰めあうように、苦悩を癒しあうように愛しあった思いよりも、阿見香には激しい欲望を感じる。

それから、守りたいと思う気持ち。自分の与えられるすべてのものを、彼女に与え、尽くしたい気持ち。

それは、俺が昔より大人になっただけのことなのか。

シヤラにはねだられても弾かなかったピアノを、阿見香には弾いて聴かせているのも、以前よりは精神的に大人になっただけのことなのか。

鏡を見るように、好きなものも心の情景も似ていた相手と、すがり合う思いで結んだ恋も、自分にとって真剣なものだったけれど。

阿見香に対しては、彼女を閉じ込めて、自分以外のものを何も見るなど突きつけたくなるのは、なぜだろう。

そしてまた逆に、地球のどこにいても君を見守っていると、どこまでも深く優しく、慈しみたくなるのは、なぜだろう。

「我々はどこから来たのか。」君はどう思う?」

風呂上りに、ラマイエの書を本を読みながら 本当に読んでいるのか、頭に入っているのかは疑問だが、ベッドに寝そべって寛いでいる阿見香の隣に俺も横になり、問いかけた。

「知らない」

「よく考えてから言えよ」

「同じだよ。考えても知らない」

「じゃあ、我々は、何者だと思っ?」

「……人間?」

「我々はどこへ行くのか」

「さっきから何の尋問？」

「答えるよ」

「お慕」

「……………」

「だって答えようがないじゃん。そりゃ不思議には思っけど、あたしが出せる答えじゃないし。最終的にはみんな死ぬだし」

「…………君と話していると、考えるのがバカバカしくなる」

苦笑して、首をふる。阿見香らしいというべきか。

そして、笑いたくなる。思いつめていく自分のことを。

墓。死。誰にでも訪れる、今生の終点であるには違いない。平等に辿り着くところ。

阿見香本人はあまり考えてないのだろうが、あっさりとの衝いてくるのも感心させられる。

考えて気取った事を並べたり、物見高い意見をするよりはずっといい。うがった見方をしない率直な真剣さも好感が持てる。

彼女に対して、バカだと思うことは多々あっても、本質は愚かな女じゃない。それが彼女の面白いところで、手ごたえを感じる資質でもある。

地に足の着いた自分なりの意見を持ちながら、答えが出ないことを割り切って、悩みすぎないでいくのも人間の賢い選択だ。

自分を持つこと、割り切ること、悩みすぎないこと。それらも強い精神力を必要とする。

「言うだけ言わせて苦笑いするなんて、失礼じゃないの」

「ゴーギャンの絵の有名なタイトルを知らないのか」

「ゴーギャン？ って、自画像が上手くかけなくて、自分で耳をちぎったとかいう人？」

「それはゴッホ。ゴーギャンとは一時期友人だったらしいが」

「ゴだけ当たってた」

Vサインを振りながら、一人笑いで肌掛けの中に潜り込んでいる。

「得意げに言うなよ。一般教養も念入りに学習させたほうがいいな。週二程度でカリキュラムに……阿見香？」

……。

身動きが止まったかと思えば、即効で寝てやがる。

こいつは、俺を男だと、微塵も認識していないんだ。キスも、それ以上まで俺としておきながら、男として関わることを完全に除外している。

だから同じベッドでも、無防備にぐっすり眠れるのだ。……腹立たしいことに。

信用とかそういう次元の話じゃない。それを言えば、「前科だらけのあんたなんか信用出来ない！」と言い切るに決まってる。

異性として、まったく興味を抱かれない。悔しいが、そういうことなのだ。

「檀くーんっ」

学校に行けば、家では絶対に見せない笑顔を見る。

その眩しさが、憎らしくて、愛しい。

俺の前では絶対に見せない、あの男だけに向けられる笑顔が。憎らしくて、愛しくて。

……守りたい。ずっと、君が、そんなふうに笑えるように。

二度と会えなくなっても。二度と言葉をかわせなくても。

その笑顔をそばで見られる時間が、俺には限られていても。一生、見届けることはできなくても、守り続けたい。

俺が君の夢を見ても。

君が俺の夢を見る夜は、ないのだろう。

隣りにいても、届かない。

抱きしめても、届かない。

君が欲しくても、手に入れることができない。

君をこの腕に閉じ込めてしまえば、その笑顔も、輝きも、消えてしまふのを知っているから。

君が欲しいと願う気持ちよりも、その笑顔を壊したくないと思う気持ちが勝ってしまうから。

好きになつたと、言えない。

愛してしまつたと、言えない。

苦しめると分かっている、この身勝手な想いは、告げられない。

幼いときの、火司長に語られた言葉の真の意味を、君を通して分かり始めている。

どんな形であれ、人は支えあわなければ生きていけない。

支えあい、存在する。それだけのことだと。

肉体が減びても、大気となり土となり、他の生を助ける力となりながら。

今の俺には大きな力があるかもしれない。それは特別なことかは、
どうでもいい。

その力で、君のいる世界を、支えていけたらと思う。

一族と世界を守り導くのだと諭され、背負わされ、漠然と抱えて
きた不安や重圧が、君を見つめながら少しづつ溶かされていく。

見渡せば、沢山の人間がいて。知ることのなかった日常が溢れて
いる。

制服を着て、若々しさを弾けさせながら笑いあう生徒たちがいて。
いろんな笑顔があつて、社会を支えている様々な人間がいる。

君が生きていくこの世界が、幸せなものであるように。君が心か
らずっと笑顔でいられるように。俺ができることは、限りなくある
のだろうと思う。

いつか訪れる、さよならの時がきて。

十年後、二十年後に、もしも再会できたら。

俺は、激しい後悔に打ちのめされ、業火に魂を投じるような苦し

みを味わうのだろう。

どうして、そばにいたときに、手に入れてしまわなかったのかと悶えて、君のそばにいる男を粉々にしたくなる嫉妬に身を焦がすのだろうと、分かっているのに。

君は、そんな女になると、確信しながら。自分のものにしてしまえばよかったと思える女になると、確信しながら。

愛していると告げずに、生きていく。

けれど、俺は後悔していない。

君に出会えたことも、どうしようもなく惹かれていくことも。

眩しいものは、もう見たくないと思っていた俺だった。

希望や理想や笑顔を照らし出す光など、見たくないと思っていた。自分には必要がないと。

けれど、君の笑顔を見るためには、光が必要で。俺はそれを求めている。

君の笑顔を守るためには、希望や理想が必要で。俺はそのために、

どんな努力でもしたいと思っている。

犠牲じゃない。

君を守るために、できることをしたいだけ。

遠く離れていても、この世の中に自分ができるところを、していい
うと思っ。

持て余す重責と義務でしかなかった役割に、君に出会えて、初め
て希望を見出せたんだ。

個人的な動機だけれど、これからもずっと、それが俺の支えにな
っていく。

O? allions-nous? 我々は、どこへ行

くのか。

訊かれたら、俺の答えはもう見つかっている。

生涯、揺らぐことのない大切な想いを、抱きしめていく。

「俺は旅をする。君のいる光の中へ。

辿り着く場所はいらない。君がいる世界が、自分のすべてだから」

俺はどこまでも行こうと思う。愛する人のいる光の世界を。

いつか君の時間が終わり、俺の時間が終わり。違う時へと姿を変えても。

君が輝いてあり続けだろう、光の中に、俺もあり続ける。

それを永遠と呼ぶのなら。俺はきっと永遠に、君を愛していくだろう。

D r e a m a b o u t y o u くミカエルの憂鬱く

E N D

ミカエルの憂鬱 10 (後書き)

番外編・ミカエルの憂鬱にお付き合い下さり、ありがとうございました。
した。

本編のほうも、引き続き宜しくお願いいたします！

近日中に、読み切り番外編をアップする予定……なんですけど、
遅れたらすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2913j/>

EYES

2011年10月13日05時50分発行